
月に吼える

maisen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月に吼える

【Zコード】

Z3056Y

【作者名】

maisen

【あらすじ】

とある小さな山間の里。そこは人ならぬ者たちの住む里だった。ある月の綺麗な夜、一組の夫婦の間に、一人の男の子が産まれた。そこまではどこにでもある話。ただ、他と少々違っていたのは、その子は半人間、半分「人狼」の血を引いていた事。そして、何よりも…彼の名前は「忠夫」だったのです。

某所で昔々に投稿させて頂いていた物の改訂版です。色々あつてどうしても時間が取れなくなり、更新途絶していましたが、今度こそ

完結までいざな着けたいと思ひます。

序幕

「…あつーふざやあああー。」

月が出ていた。

あるいは丸い、綺麗な満月。

最も心地よく、最も強く輝く月が。

「お生まれになりました。元気な、男の子ですよ。」

月の祝福よあれ、と思つ。

「男子か…なんと大きな鳴き声か。末は立派な男となるな」

そんな物が無くとも、只幸せであつてくれとも思つ。

「さあ? でも…」

その微笑が、消えることの辛さを。失うことの悲しさを。生きる事の苦しみを。

「男の子だつたらつて、考へてた名前があるの」

月よ、神仏よ。叶うならば七難八苦を『えたもうつ事など無かれと願うのは、子を得た親の卑小な願いか。

「…つてつけたい。この子の名前」

己の人生の中で、それらこそが良き教師であり、同時に忘れられな
い疵である事を知っているからか。

「…か…。悪くない」

例え、その願いが叶わぬとしても。いや、叶わぬと知っているから
こそ。

「…ふふつ」

そう願うことは。

「…なにが可笑しい」

「久しぶりに見たわ。貴方の、そんな顔」
「…む」

我が子に幸せをと願うことは、我儘だとは思わなかつた。

「それで、何故？」

ならば、これが最初で最後の息子への想い。

「ふふつ。…真つ赤」

「名前の意味は！？」

「…はいはい」

「これは、願いでなく、誓いでわざなく

「 よ。そんな子に育つて欲しいな、って」

「つやつて生きていけといふ、想い。

「…ふむ。こゝに靈だ。なりば、息子も」

神に頼るのではなく。悪魔に縛るのでもなく。只、己の力で

「お前は今宵今晚、今この時より」

その未来を掴み取れ！

「 犬飼 忠夫と名乗るが良いー。」

「ね？ね？ うちの旦那、ああ見えて可愛いでしょ？」

「ええと、私に聞かれても…」

「…顔が怖いから」

「外でよく聞く『わやつぶもえ』とつやつへ 私には理解しかねるわ」

「旦那さんつき悪いからね！」

「あつ、赤ちゃん大丈夫ですかね？！ 食べられたりしませんよね？ ねつ？…」

月に見せつけるように、あるいは捧げもののように両の手で赤子を高々と掲げた男の尻尾が、それまでの勢いを忘れたように左右の運動を止め、ピン、と立てられた。

ゆづくつと振りむいた男は、「宝物を抱えるようにしっかりと赤子を抱えたまま、こめかみに血管の浮いた怒りの表情で大きく口を開け、

「きつ！ ……やまら静かにせんか」

声を急速に萎ませ、だが視線だけは睨みつけたまま器用に小声で怒鳴りつけた。

『…ぶつおつ…』

一斉に吹き出した男衆と、にやにやしながら赤子を受け取る為に細い手を伸ばす一人の布団から身を起こしている女性、そしてそんな女性とその旦那を見て、なんとなく分かるけど、でもなんだか納得がいかない！ という微妙な表情を浮かべて悩む女衆。

「 …つ…」

男は苦虫を噛み潰して吐き出すに吐き出せず、のど奥で唸り声を上げながら、しかしうつくりと赤子を妻の手に渡す。

対して男衆は、そんな食い殺さんばかりの視線を受けても、一応自重はしているのであるうが、畳に爪を立てたり必死な表情で口を押さえたりと様々であるが、一様に笑いをこらえるのに一苦労じごろでは足りない様であった。

「…暖かくして、ゆづくつ休んでおけ。拙者、ちと用事が出来たからな」

「はいはい、いつひらひしゃー」

賑々しい雰囲氣の中でも、生誕の証明である泣き声に全精力でも使つたか、はたまたもともと凶太いのか、ぐつすりと眠る赤子を抱え込んだ妻の頬を見た田によらず優しく一撫でした男は、怒氣を発しながら振り向く。

「…ぬ？」

男衆は誰も居なかつた。赤子を見に来た比較的若い女衆が腕を組んでいまだ悩んでいるのを横田に見ていた年嵩の女性が、呆れた様に開かれた襖の外を指さす。

「やー！ めでたいのつめでたいのつー！」

「酒が呑める呑めるぞー！ 酒が呑めるぞーー！」

「酒蔵開けるお！ 朝まで宴会だあつー！」

「…酒が足りない。確か長老の所に良いのがあつた」

『いよつしゃあつー』

「またんか馬鹿たれどもがあつー！」

宴会に足りない酒と肴を取りに 盗りに？ 駆け出した男たちを、真剣を抜いた男が一人、殺氣を撒き散らしながら追いかけていく。

「もつ。…貴方は、どんな子に育つかしら。ねえ？」

そんな囁き声が、いつの間にか田を覚ましていた赤子に、小さな手と、小さな耳と、まだまだ細い尻尾を持つた息子に優しくかけられて。

赤子は、言われた意味も分らず、しかしその両の瞳にまるいお月さまを映しながら、やがて空腹を訴えて火が着いたように大声で泣き出したのだった。

その後、さして大きくも無い里の某所では、自宅でそわそわと報せを待つていた老人と、追いついた剣鬼に挟み撃ちで一人残らず殲滅された馬鹿達がいたのだが、何事も無かつたかのように朝まで宴会が繰り広げる様子が見られたそうな。

それは昔々 　　　　と言つほどでもない過去のお話。

1匹の人狼と、1人の人間の女性の間に元気な男の子が生まれた、ただそれだけのお話。

彼らがどのようにして出会ったか。人間嫌いの人狼をどうやって口説き落としたか。

彼らには彼らの物語。誰にでも何かの物語。
これから語る物語は、「犬飼 忠夫」の物語。

人間と人狼の間に生まれたこの少年は、これからどんな物語を紡ぎ上げるのか？

いやはや、かのバチカンの地下に存在すると言つ予知魔「ラプラス」でもない私には、全く予想もつきません。

只一つ、私が言えるとすれば、そう、「彼に平穀は似合わない」といったところでしょうか？

はてさて、「今度の」「彼」はいったいどんなトラブルに巻き込まれてくれるのやら。

いまから楽しみで成りません。

え？ 私ですか？ 私など気になさつてもしょうがないですよ。

・・・ おやおや、もうこんな時間だ、そろそろ今回はお別れのようで。

また会えると、思いますか？

それでは、良い夢を

序幕（後書き）

むかーしに某所で投稿していたmaiseこと申します。仕事が忙しくなり、どうしても時間が取れなくて更新できなくなつていましたが、いつか続きをと圧縮して保存していたものがHDの整理中に発掘されました。

あの頃に比べれば随分と余裕ができたので、今度こそは、と、改訂版ではありますが、再びキーボードをぱちぱちやらせていただきます。

第一話

時は夕食時、場所は人狼達の住まう里のある家。

やや小さめのちゃぶ台の上に、いかにもただ切つて焼いて適当に調味料をかけました、といった風情の漂う塩気の強めなおかずと、山盛りになつた御飯が鎮座ましましている。

それをテレビを横目に見ながらがつがつとかき込む男が一人いた。

一人はそろそろ40代に差し掛かるかという、着込んだ和装の上からでも鍛え抜かれた身体が見て取れ、しかもその目つきの悪さといい顔の怖さと言い、泣く子も逃げると近所でも評判の男性だ。

その目の前にもう一人、口の中に残つた焼き魚の骨をぱりぱりと齧りながら、古めかしいテレビに向かつて足を伸ばし、しかし頭を刀の峰で叩かれ目的を果たせず、頭を抱えて悶えているまだ10代半ばかり超えたか、と言つた年頃の青年がいる。

見た目第一印象で言えば、どこか抜けっていて、なんとなく若さというか色々と持て余しているそうで、しかし身体にはそこそこ引き締まっておりまだまだ発展途上というイメージが強い少年である。

あまり似ていらない親子だ、とか。

父親に似なくて良かつたな、とか。

あいつ子種まで尻に敷かれてたんだなあ、とか。

近所ではそんな感じに語られるこの一人は、血のつながった親子

であり、父子家庭の父と子である。

「…忠夫よ」

「つつか～！？ なんだよクソ親父！」

ゴキン、と堅い物が少し柔らかめの物、はつきり言えば金属の塊でそれなりに重い刀の峰が、人の頭部に落ちる音がした。

ちやいまんがな！そんなわけあらへんやろー

ふおおおお…！

テレビから流れるあまり売れていない芸人の滑り気味な漫才と、何度も流れた乾いた効果音の笑い声と、人が一人畳の上を転がりながら悶える声を聞き流しながら、クソ親父と呼ばれた男性はなんでも無かつたかのようにお茶を一啜り。

しばしの間を置いて。

「お前ももうすぐ大人だ…靈刀は出るようになつたのか？」

「んにゃ。欠片もでね よ」

頭を摩りながら、しかし何時もの事なのか、僅かに眼の端に涙の後を残しながらも、忠夫と呼ばれた少年は最後の一 口をお茶で流し込み、空になつた食器を重ね、そのままテレビに向かつて座り込んだ。

父親はいたつて真剣な聲音で話しかけるも、上の空と詰つか聞いちゃいないというか。

まるで学校の事を聞く父親と、面倒くさそうに一 応答えは返している子ども、と言つた何処にでもあるような食後の風景である。

ワハハハハ なるほどなーってそんなわけあるかい！

「刀の腕は少しほは上達したのか？」

「おう、隣の犬塚のおっちゃんの居合は避けれるよ！」になつたぞ。
反撃した瞬間カウンター喰らつて意識飛んだけど」

「犬塚が？珍しいな、あやつが稽古とはいえお前が氣絶するほど

…」

「…いや、その、まあ、な…」

「またサボつておつたか」

冷や汗まじりに誤魔化そつとした少年の後頭部に、呆れの多分に混じつた視線が突き刺さる。溜息まじりながら、とりあえずまた攻撃されることはなさそうだ、と安堵して、忠夫は小さく息を吐いた。

「…まあいい。それよりも忠夫よ」

「…なんだ、親父」

声の重々しい雰囲気に、思わず振り向いた忠夫の目に、真剣な表情の父が「写り込んだ」。腕を組み、目を逸らさぬままにじつと熱のこもつた視線を向けられた忠夫は、だがしかし、怯むどころか、またか、と言った表情を浮かべる。

「やきゅうをみせる」

「！」とわる

「なぜだつ！」

「何故もクソもあるかいつ！ボールが飛ぶたびに尻尾振るな！埃がまうんじやー！」

「…むう

ああ、男所帯の切なさよ。

妻を亡くしてからというもの、それなりに気を使って掃除はしているつもりではあるし、たまに天氣の良い日は布団もきちんと干すようにはなった。

しかし、やはりというかなんというか。

一昔前のドラマなら、姑あたりが窓の桟を指でついつとやれば、うつすらと埃が積もる程度の掃除でしかない。男一人ではそれが限界だったのだ。まさに「四角い部屋を丸く掃く」的な。

顰め面で沈黙した父を、やれやれ、と忠夫は肩をすくめて鼻で笑つた。

「そんなどから狼じやなくて犬だとかいわれる 」

瞬間、忠夫の第六感とか生存本能とか慣れとかそのあたりの感覚に、はつきりと死線が見えた。宇宙世紀なら額のあたりに閃光が走つていたかもしれない。

本人も意識しない動きで跳ね上げられ、重ねられた両の掌は、その間に見事に刀を挟み込んでいた。今度は峰ではない、しつかり刃が向けられている。

「 うおおおおっ！ いきなり切りつけるんじゃねえクソ親父！！！」

「 犬ではないっ！ ！ 誇り高き狼だーーー！」

「 だああつー聞いちやいねえ！」

月の明るい夜。犬飼家の食卓は、騒がしくもドメスティックなバ

イオレンスが飛び交う戦場と化したのであった。

しばらく後、ボロボロになつてゐる居間で。

「つててて。ちくしょーー。親父の奴、本氣でやりやがつて、つてあーーーへ壊れるじやないかっ！」

ガサリ、と音を立てて瓦礫の中から動き出したのは、何処にでもいそうな　と言つには、見た目が奇異に写るのは間違いない。彼には大きな白い尻尾と犬の耳・・・いやいや、狼の耳がついているのだから。

とまれ、ボロボロの格好のまま彼は意外と元気に歩き出すとやはり、その歩みは全くなんの傷も負つていらない健康そのものに見えた　彼の部屋の襖を空けた。

「・・・あーあ、これで外と中を繋ぐ最後の線も切れちまつたか。
さて、どうすつかな~」

畳の上にもう何年もそのままです、と言つた感じに引いてある草臥れた布団の上に寝転びながら、彼は、忠夫は考えていた。

(母上が死んでから4年・・・。4年我慢か。母上の妹の百合子さん…ねばさんと言つてマジで殺^やられかけた。間違つてないのに。何でだ？　ともかく、連絡はついた)

布団に寝転がつたままで、部屋の隅にひよこんと置いてあるバッグに視線をやる。

(出て行く準備はできてる。外の人間が着てる服も手に入れたし、

少しだけお金もある)

視線を天井に戻し、そのまま屋根を突き抜けて高く、高く そこにある月を見るかのように。

(決行は次の新月。明け方に「」やつとでてくのが一番楽やな~)

体が疼く。ムズムズと、今から楽しみでしようがない。外の世界、2度目の世界。初めて覗いたのは母に連れられてであった。百合子さん以外の「母の家族」とやらは、こちらを見る目が嫌悪に溢れて、一度と会いたくないとしか思えない人たちだと子供心に思ったものであつたが。

(それでも、外は外だ。狭い里じゃなく、一日中歩いても端っこになんかつかないくらい広い場所。)

なんとなく体の中で湧き上がる思いが溢れそうで、布団から起き上がると頭でも冷やすつもりで縁側に立つてみる。

まだ幼かった頃、目的は違えど今考えている事と同じことを全く計画性もなくやろうとして、あつさり迷子になつた3年前の自分を思い出す。

(あんときやほんとに怒られたっけかー。親父に、犬塚さんと奥さん。長老や他の皆も)

狼は群れを大事にするものだ!その仲間が大変なことになつているのかもしれないのだぞつー心配しないわけがなかろづがつーー

(流石にそツーで謝つたんだよなあ。長老のあの言葉も効いたけ

ど（

兄上、置いてこぐの？シロを、おこてつけやひの？

（あんな田で見られけやあなた 年上といへば、謝りん訳にはいかんだろ）

記憶に残るのは、3年前の隣の夫婦の子供の顔。2歳年下の元気いっぱいの人狼の子だ。

昨日も散歩に誘いに来たが、あの顔はビリも記憶に残っている。

（すまんな、シロ。だが、今回お前を連れて行くわけにはいかんのだつ！）

なぜなれば

（俺は…俺はつ！

…嫁が欲しいんぢやああああああつー… つてはあつー… 思いつき声に出してもうたー！

…若さゆえのあやまちと詫ひが、持て余す。

「まずつ…決行か？ しらばっくれるか？ ちくしょー…失敗し「ワオ
ーン…」…ん？」

どこからともなく響いてくる遠吠。いや、何処からともなくではな
く

「拙者も…！」
「拙者も…！」
「腹減つたー！」
「嫁が欲しいぞーーー！」
「嫁さん持ち爆発しろーーー！」
「なんで人狼は女性が少ないんだーーーー！」
「ぱつきやろーーー！」
「肉くいてーーー！」
「ワオーンーーー！」
「嫁が欲しいよーーー！」

里中の独り者達の家からであった。

(…ああ、同士達よ)

なんとなく涙腺が緩んでしまつ忠夫である。

所々に混じつている食欲優先の遠吠えは綺麗に無視されではいた
が。

そして丹田はあつといつ間に流れ。

「さて」

あの後里中で近所迷惑の題目のもとに、妻子持ち男衆と独身が開催され、さらに煩くなつた所で女衆が参戦して独身勢が鎧袖一触に蹴散らされ、いやいやする夫婦達を地べたに這いつくばつた（色んな意味で）負け犬たちが血涙を流したりと色々あつた。

その次の新月の晩。忠夫は最後の準備をしていた。

「それじゃ、行つて来るよ、母上」

返事は返りない。この世界でも、よつぼどの例外でもない限り成仏した者には会えない。

それでも、挨拶はしていくべきだと思つた。

「何時帰つてくるか分からぬけど… それでも、帰つてくるから。来年の命日には帰れないかもしけれぬけど、許してくれよな」

最後まで、ほんとに最期の最期まで笑顔で逝つた母であった。それ以外を思い出にしたくないと言つた母であった。

「 いつてきまゆ」

だから。

出かける挨拶は、精一杯の、笑顔を見せて。

「 さつてと。長老は犬塚さんちで今朝送ったお酒でも飲んでるはず
だし」

ちなみにそのお酒、彼の父が床下に、天井に、壁の中など隠していたもの全てを見つけ出してこつそり長老宅の前に「おすそ分けです、犬塚と一緒にじうわ 犬飼より」と手紙をつけて置いてきた物である。

別に嘘ではない、が、彼の実父にばれたときが・・・まあ、それは置いておこう。どうせしばらく帰るつもりもないし、帰つてくる頃にはほどほりも冷めているであろう。多分。おそらく。きっと。めいびー。

「 ところは、シロにましませんがばれない、はず」

もしくは、とつとと布団にもぐりこんでいるか。大人の酒盛りなんて子どもにとつては煩いし酒臭いしで面白いことなど殆ど無いのだ。

彼女には申し訳ないという気持ちはある。が、今回ばかりは、そ

う、今回ばかりは彼女もいつしょに、と言つ訳にはいかないのだ。
主に「アブつきは勘弁と言つ意味で。

「親父は玉葱食わせたからしばらく動けないはずだし」

下手すればそのまま動かなくなりそうではある。

犬がタマネギを食べると、赤血球が破壊され、急性の貧血や血尿などを引き起こす場合があり、場合によつては命にかかわります。間違つて食べちゃつた時はすぐに獣医まで！

「今日の見張りの位置は確認済み、と」

人狼の超感覚が今回のミッションで最も障害になりえる物ではある。

が、基本的に責められる事を警戒するのが見張りである為、外から内は警戒が強くとも内から外はそこまで注意を払っていないと思える。身体能力も（逃げ足限定ではあるが）自信はある。最初のスタートで突き放してしまえば、追いつけない公算が高い。

だがしかし。

「・・・よし、いべぞつー嫁探しじゃあつーー ひやつほーー！」

おい、何か聞こえたぞつ！！
あつちだ！あつちからだぞ！
良し、回り込め、挟み撃ちだ！

！

「やあーっす……またやつてもうつたーっ……」

いかなる計算も計画も、本人がアホでは最初の一歩で台無しであった。

はてさて、先立つて見つけたこの世界。そろそろ歯車が動き出したので覗いてみれば、やつぱりその中心にいるのは横島 いえ「犬飼 忠夫」ではないませんか。この存在、全く、よほど世界に好かれているようだ。

時の流れは早い。彼が16歳、・・・そう、少年から青年と呼ばれる方が変わるくらいには成長した頃のようです。はてさて、どんな騒ぎが起きたことやら。なんと言つても、彼は何処まで行つてもトラブルに巻き込まれる典型的な「存在」ですからねえ。

第一話

「どこの馬鹿だこんな時間にこそこそとひー。」

「犬飼さんとの忠夫だよつ！…」

「なにい！？あの野郎、親子揃つて外で嫁を見つけるつもりだなつ！」

「まさか、いくらなんでもそんなアホな理由で…畜生あいつアホだつた！」

「そんな羨ましゴホンつ…けしからん理由で黙つて里抜けとは！」
「全くだ！何故拙者たちも誘わなゲホンゲホン！…抜け駆け野郎を許すなあッ！」

『応つ！…』

新月の為月明かりも無い暗闇の中、怒声と罵声、しかして中身は殆ど嫉妬の声を上げながら、十数人の男たちの声が響き渡る。理由はどうあれ士気が跳ね上がった彼らは、一部の呆れの視線も気に留めず、たいまつ片手に山中へと駆け込んで行つた。

残つた数人の男たちは、そんな彼らに同情とも憐憫ともつかない感情を抱きつつも、とりあえずは、と現在まさに脱走中の少年の保護者と、彼ら自身の上司たる長老に報告だけしておぐか、と目線で頷き合い、踵を返す。

山狩り真っ最中の男達とは違い、むしろびくか楽しむよつな、応援するような雰囲気をまとつた彼ら。余裕ともとれるその表情の源となつているのは、きっと家で待つ妻子なのだらう。

ぶつちやけ、山狩り参加者の全てが独り者。この辺、馬鹿騒ぎの中でもある程度は自重できるかどうか、それが嫁をゲット出来たか

出来なかつたかの分かれ目だつたのかもしれない。

その頃、里の犬塚宅では長老と犬塚家の父が差し向かいで盃を交わしていた。外の喧騒が聞こえぬわけでもなかろうに、いたつてのんびりとした様子である。

長老は、なみなみと注がれた酒盃をちびり、と一舐めすると、聞こえるかどつかと言つた小さな声で対面の男に話しかけた。

「…よもやここまで待つとは思わなんだよ」

40代半ばの、引き締まつた相貌を持つ男と、齡八十とも九十とも見える老人。その二人が交わす言葉も少なく、只、杯を重ねる様子は一種儀式にも似た雰囲気がある。

「…分かつておつたとも。あやつが里を出たいと願つていたことは、しかし、しかしだ。あの子もかわいい孫のようなもの。せめて群からはぐれても生きていけるだけの力を持つまでは、と、そう思つておつた」

それまで仏頂面だつた表情を僅かに綻ばせ、

「三年前じや。迷子になつて、やつと見つけ出して、ひたすらおびえているものかと思えば

とうとう堪え切れずに吹き出しながら、

「へへへ『楽しかった。友達もできた。それにずっとずっとひいろいんだよー? なんで皆外に出ないの?』か……。感じてしまったよ。もはや、この子は絶対に止まりん、止められんと、な

それでも瞳に寂しさを秘めながら。

「1Jの年になつて、ああいう輝きを見せられたと云つのは、堪えるわ。自分が化石のように思えてしまつた。もはや変わらぬ、変化できぬようになつてしまつたと、な

更に、その奥にまた別の感情を秘めながら。

「寂しくもある。じやが、楽しみじやよ。老い先短いこの身に、いつたい何を見せてくれるのか。もはや、ワシ等では想像もつかん。・・先が見えないことを楽しみだと思つのは、何時振りかな?」

人は、それを、その感情を。

「頑張れよ、我が

きつと『憧れ』と言つのだろう。

「可愛い孫よ

里の人狼達全てから父とも、祖父とも慕われる老人にとって、里の人狼達もまた子とも、孫とも言えるのだろう。そんな、優しくも励まし、背中を強く押す様な、しかし心配がほんの少し混じつた声ごと呑みこむように、老人は静かに酒盃を呷る。

「…どうした、犬塚。お主、この酒を楽しめんとは酒に対する罵流じやぞ？」

「…ヒック。」

「おまえ、どーも酒に弱いのだけは治らんの」

「じうあ～～、おつり、おうひ。お前はつ、嫁になぞ出さんぞおおおお～。ぐしごし」

「今日は泣き上戸かのぉ」

その一言だけで興味が無くなつたのか、両手からだくだくと涙を流し、酒瓶に熱烈な接吻を繰り返していく、いい歳こいたおっさんを視界から外す。

と、その耳に、どたばたと廊下を駆ける数人の足音が届いた。

「む？」

「ヒック？」

けたたましい足音と共に、先ほど形だけでも報告を済ませておくか、おつとり刀で引き揚げにかかつっていた男達がなだれ込んでくる。

「騒がしいの。一人の若者へらいに静かに送つてやらぬか

そう、また新たに満たした酒をあおりながら静かに宥めますか。が、男達はそれどころじゃないつ、と集落の方を指しながら、酷く慌てた様子でつつかえつつかえ言葉を何とか絞り出している。

「ちゅぢゅぢゅ長老つ？！ 犬飼さんが！？」

「あー、知つとる知つとる。だから騒ぐでないと言つといつが。む、ボチめ、相変わらず酒の趣味は良いのぉ」

「その犬飼さんが玉葱食べて逝きかけてますつ！」

長老の口先からアルコールの霧が生まれ、酒瓶を抱えたまま泥酔して眠りの世界に旅立つていた犬塚がその霧に包まれる隣の家で。

「沙耶…今逝く…」

1匹の人狼が亡き妻と再会を果たそうとしていた。

「わーはっはっはー！ 平安京にエイリアンの術ーー！」

人が4・5人は入つてもまだまだ余裕がありそうな広さと、這い上ぐるにはやや時間がかかりそうな深さ、飛び上がろうにもぬるぬると滑つて邪魔をする泥が成人男性の腰のあたりまでは仕込んである、そんな落とし穴だった。

罠を作るつもりか、暢気に地面を掘り返していた標的を見つけて逃げ道を塞ごうと回り込んだハンター達は、まさかの落とし穴製作中と見せかけてすでに完成してました、な状況に気付かず、全員綺麗に嵌つてしまつたのだ。

落とし穴に嵌つてから冷えた頭で考えてみれば、彼が掘り返し、周辺に積み上げていた土の量は、先ほどまで掘つていた穴に比べれば量が少なすぎる。

しかも、それが掘り返されて不自然になつてゐる地面の様子を隠してもいふと言つ、一石二鳥な誘導に気付かず、そして今現在、ハンターであった者たちは、その身で大量にあつた土砂が、一石二鳥どこのか三鳥はあつたのだ、と言つ事を身を持つて感じていた。

「さやー！ 忠夫ー！ あつさま、後で覚えてろよー！…」

自分たちじと埋め立てられる際に再利用されている、といつ意味で。

「忘れるまでは覚えとこいやるよつ。じゃなつー！ ここまで来て捕まつてたまるかっ！…」

「ばつかやひー！…」

負け犬の遠吠えを聞こ、忠夫は鼻で笑つてそのまま逃走を再開した。

至近に迫つた追つ手を発見した彼は、ゲリラ顔負けの罠の数々と、その機動力でひたすら追つ手を翻弄していた。

時には落とし穴に引っ掛け。

時には真つ黒に塗つたロープを足元に張り。

時には干し肉の中に匂いが漏れないように背脂で包んだ玉葱

を仕込む。

「」の様々な罠に引っかかり（特に最後）、追っ手はほぼ壊滅状態となっていた。

「ふつふつふ。情報を制す俺は戦いを制す！ 俺の方が鼻が鈍いからって、自分達の場所がわからんと決め付けたお前らの負けじゃー！」

「クウーン」

「おお、ありがとな、タマ。お前の鼻のおかげで助かったよ」

その傍らには1匹の獣の姿があった。何を隠そう、3年前にできた「友達」とはこの獣である。

迷子になつて、一人で途方にくれていたとき、何処からともなく現れて、慰め、食べ物を探してくれて、分け合つて食べ、一緒に寝て、里に着くまで孤独を感じじることなく過ごせたのは、この小さな恩人のおかげなのだ。

「さーて、あとはあそこに行つて最後の仕掛けをしたら完璧だな。ま、もういらんような気もするけどなー」

そういうて、獣を肩に乗せ歩き出す。その獣のお尻からは、

「ああ、もう一頑張りだ！」
「クーンー！」

小 わいながらも見事な九本の金色の尾が、ゆらゆらと楽しげにゆ

れていた。

はてさて3度目の対面となりましたか。

相変わらず彼の周りには人外がこぞつて集まつてくるようで。とはいえる、彼を慕うもう一人の少女が（彼本人は気付いておりませぬが）このまま黙っている？ そんなバカな！ それではあまりにも楽しくない！ ならば、彼女は追いかけるでしょう！ それが「彼」と「世界」の約束事ですから！

…まあ、別名「お約束」とも言われるものですが、そういうことは、「風情」がないでしよう？ それではまた会える時まで

良い夢を。

「ふいーーー」

ひとまず追手を撇いた忠夫は、土木作業で土と汗で汚れた身体を綺麗にし、ついでに匂いを消して追跡を難しくするために、三年前の大冒険で見つけた温泉に入っていた。

「あ、ああああ。風呂は命の洗濯じゃあ！」

今宵は新月、月のない夜。

「おーい、タマー？」

とはいえ、地上に光溢れる都會と違つて、ここは元々自然の光だけの深い深い森の中。

「気持ちえーぞ。入らんのかー？」
「グルルルルッ！」

月は無くとも星の光が天を満たし、そして半分だけとはいえる彼と、その相棒である彼女には十分すぎる光であった。

「うおっ！？何でそんなに怒るんだよつ！」

「グルルルルッ！」

「わかった！わかったって…もう何も言わんからそのまま古の後ろに居ろつて！」

「…ン」

天然の温泉、当然の「ごとく露天風呂に肩までつかつてリラックスする半人狼の青年と、一匹の、九本の尾をもつ狐を照らし出す。いくら追手は全滅させたとはいえ、まだまだ本命とも言える里の凄腕達はその姿を見せてはいない。ゆえに、油断することなく二つやつて念には念を入れて匂い消しまで行つてゐる。

「…キュー
ン
「…いーい
だな
ハハン
」
「…コ
ン
」

筈なのだが、緊張感の欠片もないのはきっと彼の性格ゆえなのだろづ。

温泉から上がつた青年、「犬飼忠夫」は、体をしつかりと隅々まで吹き上げると、先ほどまで身に着けていた服をリュックサックの中から引っ張り出したビニール袋に包み、口を縛つて地面に置く。

「とりいだしましたるは何の変哲もない洋服でござれーい

続けてリュックサックの中軽い口調でジーパンと一緒に上の上着、肌着を取り出す。

「コ
ン
?」

どこかの岩陰から狐の声が聞こえたが聞き流しつつ

「なんといれは今まで一度も袖を通した」とのないまゝやうの新品
！」

「」アーリヤとその服を身につけ

「これで匂いで見つけられる心配は無い！完璧つ！ こいつは——ふえ
くどう！」

額に真っ赤なバンダナを巻いて耳を隠す。尻尾は窮屈だがズボン
の中だ。

「よつしゃー偽装も完璧！」

おずおずと岩陰から顔を出した狐は、どこか未練がましい…まる
で折角なのだから恥ずかしがらずに一緒に温泉につかれれば良かつた
な、と妙に具体的な感情を見せながら、青年の頭に陣取った。

一方その頃人狼の里では

「…ああ、沙耶。今そっちに逝くよ」
「待てー！ 早まるなポチつ！」
「薬ー！ 医者ー！ 衛生兵はまだかつーーー！」
「待つてくださいー！ 他にも玉葱中毒の患者が多くて手が回りま
せん！」
「くつー！ だからあれほど捨い食いはするなと叫つておつたるうが
！」

「嗚呼、光が見えるよ…沙耶、もう少しだけ…」

「ボチイイイイイイイイイイ！」

「あ、頭痛い。飲みすぎたか?」

「何でお前はそんなに落ちついとるんだ犬塚ああああああ！」

「長老、元気いいですねえ。拙者、一田酔いで、もう一グダグダ

「親友の危機だろ？ が少しほら荒てんかこの薄情モーん！！ それにま

だ当田じやあーーー

「あ、それじゃ1田酔ー?語町が悪いなあ
つて、うわたたたた

「これ以上怪我人を増やさないでください―――い！！」

壯絶で混沌とした状況だつた。ポチの口からは既に魂が半分ほど出ている。

34

「お前の娘せどりしたへ」の轟^{ボル}が云ひなこさせ、ゆつ笑ひ声が座^リると睨^ハえぬが」

ん? という感じで不思議そうな顔をした犬塚家の大黒柱は、

— 2 —

何かに気付いたのか、慌てて娘の部屋に向かつて走り出し、いきなり部屋の扉を空け、

「…」これはつー！

布団の上に置いてある紙切れに目を通して、そのまま膝から崩れ落ちた。

「駆け落ちします。探さないでください。シロ」

「シロオオオオオオオオお！」

人狼の里に、今宵最も悲痛な悲鳴が木靈した。

「クンクンクンクン… む、匂いが薄れてきたで、」ぜぬな…」

父親が彼女の名前を叫んで今にも家から飛び出そうとし、慌てて

様子を見にきた長老とおもいつきりぶつかって一人揃つて頭を抱えて悶えていた丁度その頃。

「甘いで」^ハれるよ、拙者の鼻は追跡と狩りに優れた狼の鼻」

少しづつ忠夫との距離を縮めつつある一人の少女がいた。

「狙つた獲物は逃がさんで」^ハれるハ――」

「つ――なんだ今のプレッシャーは?――」

「「コン?」

急に乗っていた頭がきょろきょろと何かを探すように動いたので、驚いたのか頭上の狐は忠夫に疑問の籠つた鳴き声を駆けた。

対して少年は鳥肌の立つた両肩を両手でさすりながら、台詞に比べて警戒するでもなく変わらず不思議そうに周囲を見回している。

「あ、いや、なんと言うか…真つ赤な鎖が追つてくるといふか、むしろ桃色の『ハツ』に首輪? といふか」

「…「コン?」

その台詞を聞いてどんな考えに至つたのやら、忠夫の頭から飛び降りた狐は、一声鳴くと先導するかのように忠夫を振り返りながら急ぎ足で駆けだした。

少し進んだ先で、急かす様にその尻尾が揺れている。

「…ついてこいつてか？」

「コソ！」

「…まあいいか、行こうか、タマ！」

「キューん」

頼られて何処となく嬉しそうな顔をしたタマは、張り切って走り出した。

だがしかし、追跡者はその逃走する者達を嘲笑うかのように速度を上げていく。

行く手を阻む草木を薙ぎ払い、

「近いで！」やるな…」

殆ど崖に近い急斜面を駆け下り、

「もうすぐ…もうすぐ…」

そのままの勢いで大跳躍し

「見つけたでござるっ！」

その卓越した人狼ならではの運動神経で空中で体を捻り、着地地点を調整する！

目標地点は狙う獲物の眼前。そこに狙いを外すこと無く、勢いよ

く、だが殆ど音を立てることなく彼女は見事に着地した。

「兄上ひ……」

「つおひ……おまひ……シロかつ……」

突如空から降つてくるといふ荒業をかました銀の髪とその中に赤い一房の髪を持つまだどいか幼さの残る 数年もすれば、間違いなく美女となるであろう素材に恵まれては、いる 少女は、

「ぬあゼヤ」わるかつ？！

とりあえず主語もない色々足りない台詞をかましつつ

「ぐおひ……ぐるじひ……死ぬッ……マジでマジでつ……ぎ
ぶせがぶせーぶ……」

容赦なく青年を締め落としにかかった。

すつたもんだと色々あつて、しばしの時間の後、顔色が紫を通り越して土氣色に変わつた青年が何とか生還した時の第一声は、苦しみや辛さとは不気味なほどにかけ離れていた。

「……綺麗な川があつて、母上がいて、恍惚の表情でそっちに逝く親父がいてさ。……気持ち悪かったからぶん殴つて引き離した」

犬飼ボチ、九死に一生スペシャルであつた。まだ生死の境を彷徨つていたようである。

もう「コツヽリさー」一度と玉葱を丸齧りなんてしないよー。

「しつかし、よく俺の場所がわかつたなあ。完璧に匂い消したつもりだつたのに」

「へ？ 消えてないでござるよ？」

「え？ 何処に匂いがあるんだ？」

「その背中のばつぐでござる」

「…あ」

「…コソ」

忠夫、痛恨の失敗。同じく気付かなかつたタマは素知らぬ顔でそっぽを向いていた。相棒同士、一緒にどこか抜けていたようである。一人揃つて決まり悪げな雰囲気であつたが、しかしシロは気にすることなく半眼で台詞を重ねていく。

しかし、その瞳の中には、微かではあつたが寂しさと切なさが存在しております、そんな目で見られた忠夫は、頭をかきながらも誤魔化すことの無いように、せめて誠意を、と独り静かに決心した。

「…で。何故里を出たでござるか？」
「嫁探し」

即答。即、答える。質問の終わりと返答が被つていた位に素早い返事であつた。

何故かとてもいい笑顔で、親指立てて答える忠夫の前には、「へつ？！」という顔で只固まる人狼の少女と…「聞いてないわよつ！…」という顔でなんだか危険な雰囲気をかもし出している狐がいる。

なんと言つ事だらうか。彼が誠意をもつたばかりに、こんな不幸

な結果を生む」とにならうとは。もし、直後にあなる事を彼が知つていたのならば、数秒前の自分を全力で殴り飛ばしていたかもしない。

「ん？ ……どうしたんだお前ら」

「嫁探し……でござるか？」

「コン？」

星明りにかすかに照らされた周囲の空間が、僅かに暗くなつたようだ。雲でも出て来たか、と不思議そうに見上げる彼の視界に、小刻みに震える一人の姿は映つてはいない。

「ああ、そうだけど？」

「な・ん・で里の外に探す必要があるのでござるか？」

「…」

「そりやお前、里に相手がいないからだろうが」

轟、と音さえ立てて、一人の体から曰く言い難い圧力のようなものが吹きあがる。この時点で、忠夫は漸く異変に気がついた。

「…ほおう」

「…」

重ね重ね不幸なことに、それはもはや手遅れだと叫ぶなりの証明でもあった。

「… なあ、シロ?タマ?」

「何でござるか？」

「コン」

「コン」

忠夫は物理的な寒ささえ感じていた。その元となるのは、妹分であるはずの少女と、先ほどまで頭にのつけていた小さな相棒の視線だ。

「なんだかスッ、ゴク嫌な予感がするんですが？」

「…………」

片や両の手に力を込め、ポキポキとその細さに見合わぬ音を立てる少女。片や絶対零度の視線を込めながら、ゆらゆらと揺れる火の玉が幻視できる子狐。

危険度では同じくらいであろうつか。ストップ高だが。

「それに冷や汗が止まらないんですが？」

「流石兄上 銳い直感は人狼の能力の一いつでござるよ」「コン」「

暗い森に、断続的な轟音と爆炎が生まれ、最後の締めとばかりに大木を薙ぎ倒しながら斜め45度で忠夫と言つ名の砲弾が発射された。

「なんでじゃああああああ…………！」

忠夫は夜空を飾る一筋の流れ星になつた。

「……はつ！ しまった！ 逃げられたか！！！」

「コンツー？」

え、それだけ？ と、真横で思いつきり火の玉を投げつけて爆発させていたのにも関わらず、自分の存在をがまに入っていないと言つた反応をされて、こんな状況ながらも子狐は少女が少し心配になつた（頭の出来的な意味で）。

某温泉・女湯

「いや～今回の仕事は楽だつたわね～」

グラマラスな女神、と言ひ言葉を体現したかのような体を伸ばし、熱爛片手に温泉につかりながら、まさに極楽といった表情をしている女性。 美神令子がそこにはいた。

母親譲りの美貌と、悪霊との戦いの中に身を置きながらも陰る事の無い、宝石にも似たその華のある雰囲気。少々きつめの顔立ちながら、「絶世の」と呼んでも差し支えのない女性である。

「おキヌちゃんつて言つかなり便利な助手も新しく事務所に入ることになつたし、まさに棚から牡丹餅落ちまくつねー。ほーつほつほつほつ！」

「美神さーん！」

そこにまた一人、先ほどから独り言を喋っていた女性とはまた違う雰囲気をもつた女の子 女性と言つより、女の子と言つた方が正解だらう。特に美神と比べれば が現れる。

先ほどの女性を綺麗、と表現するのなら、こちらは可愛い、清純と言つた言葉が似合う。隣にふよふよと浮かぶ人魂と、地に着かない足、時代錯誤というか場所を考えない巫女装束を除けば、の話であるが。

とは言え、どちらがどう、でなく、どちらも大変魅力的な、と言つに異論は出ないだらう一人である。

「どうしたの、おキヌちゃん？」

「さつきすつごい爆発があつたんですよー！あつちの山の方で！聞こえませんでしたか？！」

「あー、別にいいわよ。依頼受けてないし。私はやーよ、ただ働きなんて」

「美神さーん！」

物理法則と言つものがある。

「困ったことがあつたならまた依頼が来るわよ

なんというか、ぶっちゃけた話。

「えー、でもー」

おもいつきり投げたボールは。

「そしたらまた儲け話ね」

いつか必ず地面に落ちるのである。

それに気づいたのは美神だった。夜空を切り裂き、火の玉が落ちてくる。湯船に横たわらせていた身体を跳ね上げ、手近なバスタオルを引っ掴んで身体を隠し、戦闘態勢をとろりとして、気づいた。道具が無い。神通棍も、破魔札一枚も、無い。舌打ちしながらイヤリングとして身につけている精霊石に手を伸ばす。

コストパフォーマンスは最悪かもしぬないが、自分の命よりも高い物などこの世には無いから諦めもつく。：つかないかもしぬないが、いや絶対つかないが、その時は相手に地獄の鬼も土下座するような責め苦が待っているだけだ。

そういじていろひじ、それは何物にも遮られる事無く、温泉の湯船に着弾した。

床のタイルに走る鱗、巻き上げられ、撒き散らされる温泉の湯、吹きあげられた湯気は、彼女達の視界を一瞬にして奪う。

「くつ！ いったい何よ？！ 私に喧嘩を売ろうなんて、いい度胸してるじゃない！」

「美神さん！ あそこへ、誰か居ます！」

そして　彼らのファーストコンタクトは

「嫁に来ーい！！！！！」

「死ねこのハリウッド級アクション痴漢！！！」

電光石火の右ストレートから始まつた！

クスクスクス…。おやおや、彼らも相変わらずなようだ。何処に行つても、どんな時でも彼らは「ああ」だ。アレだけ変わる流れの中で、変わらない事を保ち続けるとは……いやはや。これだから、「おもしろい」。まさこ世界は綺羅星の「」とぐ。

ああ、挨拶が遅れてしまったね。こんばんわ？おはよう～。それとも、こんには、かな？

さてさて、やっぱり彼らは出逢うのか。ただの偶然？　っは！それこそマサカ、だ！あるべくしてそうあった。それだけのこと

だよ。

わづ、それだけの、只、其れだけの

いや少々興奮して、喋りすぎてしまつたようだね。

まあいいや。

たまにはこんな時もある。今日ほこの辺で失礼せ
ていただくよ?

それでは

良じ夢を

朝日が昇る。小鳥の囀りが聞こえて、しかも今日は快晴の予感がする。

こんな日に、気持ちよく目覚めることができれば、それは、一つの幸せではなかろうか。

「…おい、生きておるか?」

「…ああ、なんとか、な」

「動けぬか?」

「無理」

朝日が昇る。小鳥の囀りが聞こえて、しかも今日は快晴の予感がする。

太陽は山影から顔をのぞかせ、地面に埋まつた身体はともかく、一晩中助けを求めて声を出し疲れ切つた彼らにゆっくりと暖かな光りを与えていた。

「いい加減誰か助けにきてくれんかなあ…」

「忠夫め、次会つたら覚えておれよ…」

かの少年がしかけた落とし穴にはまり、『十寧にもと言つべきか、

それとも武士の情けと言つべきか、頭だけは埋められずに地面から生えた生首と化している彼らは、一晩中だれの助けも得られぬまま、疲労と空腹を抱えている。

悔しさゆえに、きりきりと歯ぎしりをする隣の男の声を聞きながら、里を覆う結界にほど近いこんな場所では、助けが来るのほどほど後になるかと考えて、もう一人の男は溜息を吐いた。

「だーれーかー！　ふぬぬ…っ！　出してくれー！」

「…そのひが誰か居ないのに気付いて、助けに来るさ」

「馬鹿たれえいつ…！」

諦観半分、楽觀半分で呟いた男に、怒声が襲いかかる。

耳も塞げない状態で耳元で吐かれた大声に顔を顰め、そちらを向いた男の目に、嫌に焦つた表情と、だらだらと流れる冷や汗まみれの、男の見苦しい顔が入った。

「いいか、拙者達は昨日から散々騒いでおる」

「あ、ああ。まあな」

「しかも口が出た。そして…」は里からも程よく遠い

「だから腹も減つたし困つてるんだろ？」

今一要領を得ない、そんな風情の男に、舌打ちをしながら焦つた

男は、危機感をたっぷり乗せたまま、その理由を吐きだした。

「死ぬぞ」

「え？」

「このままだと死ぬ

その言葉につられたように、がさがさと背後の草むらが蠢いた。のそり、と巨体を揺らし、搔き分けて出て来たのは…一匹の勇壮な霧囲気を纏つた巨大熊だった。

片方の田に走る古傷の跡。やや赤みがかつた剛毛が覆うその身体は並みの熊を優に超える膂力と威圧感を持っている。

獲物は、ぎろり、と片眼で見降ろされていた。

「え？」

「だからさつきから必死で助けを呼んでおったのだ…！」

「うわー！？ 死ぬ死ぬマジで死ぬっ！－！」

「黙つて口から靈波刀をだせっ！ いいか、片方が助けを求めて、片方が靈波刀で牽制つ！ 霊力が尽きたら最期だ！ 拙者の命、貴様に預けるぞ！」

「カツ！」といつもりか知らんが現状凄い情けないからなつ…？」

それから助けが来るまでの二時間と三十一分、彼らは色々と振り絞りながら頑張り続けた。救援に担がれ里に戻った時にはすっかり精も根も尽き果て、次に目覚めた時は互いに無事であつた事を喜びあい涙ながらに抱きしめ合つた。

余談ではあるが、その後、抱き合つた時に感じた、やたらねつとりとした視線のせいいかは分らないが、里の一部女性に暫くなんとか腐臭の漂う視線で眺められる日々を送つたそうな。

「全く・・・いきなり降つて来て、全然怪我した様子もない上に、第一声が『嫁に来い』? ふつざけた痴漢ね」

「その怪我しなかつた人をいきなり重症一步手前まで殴り倒した女神さんもすごいと思いますけど…」

犬飼 忠夫が二コートンに負け、鄙びた温泉の女湯に落ちてからしばらく後、そこには浴衣を着こんだ美神と呼ばれた女性と、明らかに地面から浮きつつ、人魂を纏わせた「幽霊の」少女がいた。

痴漢を右ストレートの一撃で沈めた後、急いで着替えを済ませた美神は氣絶した少年を浴場からロビーへと足を引っ張つて引きずり出していた。

少年が引きずられた後には血の跡が残つており、ホラーなゲームや映画も真っ青な演出となつてゐる。すれ違つた従業員達はそれを見てまた何か靈障でも起つたか、と戦々恐々としていたのは然もあらん。

そのままの流れで遠田に見守る従業員達にとりあえず警察でも呼んでもらおうか、と声をかけようとした彼女の靈感に、ふと何かが引っ掛かる。

「うん？この子…なんか変ね。おキヌちゃん！荷物の中から呪縛ロープと、靈視ゴーグル持つてきて頂戴！」

「呪縛ろーふ？れいじーーぐる？…ふえーん、わかりませーん」

「ああ、そりゃそうよね…しょーがないわねえ。ちょっと見張つてよ、多分あれだけやつとけばしばらく動けないと思つけど」

「はあー」

頭を搔きつつ自分の部屋に戻る浴衣姿の美女と、それを元気一杯に見送る幽靈美少女の後ろでは

(ヤヴァイ！呪縛ロープとか靈視ゴーグルとかつてＴＶでやつてた靈道具じゃねえか！ＧＳなんぞと事かまえるわけにはいかん！)

すでに流れ出る血も止まり始め、戦術的撤退を考える半人狼の青年がいた。

(…ああっーでも、年上の美女に縄で縛られるのショコショコエーン
ン…何かに目覚めそうなつ！…)

訂正。ただのバカがいた。

「あ、おキヌちゃん」

「あれ、どうしたんですか美神さん？」

ど、部屋に戻ろうとしていた美神が、廊下の曲がり角から顔を出し、おキヌに向かつて何かを放り投げた。

長方形の箱から金属の針が一本突き出しているそれを指さし、美神は言つ。

「そいつが目を覚ましそうになつたら、それを首筋に当てる、横のスイッチ押しといてー」

「えつ、…」、これ、何ですか？」

答えを求めて手元の箱から視線を上げても、返事は帰らずひらひらと振られる手が廊下の曲がり角に消えていく所であつた。

（どうする…どうする忠夫！…このままここにいればGUNに睨まれるかもしれません！…しかし、外に出て見つけた嫁候補第一号！…しかもすこぶるつきの美女…！…もつたいない！…もつたいないぞおおおつ…！…）

「わやあー」

「うえつー」

どうやらいつのまにか口から出ていた忠夫の心の叫びは、近くにいた幽靈少女を驚かせ、その悲鳴が更に忠夫本人も驚かせたようである。思わず、といった様子で箱の横に着いたスイッチを押しこみながらそれを突き出す少女。

「え、えいつ！」

「あばばばばばばばばっ？！」「

ほどばしる雷光。目を瞑つたまま明らかに改造されているであろうスタンガンを押し当てるおキヌ。まさかこんな可憐な少女がいきなりきつつい攻撃をしてくるとは夢にも思わなかつた忠夫は、しばしひкционビクンと踊り狂うことになる。

「わー、これすー」「ーー

「し、しご、しごれつ！？ いきなり何すんじやねーちゃん！」

が、そこは人狼故か忠夫故か。

目をキラキラさせて文明の利器を物珍しげに眺める少女に、対してダメージを受けた様子も無く、やや黒焦げていながらも文句を言いに立ち上がる。

と、そこで初めて一人の視線が絡んだ。

「あ、ご、ごめんなさい！ 私びっくりしちゃって！ 大丈夫ですかっ！？」

「…はつはつはー 大丈夫だよー ほーらこなに元気ー！」

心配する少女の顔を見て、本当に心からこちらを案じていると感じた忠夫は、その少女の優しさに空元氣（とも言えないが）を見せつけるように慌てた様子で両手を振りまわして見せた。

「良かつた…。本当にごめんなさい…」

頭を下げる少女を見て、忠夫は思つ。

- 一、器量良し
- 二、性格良し
- 三、…押しに弱そいつ？

「分つた。だつたら俺の嫁に来ないか？」

「何がだつたらなのよこの馬鹿つたれーー！」

とりあえずおキヌを口説き？はじめた忠夫への返答は、少女の悲鳴を聞き駆け戻ってきた美神の十一分に靈力の籠つた神通棍の一閃であった。

後頭部にそれを食らつて今度こそ崩れ落ちる忠夫。

トドメとばかりに踏みつけられながらも、彼ほどこか満足げであったとか無かつたとか。

で、それからしばらく後。

「で、なんでこんな所にあんた見たいなのがいるの？」

再び忠夫が目覚めてみれば呪縛ロープでぐるぐるに巻かれた己と、

「あんた、人間じゃないでしょ？」

神通棍を輝かせながら額にいくつも井桁を浮かばせた美神がそこにいた。

「…なななんのことでせうか？ わ、私はどっこでもいる「ク普通の一一般村民ですよ？」

「へえ？ じゃあその頭から生えてるお耳は何かしら？」

その言葉に慌てて耳を隠そうとし、完璧に拘束されている為腕が動かせず、じたばたともがく忠夫の額にはすでにバンダナはなくしつかりと、狼の耳が生えていた。

「い、い、これは、ですねえ？」

「これは？」

「そのお…あの…ええと…」

「……」

どんどん纏う霧囲気が冷たくなり、温度を下げる美神の視線にさらされながら忠夫は必死に考える。

相手はおそらく「ーストスイーパー。テレビで見た限りでは、魑魅魍魎、悪鬼羅刹を相手取り、祓い、討ち、滅する事を生業とするその道のプロ。

転じてこちらは半分とは言え妖怪。しかも誤解とは言え女湯に飛び込み、ちょっと持て余した若さのせいで理性が飛んでしまった事もあつて、裸の女性に飛びかかった前科持ち。

不味い。この状況は不味い。下手な誤魔化しは通用しそうにない女性が相手である上に、立ち場も悪けりや印象も最悪である。

せめて、この雰囲気を、怒っている女性を上手い事宥めて見逃してもらえるように交渉できる雰囲気を作らねば！

そう、こう、何か雰囲気を和ませるような小粋なジョークとかい
いんじゃないかなっ！？

「…お、お前の綺麗な声を良く聴く為やー。」

「…赤ずきんちゃんって、狼に食べられちゃになつたのよねー」

「うう、誤解じゃあああああつー!？」

理論はあまり間違っていないのに、結論がずれていたようである。

一通り、忠夫のライフはもう〇よ！の一歩手前までしばかれ倒した後の事。美神は何処となくすつきりした様子で、ぼろぼろの忠夫の涙ながらの話を聞いていた。

勿論正座した彼の眼前には未だ仕舞われぬままの神通棍がぶらぶらと揺れており、それが目の前を通るたびに彼はビクリビクリと震えている。

「へえ？！ 半人狼！ いまどきめつずらしいわねえ。人狼が人との交流を絶つてから、もうずいぶん経つわよ？」

「ええ、まあ色々あります」

「んで、そんなレアな存在がどうしてこんなところにいるわけ？」

「嫁探し」

即答しつつもイイ笑顔で答える忠夫に、呆れた溜息をつきながらも美神は神通棍をしまい、

「はあ～。まあ、確かに人狼と人間が結ばれた話はあるけど……」

「ねえ、美神さん。るーپ解いて上げましょ～」

「まあ、悪い子じゃなさそうだしねえ……馬鹿だけど」

苦笑いを浮かべつつロープを解いてバンダナを返してやるのだった。

「それで、これからどうすんのよ? 女性をさらうつてこいつのなら、しつかりバツチリ極楽へ送つてあげるけど?」

「はつ?」

本当に、全く考えてもいなかつた事を言われ、固まつた後、忠夫は「なーにこいつてんすか! やつぱ愛がないとダメでしょ?!. 愛がなきやあ!..」

「己の信念を笑顔で返す。

「…ふーん、まあそれなら良いけど」

対する美神は、どこか全く興味がないようでいて、しかし微妙に苦笑いを零しながら、その言葉に心の隅で何かがカリッと引っかかれたような戸惑いを感じていた。

(…なんだろ。これ。なんだか、すくなく懐かしいような…)

「えーと、犬飼さんは、これからどうなるお積りなんですか?」

美神はいつの間にか呆けていた事に気付き、おキヌの言葉にはつと意識を田の前に向けた。

先ほどまでボロボロだった筈の少年は何時の間にか元気そつな素

振りになつており、それを見て、若干心配そうだったおキヌは、ほつとした様子でほだいたロープ片手に話しかけていた。

「とりあえず、母上繫がりで連絡とつてあるんで、そっちの方にでも行つてみようかな、と」

「へ、へえ、ビニ～」

呆けていた事を誤魔化す様に放つた言葉には、しかし本人さえも意識しないような、別れを惜しむ気持が僅かに籠つている。

「東京っス。といつても、自力で生きていけるよつと頑張るつもりっすけどね」

「ふーん。…あんた、犬飼忠夫って言つたわよね？」

「嫁に来ますか？」

「行くかっ！」

とつても不機嫌な表情で、でもどこかに楽しげな色を瞳に浮かべたまま、美神は言つ。

「あんた、私の裸を見て、無料で済むとは思つてないわよね？」

「…え」

「やはり、と意地悪そうな表情を浮かべた美神の言葉に、忠夫はかちりと動きを止めた。止めざるを得なかつた。

多少の持ち合わせはある、と言えばある。しかしそれはこれから生活費だつたり食費だつたり、その他にも色々と必要なものを入手するために取つて置きたい貴重な資産だ。

これから先に自力で稼ぐ機会に何時めぐり合えるか分らない以上、できる事ならば使いたくは無い。使いたくは無いが、目の前の女傑が「払いたくありません」で許してくれる訳もない。

しかし、意地悪な表情を、悪戯っぽいものに変えた美神は、笑いを堪えるよつに動きを止めて冷や汗を流す忠夫に、一本の蜘蛛の糸を垂らす。

「分つてるわよ。ビーセ大金なんか持つてないでしょ？ なら、体で払いなさい」

「そー言つことなら今すぐにでも……」

台詞とともに服を脱ぎながら飛び上がった忠夫の頭部に彼も細くできないほどの速度で神通棍が振り下ろされた。

冷たい廊下に熱いキスをしながら、ゆっくり頭を上げた忠夫の目に、先程までの暖かさの無い、絶対零度の視線を向けてくる仁王立ちの美神が写り込む。

「…労働力を提供しなさい」

「了解しましたっ！」

ルパンダイブをかましつつランクス一枚で凄まじい勢いで尻尾

をはためかせ飛び掛つたところを、カウンターで沈められ、これから先の上下関係をしつかり叩き込まれた忠夫であつた。

「まったく…まあ、荷物持ちもできる、人狼の血を引いてるから靈力も使えるはずだし、超感覚もついてくる。…拾い物、なのかしら？」

はやまつたかなあ？ という顔で佇む「いくら分働く」という額の提示をしなかつた美神と

(うわあ、男の人ってすごく筋肉がついてるんだあ)

意外に引き締まっている忠夫の体を見て、真っ赤になりながらも目が離せないおキヌの上に、いつのまにか、涼しげな、透き通るような朝日が差し込んでいた。

その頃、某所では。

「兄上——！あつにいうつええ——！何処で『』ぞるか——！—」

「ノイズ」

「」のバカギツネエエー！ 少しは手加減するで！ ジゼルのよおおお

「グルルッ！！！」

「 もうでいいやるかねえつーー。」

「グルルルルルルウツ！！」

吹き飛ばした彼の事をつかり忘れ、互いに本能で感じ取ったライバルを減らさんと、爆音と炎を撒き散らしながら自然破壊にいそしむ二人がいたとか。

「あれ？ 犬塚さん、どうなさったんですか、そんなボロボロで」

「……娘が……反抗期かも知れないと……」

そんな真っ只中に娘を発見して飛び込み、気づかれる事無く巻き込まれ、気付いた時には完全に見失つて失意のままに里に戻り、未だに魔されている者たちの面倒を見ていた女性に相談するとある父親の姿もあつたとか。

彼らは出会つた。この世界の歯車が回りだす。今度こそ、なのが、漸くなのか。待つて待つて待つて、しかし期待は裏切られ……。だが、諦め切れずに、この様か。

「おひと、「やあ」またまたお会いしたね。

すまないね、ここに誘われる者は多くない。未だ客人の君を放つておくなんて、少々礼を欠いてしまつたようだ。

お詫びといつては何だが、お茶を一杯ご馳走しよう。まあ、物語を聞きながらでも飲んでくれると嬉しいな

第四話（後書き）

序盤は特に修正や書き直し部分が多いため、思ひよのうに投稿速度があがりませ。

ちよつと遅くなつてますが、あしからず。

昔見ていた、覚えている、と書つ方が結構な数いらっしゃって、大変嬉しく思つております。暫くはリハビリも兼ねていてる為、感想を返せるほど余裕ができるから、返信したいと思つます。ご容赦くださいませ。

そこは本当に古い木造アパートだった。

築数十年程度では効かないであろうそれは、しかし古い建造物であるが故にか、独特の丈夫さを誇っていた。

さすがに後付けであろう窓ガラスや換気扇は、どう見ても動くのが怪しくはあつたが、何本もの太い柱に、木造ながらも隙間風の吹きこむことが無いしっかりした壁。住居に使われる木材が現代よりも安く、手に入れやすく、また、それを建てた大工の腕が良かつたせいもあるつ。

とは言え、もはや建てられて何年経ったか不明な程度には古い建物であつたが、管理人もそれに相応しい程古いやいや、枯れた…と言づか、年経た老婆であつた。

とりあえず一軒目に訪れた不動産屋で、馬鹿正直に「戸籍が無い」と伝えると、何故かタバコを咥えたえらく渋い雰囲気の従業員は、溜息混じりにまたか、と言つた風情を漂わせながら、取り出した地図に小さく丸をつけ、忠夫に向かつて放り投げた。

それを受け取り、背中に「まだ若いんだから、さつとお日様の下を歩けるようになれ」とよくわからないが暖かいお言葉を頂き、目的地へと移動。

そこにあつたのが見た目に古いアパートで、その日の前の道路を掃除していたのがこちらも古い人物だった。

紹介してきた事を伝えると、老婆は一言、一月当たりの家賃だけを伝え、忠夫に空き部屋の物らしい番号札が着いた鍵を渡して掃除に戻った。

で、行ってみれば意外に掃除の行きどりた、独り暮らしには十分な広さの部屋。

幾らか首を捻る様な展開があつたものの、家賃は安いし中は快適そうだしでもあいいかとそこには決め、とりあえずの家賃を老婆に渡し、これからよろしくお願ひします、と頭を下げたのだった。

で、そんな彼が今何をしているのかと言いつて、予てからの予定通り、無事東京に着いた事とかを叔母に連絡しているのである。

「 そういう訳で、GIG助手つて形で雇つてもいいことになつたよ」

「 ああ。…だいじょーぶだつて！」

「 え、なに?戸籍?作つといたつて…んな、どうやつて?」

「 あー、母上の実家の方から、ねえ。まあ、あんまり寄りたくないんだけど」

「 へ? 学校?! 行けつて…んな無茶な?！」

瞬間、受話器の向こうから怒声と、スピーカー越しの箒なのにはっきりと見える叔母の逆らう氣さえ起らないような鋭い眼光を感じ取つた忠夫の尻尾が、天を指して伸びきつた。

「マム・イエス・マム！ すんまつせんした！ だからお仕置きだけは勘弁してください」

電話ボックスから身体半分をはみ出させながら受話器に向かつて土下座をする少年の姿は、通りがかりの人達からは非常に奇妙なものとして映った。

「うん、ありがと。またね、百合子さん」

最後にがちやん、と音を立てて受話器を戻す。そして電話ボックスから一步踏み出してひと伸び、その瞬間、彼の目の前に、自転車に乗った爽やかな笑顔のあんちゃんがブレーーキ音とともに現れた。

「犬飼さんですね？ お届け物です！」

「…え、あ、はい。どうも」

「では、またのじ利用をお待ちしていまあああああ…」

そして忠夫に封筒を渡した彼は、ドップラー効果を伴いながら、都会の雑踏へと消えていった。

封筒を開けてみれば、中には『籍謄本やら学生証やらの書類が沢山と、手紙が一枚。

『アパートの方に教科書とか制服は届けておくのできちんとサボらず行くように』との事。

電話をしながら準備をしたのであらう叔母の手回しの良さに驚く

べきか、短すぎる時間で伝えても居ない電話ボックスへ届け物を配達した自転車バイク便のあんちゃんが凄いのか。

「…都會つて忙しないとは聞いてたけど、ほんまやつたんやなー」

と、深々と何度も頷きながら、少年は改めて封筒の中から一枚目を取り出した。

「えーと、養子つて事で登録してあんのか。…よこしま、『横島忠夫』、か。なんかしつくづくる…のかな?」

家の玄関が閉まる音を聞いて、英字新聞を読んでいた男性は顔を上げた。

リビングのドアを開いて肩をたたきながら戻ってきた彼の妻は、小さく溜息をついてソファーに腰掛ける。

「おー、どうだつた?」

「無事に届いたみたいよ。あそこは仕事が早いわねえ」

仕事が早いといふか、時間を超えているレベルである。

だが、夫はその言葉に苦笑い込みで首を振ると、そつちじやないよ、と目で伝えて来た。

ああ、と先程までの電話相手の事に思い当たり、妻は額を押されて眉をひそめる。

「…「うーん。大丈夫だとは思つけどねえ。姉さんの子供だし」

「あー。確かにない。あの人の息子だもんなあ。何処に行つても死にやあしないとは思うが」

「相変わらずうちの実家苦手みたいだし」

当時の事を思い出すと、未だに頭を抱えたくなる。

「まあ、長女が連れてきたお相手が、なあ？」

「人狼つてーのは良いのよ。うちの家系なんて人外なんかアレだし。人狼は情が深つていうし。なにより、姉さんすごく幸せそうだったし」

別にかの人狼が気に入らなかつた訳では無かつたし、まあ本人が決めた事だから、と結婚それ自体には反対する者は居なかつた。

だが、ある一点だけ、それが為に、彼らの息子にまで妙な視線が集まつてしまい、まだ小さな子供だった彼には随分と不安な思いを抱かせてしまつたようである。

しつこいようだが、繰り返すと、人狼である事は特に問題にならなかつた。では、どうしてそんな事になつたのかと言つと。

「そこまでは良かつたんだがなあ。何せ」「『なんていうか』

「『名前が『ポチ』だもんねえ（なあ）』」

そのせいで忠夫は「ジロ」とか「ギン」のような、（日本人の感性として）変な名前なんぢやないか、ととばつちりと勘違いで妙な視線を受け、やや苦手意識を持つてしまつた忠夫であつた。

かくして、これらが東京に着いた後、美神達と別れ、まず犬飼いや、ここからは彼の偽名、「横島忠夫」と呼ぶことにしようと横島忠夫が一番最初にやつた事であつた。

幸い住居の方は里から持ち出した資金でも問題無く見つける事ができたし、叔母とのコンタクトもうまく行つた。

…と言つのは彼の感想であつて、突つ込みどころも多々ある気がしないでもないが。

ともあれ、足場を固めることに成功した彼の次の課題は、

「さて、GJU美神除霊事務所、か・・・。初出勤と行きますか！」

とつあえず、無事に生き残ることだらけ。

そして、彼はGJG美神除霊事務所の看板が掲げられたとあるビルのドアを開ける。

「ちわーっす！..！」

「あ、犬飼さん」

意氣揚揚と出勤してきた横島を出迎えてくれたのは、幽霊ながら筆で部屋の掃除をしているおキヌ。

伊達に何百年も幽霊をやつていいわけではなく、こういった仕事も得意分野である。

「あ、おキヌちゃん。うーむ、流石、家事万能なんだねえ」

「え、えへへへー」

頬を染めながら照れる美少女に、おもわず「是非俺の嫁さんにー！」と言い出しそうになつたが、ぐつと堪えた。今は優先事項が他にあるのだ。

「嫁に来な」「ホン」「ホン！…あー、そうだ。俺、色々あって戸籍ができたんで、そつちを乗ることにしたんだ。横島、横島忠夫っての。改めてよひしべー。」

「あ、はー、よひしべお願ひします。えっと、横島さん…。」

「よひしべ、おキヌちやん。そつだ、美神さんは？」

「美神さんなり、今書斎にいらっしゃると御こますよ。」

堪えたつもりでひょっと頭を出しかけたが、誤魔化せたよつので良しとする。

先ずは、雇工と、色々と話せなければならぬことがある。特に給料とか。

「へえ…横島、ねえ」

「はー。おば…畠山さんとが色々と、手配してくれて」

「何者よ、その畠山さんとつて？」

「…わあ

ジト田で横島を睨む美神と、何故か止まらない汗を流しながら見返す横島。

「…あいいわ。ところで、あなたの給料だけ、ちょうどいいわね。今から除靈に行くから、そこで働きを見て決めさせてもらいつ

わ

「はい？」

美神はニヤリと不敵な笑みを浮かべ、先程まで見ていた書類をテスクの上に置いた。その表情を見ながら、汗は引いたが、今度は背中に悪寒が走るのを横島は感じたのだった。

「で、今日の仕事はここ一ギヤラは5千万。たいした金額じゃないから手早く済ませましょ」

「うわー、おつきなビルですねー」

「そうだなー」

背中に巨大なリュック、両手にはステッケースのようなものを持ちながら、全く疲れた様子を見せない横島と、その隣でビルを見上げて声を上げるおキヌ。

なんとも緊張感のない一行である。

「しつかし5千万でたいした金額じゃなって、G5つて儲かる職業なんやなー」

「すつごいんですねー？ 5千万つて

「言つてみたけどよう分らんなー。なんせ金に殆ど縁がないといひ

で過ごしどったから

なにせ住んでいた場所が外界とは隔絶された人狼の里である。お金が必要になることもなかつたし、使つたのも今回のアパート確保がほぼ初めての横島である。金銭感覚など無いに等しい。

「むう…なんにせよ、この仕事の頑張り次第で給料が決まるからな！ 頑張ろうおキヌちゃん！」

「私はお給料決まつてますけど、初めてのお仕事ですから、頑張ります！」

初仕事と気合を入れる2人を余所に、依頼人と交渉していた美神は上機嫌で戻つてきた。

「ラッキー、報酬さらに5千万上乗せですつて！ 勤労意欲が湧いてくるわねー。さあ、行くわよ、あんた達！」

「うひつす！」

「はい！」

GS美神除霊事務所、出動である。

とりあえずビル内に入った美神達は、ロビーを通り抜け、非常階段へと向かう。

「あれ？エレベーターっての使わないんですか？」

「上で悪霊が暴れてるのよ？ あんな閉鎖空間に入つて機械でゆっくり上がっていくわけには行かないでしょ？ それに今は荷物持ちもいるんだし」

「俺がいなかつたらどうしたんですか？」

そのまま非常階段を32階までひたすら登りつづける。浮いているおキヌや、手ぶらである意味体力勝負な面もある荒仕事に慣れた美神はともかく、どう見ても大人一人より重そうな荷物を持ったまま、汗もかいていらない横島は、さすが人狼、といったところか。

「さて。少なめの装備で階段使うか、それとも最大限の装備で危険を冒してエレベーターを使うか。まあ今みたいに大荷物もつて階段上がつてたら、除霊に入る前に疲れるし動きは鈍くなるし

何より様々な種類の霊具を使い分けて除霊にあたる美神のようなタイプにとって、装備量とはイコールで柔軟な対応力であり、火力であり、…貴重な財産でもあるのだ。

それをよりもよつて危険な霊が暴れ回っている場所の近くで無防備に置いておくのは危険であるし、もしも失つてしまえば経済的にも相当なダメージとなる。

結界を貼るにしても面倒くさいし、それよりもよりお金がかかる。

よつて、機動力もあり、大量の荷物が搭載可能で、いざという時

には戦力にもなるであつた忠夫は、この上なく便利な存在なのだ。

「へえー、すいーです美神さん!」

「だ・か・ら、横島くんつていつ荷物持ちもできる助手つてのは、けつじつ重要なよ?」

「まあ、これくらいならまだ平氣ですが、「も」つていつのなんですか?」

「へつ? そりや…あ、着いたわよ。32階社長室。ここね、準備はいい?...」

「はいー!」

「うーつす!」

「横島君、神通棍を!」

「えーつと…」

荷物を降ろし、背中のバッグから言われた道具を取り出す横島。出発前に使いそうな靈具と装備は一通り説明を受けているし、なにせテレビに彼らを題材にしたドラマが流れる事もある程度には世間に認知されているのがG.S.という職業である。

彼が持っているのは齧つた程度の知識であるが、とりあえず簡単な説明と名前を覚える一助にはなったのだった。

「これですね！」

「よし、覚悟は良いわね？」

作戦としては単純に、美神が前に立ちおキヌと忠夫はサポートといつ名の見学である。

美神としては背後にだけは回さないように注意しながら立ち周り、必要な道具があれば投げ渡してもらひ、程度で今回は済ませるつもりだった。

人狼と言つても、幽霊と言つてもGSの仕事の経験がある訳もなし。

雰囲気を感じ取つて慣れてもうのも今回の手頃そうな依頼の目的だった。

…先発のGSがやられた、と言つ追加情報が無ければの話ではあったが。

…しかもそれを理由に何時ものように「コネで、倍額まで持つて行つた辺りで二人の素人の事を思い出して今更断れる雰囲気じやない事に気付いた辺りでちょっと血の気が引いたものの。

「3…2…1…GO！」

ともかく、こうして、3人組での初除霊が幕を開けたのである。

勢い良く部屋の中に突入はしたが、悪霊の姿は無く、辺りに広がるのは瓦礫とガラスの破片、高級そうなソファーやテーブルなどの内装の無残な姿ばかり。少なくとも、かなりの破壊力を持った悪霊であることは間違いないだろうが、なにせ情報が少なすぎる。

せめて先発のGSが生き残ってくれていれば、少しは情報が望めたものを！

と、胸の中で毒づく美神であった。

もちろん後ろの2人にはそのことを伝えてはいない。ただ、大変危険な悪霊であるとしか。この程度でビビつてもらつては、せつかくの助手（しかも結構使えそう）がいなくなつてしまつではないか！　というのは建前で、その本音は、胸の中。

そんな美神を余所に、先制したのは悪霊であった。

「うわーー！」

「　っ！　しまつた！　荷物！」

美神が横島に指示を出し、もしもの時に身を軽くする為に、と部

屋の入り口に置いてきたバッグ。見事に裏目となつて、悪霊に崩された天井によつてその道具への道はあつさりと閉ざされてしまったのである。

「ウケツ…ウケケケケケツ！」

「人格が崩壊しているタイプか…一番厄介な手合いね…」

突然虚空に現れた、うつろな眼窩を持つた髑髏を中心になニカが集まつたかと思うと、数瞬後には今回の除霊対象である悪霊が出現していた。

「交渉は・・・無駄のようね。なら、このGJ美神令子が、極楽へ

澄んだ音を立てて伸びる神通棍。

「いかせてあげるわッ！」

だが、鈍い音と共に打ち負けたのは、

「ケー—————つ……！」

「うそつ…強い」

「美神さんつ！」

美神の振り下ろした神通棍であつた。

「くつー精靈石よつ・・・・・」

美神のネックレス、「精靈石」が閃光放つと共に、互いに跳ね飛ばされる勢いのまま離脱、距離をとると、そのまま壁の裏に転がり込む。

「いたたたた…、やつぱいわねー。神通棍じや歯が立たないわ」

「…えーと、まかこつすか?」

「下手するとあんたと私が死んじゃつくれーには、ね」

「え」

「一億じや安すきわねー」

頭を押さえて舌打ちする美神の横で硬直した横島、そんな彼におキヌのフォローの言葉がかけられた。

「大丈夫! 死んでも生きられます! ちょっと死ぬほど苦しいけど」

本人的にはフォローしてくるつもりである。悪気は無いのだ。
「まだ死にたかないわいつー!」

「…じょーがないわねー。横島君ー!」

「は、はこつー!」

「あんた囮やんなさい」

「…は？？」

突如、脈絡もなく美神の口から紡がれたその言葉に固まる横島。

「えーと、美神さん？」

「なによー早くしなさいってーのーあんた人狼の血引いてんだから、それぐらいわけないでしょ？！？」

「ええと、2人の間にナニカ誤解があるようですが…」

「誤解も何もあるかーつー男ならどうとど行けー！！！」

怒声とともに悪霊の田の前に蹴りだされる横島。当然ながら反応する悪霊。

「ちよつとまてーーー！」

「おキヌちゃん！ すこし派手なのやるから離れてー！」

「は、はい！」

横島を蹴り出し、おキヌに一声かけた後、美神は深い集中に入る。それと共に額の前に垂直に構えられた神通棍には、大きな靈力が溜められていった。

一方その頃横島は

「あやーーー！ ジウちゃんなーつ！ 死んでまつーーー！」

「けーッケッケッケ！」

「うひーーー！」

父とその親友に真剣で毎日の「ごとく斬りかかられる事により極限まで鍛えられた回避能力と

「ケー————ツ！」

半人狼としての瞬発力でひたすら悪靈の攻撃から逃げ回りつつ、見事な囮つぶりを見せていた。どこまでも締まらない避けつぶりだつたが。

「…ま、人格が壊れてるってだけあって、動きが単調で助かつた」

ひよいひよいと悪靈から逃げ回りながら、その背後に回り込み視界から外れる。そして悪靈が高まる美神の靈力に反応し、向かおうとした瞬間にその眼前に踊り出て、単純であるがゆえに目の前の事に気を取られてしまうのを利用して搅乱する。

そして彼に完全に気を取られた所で再び視界から外れて、の繰り返し。

知性がない為フェイントなんて使わないし、攻撃パターンも大ぶりで単純なものだ。しかし、それを補つてあまりある力と速さ。それがあつたればこそそのGS第一陣全滅であつたし、トップレベルのGSである美神に厄介と言わせた理由である。

それを短時間であつても、ある程度余裕を持つて避け続ける横島

いや、犬飼 忠夫と呼ぶのがふさわしいか。

伊達に人狼の里¹、²を争う剣士の訓練につき合わせられた訳ではない。

「犬塚のおっちゃんの居合に比べればなあつ！」

悪靈が伸ばした右手を皮一枚で左側に踏み込みかわしつつ、次の回避に繋げる為の移動を開始する。避けて、動く。避けて、動く。避けて

「ハエが止まってみえるわい！」

「横島さん…すごい、すごいっ！」

どれだけ時間がたつたのか。実際には、数分も経つていなかつたらう。

「良くやつたわ、横島君！」

そして直視できないほど光り輝く神通棍をもつた美神が、

「後は任せなさい！　このGIG美神が、極楽へつ！」

はじめの一撃を

「いかせてあげるわっ！－！」

悪靈の額に振り下ろした。

そして、その帰り道。

依頼を神通棍というコストパフォーマンスの良い靈具だけで片付けられたせいもあってか、ホクホク顔で帰路に就く美神と、その肩に手を置いてふよふよと浮きながら、後方を少し心配そうに振り返るおキヌの一人。

そしてその後を少し焦げながらも二つほど増えたトランクを巨大なリュックの上に乗せ、少し不満げながらも特にふらつく事は無く二人を追いかける横島の姿があった。

「いやー、なんとか全員無事に済んで良かったわ

「無事じゃないでしょーがつ！」

「どうと離れないあんたがわるいんでしょーが

「だからってまとめてふつじばすこたあないでしょーがあつ…」

そう言つて地団太を踏む横島。しかし荷物を放りだしたりしないあたり、人狼としての律義さか、実の母親の教育が行きどいているのか。

「いいじゃなーい もう傷なんか殆どふさがつちやつたんでしょう？さつすが人狼の超回復つて感じよねー」

「もう、美神さんつたら」

と、苦笑いを浮かべるおキヌを余所に、今度は美神が不満げに振り返る。

どうして私だけが悪者なのか、とその表情は語っていた。

「だいたいあんたがとつとと靈波刀を使えば、もっと楽に片付いたのよ

「え？」

きょとん、と動きを止めた横島に何か変なことでも言つたか、とつられて歩みを止める美神。おキヌは靈波刀 자체が何か分からなかつたのか、疑問を浮かべていた。

「どーしたのよ？」

「…あれ、言つてませんでしたつけ。使えないっす、俺。靈波刀。

つーか、靈力自体使えないっす

「…はあ？！」

彼が、半分とは言え、『人狼である』という先入観から、当然使えると思っていた靈力がまともに使えないと初めて知った美神が、実は物凄く危険な事をさせていたと気付いて真っ青になると、「うーん」と幕があつたものの。

「ま、まあとりあえずそこそこ使えるみたいだし、給料はこれくらいね」

と、誤魔化す様に示した額は、事務所にいる時の食事と、仕事中の食事、それから歩合給での骨付き肉（横島はこれに一番喜んだ）、時給250円（相場を知らない横島は、とりあえず額いておいた）であった。

その夜

「東京つて所は、本当に星もまともに見えんのやなあ」

無事に？初出勤を終えて食事も食べさせてもういい、安アパートに帰り着いた横島は夜空を見上げながら一人呟く。

「ううねえ……確かに、命懸けの仕事だ、ありや」

空には星が見えずとも、細い、細い、まるで裂け田のよひな月が浮かんでいる。

「…ゾクゾクしたなあ」

その体の震えは、恐怖でなく

「あんなもんばっか相手にしてるなり、ウソウソのは強こわいなあ
なあ」

狼の、本能。戦つものとしての、本質。自分にあるとは思わなかつたそれらが生み出した身体の、心の震え。

「…また、ああこいつのがでるのかなあ？」

武者震い。

「…寝よ」

畳に直接寝転がつて、天井を超えた先の月を眺めながら、目を開じる。

「ナフニヤシロ、タマ、元氣でやつてゐかなあ。ナセカ、あんなに吹つ飛ばされるとは思わんかったしなあ。ナ、ナヒヨリが冷めたら里にも顔くらいで見せにこむどり「やならんか」

あべぎを一つ。そのまま跳び下り落ちる彼の弦きを聞くでもなく。

円は、ただ、セレニティにあった。

丁度その頃、人狼の里、長老の家では。

「ふうううう

深い、ふかあ～い溜息をついたのは、人狼の里最高齢にして、周囲の者達から長老として慕われる「の里の娘」。

「ぐびぐびぐびっ！…しづかおおお～。べじべじ」

部屋の隅で酒をあおって家出した娘の名を呼んでは、また盃に酒を手酌で注ぐことをひたすら繰り返していく泣き上戸、犬塚家の大黒柱。

「沙耶…」

縁側に座つて、「もう少しだったのに、誰かに殴られたせいで川に向ひつの妻に再会できなかつた」と嘆いているのは犬飼家のポチさん。

「おめでとう… 生きてるってばうじこつ…！」

「やあ、」の幸せを胸で分かち合ひんだつて……」

「やつもおめでとーー。あつちあつがとーー。」

「...」の後

庭では奇跡の生還を果たした（馬鹿）者達が、丸く座り込んで騒がしく口をきいてゐる。

「レーベン」

長老は、ただ、おもへい溜息を吐き出した。

そして、もう一組。横島を追いかけて里の結界をぶち破つて駆けだした二人。

「うーん、どうも、わざわざお出でにならねえかー……なんだ吹替こいつは、わざわざお出でにならねえかー……」

「アラスカ」

「ああっ！ 寝るんじゃない狐えつ！ ！」

ГЛАВА

「寝たらもう起きれないで」いやぬよ————」

『一ノ二ナニハ』

ノルマニー

「よつしー。わづかでカマクラができるんだじゃねー。半端ないじゃねー。」

シロ・タマ現在地
南アルプス 標高2800メートル

「兄上」
「コー
ン！」

さてさて、彼らも動き始めたことだし、少しづつしくなるかもしれないねえ。

させしない。ただ、見てるだけ、わ。歯痒く感じた頃もあつたけど、
もはや昔の話さ。女性に歳をきいたりやあいけないよ。

まあ、今、「私」が女性であるだけかもしれないけどね。

もし、男の「私」つていうのに出合ふたら、聞いてみるとこいよ。

それはそれは、興味深い話が聞けるかもしれないね。

それでは、良い夢を

忠夫初出勤の日から一週間後。

人狼の里、犬飼宅にて、長老は頭痛を堪えるように頭を押さえていた。

田の出を静かに迎えるばずの里が何時になく騒がしい。それもそのはず、里の中心にある長老宅からは、大勢が騒ぐ音がここ一週間程絶えることなく聞こえているからである。

גַּעֲמָנִים

「ただでさえ少ない人狼の女子が
！」

「また犬飼家かー！！！」

「忠夫ー！！ 駆け落ちー！ うらやましいぞー！」

「白糸酒じやああああ！――！」

「うおおおおおおおつーーーーー。」

ようするに、生還の宴を開いていた彼らのところに、「シロが忠夫と駆け落ちした」という話が聞こえてきたのである。

実際にはそんな事実は無いのだが、噂好きな女衆によつて付けら

れた背びれ尾ひれと、物的証拠として発見されたシロの書置きのせいでもはやそれは確定事項として里の中に広がっている。

さりに言えば、昔からシロがあからさまに想いを寄せている態度であったのが駄目押しにもなった

もう、誰も疑つてなぞい状況で、その事実は彼らの心を深く抉つた。

確かにまだ幼さを残していても、将来は美人になること間違いないであり、忠夫に（届いてはいなが）猛烈なアタックを繰り返していくも、もしかしたら、万が一とかあるかも、と、独り者として僅かにそんな気持ちを持っていたのである。

それまで互いの生還を祝う宴会だつた筈のそれは、瞬時に嫉妬の自棄酒へと姿を変えたのであつた。それからとくも、一週間の長きに渡り続いている。

呑み過ぎで倒れては放置され、暫くすればゾンビのゾンビ蘇り、再び酒瓶を手にして管を巻く。

初めは心配していた里の者達も、原因の情けなさと延々と続く瘴気と嫉妬に満ちた騒音、そして放置していても何時の間にか復活しているのでまあ大丈夫だろうと言ひ諦めがあり、彼らは鬱陶しがらねながらも宴会を続けていた。

何故か、長老宅の庭で。

煩さに我慢できなくなつた長老が制圧しようにも、近づけば集団で縋りつかれ、涙と鼻水と酸っぱいにおいのするナーナー力を服に付け

られ、しかも延々と呪詛の「」とへ愚痴を述べられ続ける始末。

ぶん殴つても酒のせいだダメージを受けず、何事も無かつたかの
ようにすぐ戻つてくる。

しかも、集団でだ。

たまらずその夜のうちに犬塚宅へ逃げ出した長老は、一週間たつ
ても収まる様子の無い騒ぎをどうしたものかと頭を抱えていたのだ
った。

とまれ、今、犬塚と犬飼と言つ、この里でも指折りの剣士を呼ん
だのは、別にあっちをどうにかするとかそういう事でも無いのだから、
と長老は頭を切り替えた。

庭と酒蔵の惨状を想像してやや憂鬱になりながら、正面に座つた
一人の男に対して居住まいを正す

「全く…少し前まで女々しく陰に籠つていたかと思えば、すっかり
元通りか」

ふう、と溜息を吐いた長老の前で、一人の男達は頭を搔いたり、
腕を組んで頷いて見せたりとそれぞれ行動は違えども、同じよう
にどこかすつきりとした顔をしていた。

「まあ、我が娘もそろそろ大人。ようやくこの里から出ても獣の姿
にならなくなつたこととのほか喜んでおりましたからねえ」

「左様。我が愚息はある生まれの性か、獸どころか、半獣人の姿さ
え取れなかつたからなあ」

「…」の里では、場所や用にとらわれることなく人の姿を取れるとが大人の証。そういう意味では、忠夫も十分に異端であるからのう」

ふと、長老が昔を思い出すように遠い目を見せた。

「まあ、沙耶殿のおかげで、少なくとも人間全体に対する偏見は消えたわけだ…」

「妻も、喜んでおりましたよ…」この時は、私を受け入れてくれた、と

それに対し、「当たり前じゃ」という誇りと自信に満ちた視線を返す長老。

長老と同じように、どこか昔を懐かしむような眼を見せながら、犬飼家の仏壇に置かれた位牌に顔を向け、呟いたのは犬塚だった。

「強い女性でありました、我等の奉ずる用とは真逆の、太陽のよくな」

と、何だか雰囲気を醸し出している一人の隣で、しかし夫であった犬飼は腕を組んだまま微かに唸り声を上げていた。

田を閉じたままの彼の額からは、時折たらりと汗が落ちている。

「ぶつぶつ」「拙者は尻に敷かれとらん」とか「押しの強さで押し掛け女房に」とか呟き続けている所を見ると、本人達にしか分らない事も色々あつたのだろう。

「あの子も、太陽を持つておる。炎の固まりの！」と、「な。…しかし、同時に、危険な物も、その内に秘めておるよつて思えてしまつ」

ふと、長老の口から咳きが漏れた。

不安と、心配。

出でいく事は分つていて、きっとそれはそんなに遠くは無いだろうと覚悟はしていたものの、やはりもう少し鍛えて、せめて靈波刀くらいには身につけさせてやるべきたつたか、と。

血の繋がりは無くとも祖父のようなものとして、孫の一人の独り立ちにはやはり気持ちが揺れたりしてしまつ。

「妻の名沙耶は刀の『鞆』に通じます。その息子であるあやつなら美事、収めて見せるでしょ？」

しかし、それを断ち切る言葉があった。

実の父たる犬飼の特に焦つた様子も無いその言葉には、確かに信頼がある。

誇りしだと、ほんの少しの、「なにか」の感情を隠しながらのその返答に、その親友は同じ、いや、隠された感情をこひらかはまつさりと示しながら呟く。

「炎を、か。しかし犬飼。拙者は、不安なのだ。鞘は『莢』。その中に、『包み育てる』性を持つてしまつ。そうではないか？」

「 「 … 」

不安を隠しながらの返答でなく、はつきりとした犬塚の声に、沈黙で返す一人。

いや。

「 … くつくつく。良いではないか」

長老は、先程見せた感情とは正反対の、全くの信頼をその声に乗せていた。

「それでも、あやつなら…忠夫なら、騒ぎながら、愚痴りながら、それでもきっと何とかする。そう、思っているのであるう…」

「 … いやはや、流石は年の功、といったところでしょうか」

「 … 我が息子ながら、あれはまた沙耶の息子。ですが、真綿の様で、中身は神鉄で揃えられたような我が妻の鞘」

「 「 「 … あいつじや碎くにや未熟すぎるー」 」

数瞬の後、犬飼宅は3人の爆笑に包まれ、更に数瞬の後、爆音を響かせてその玄関が吹っ飛んだ。

GS美神除霊事務所

事務所のソファーに座つて…いや、舌を出しながら「ぐでえ」、として寝転んでいるのは、元 犬飼であり、現 横島忠夫であった。

「畜生うちの所長人狼使いが荒過ぎだ…」

ほぼ力尽きた野良犬の様相を呈している理由は、雇われてからの一週間で、まさに嵐のように依頼をこなしていつた美神に主な原因がある。

新たな助手を得て、GS美神除霊事務所はその対応力を増した。

それまで数々の依頼を、美神一人しかいない為どうしても人手が足りず、断つてきたその鬱憤晴らしのように、ひたすらポンポンとこなしまくつたのである。

海に行き、山に行き、異空間に行き、時には幽霊と共に銀行を襲い、またあるときは女子高で校長に青春を取り戻し、その挙句宇宙にまで事務所の活動は及んだのである。

「結局、まともに嫁探しは進まん…」

女子高では「危険物」と書かれたトランクに入れられて厳重に鍵

をかけ、さらに『ごつつい鎖で巻いたあと呪縛ロープで巻かれて、そのまま依頼終了まで放置され。

海では生まれて初めて逆なんぱ、とかいうやつをされたが、人妻と知つて泣く泣く諦めた。

『人狼の里・独り者の鉄の錠』その四。子持ちの人妻に手を出すな！』に引っかかった為である。

ちなみにこの錠、破ればもなく夫と独り者集団からの血の制裁があるため、正に鉄の錠となつてゐる。

銀行員のおねーさんがたは、現金を持たない横島を歯牙にもかけなかつた。

視界にも入れて貰えないほど冷たさに「嫁に来ないか？」の「よ」さえ言えなかつたのである。

「…えぐえぐ」

現実の厳しさを知り、一人涙する横島であった。

だが、そんな彼を気にもかけず、笑顔でおキヌを連れて帰つてきた美神は、上機嫌に彼の座つたソファーアを軽く蹴つて声をかけた。

同じようなペースで働き続け、しかも一部はおキヌに任せて始めているとはいえ接客から事務、経理までこなし、依頼の際には最前线で靈力を振い除靈にあたる。

そんな彼女は、何故か半人狼である筈の忠夫が疲れきつていると

言つのに元気溌剌だつた。

しかし、忠夫は見た。

どんなに三人疲れて帰つてきても、従業員一人がぐつたりしてい
るのを横目に札束を数えたり、通帳を睨んだりしてい
るうちに見る見る疲れが取れていく美神の姿を。

正直この人の方が人外何じやなかろつか、と思いつつ、すっかり
馴染んだ除霊道具を担いだ忠夫を車に乗せ、依頼現場に向かう三人
だつた。

が、事務所のメンバーが三人揃つてからの快進撃も、ここまでだ
つた。

「きよ…協同作戦？！そんな話、聞いてないわよっーー！」

ここ一週間というもの順調にその業績を伸ばし、上機嫌で次の仕
事へと向かつた美神であったが、ここに来て、とうとうその悪運も
尽きてきたようである。

「え～。私は令子ちゃんと一緒にお仕事できるのを楽しみにしてたのよ～。そんな言い方無いじゃない～～」

そのまま身を翻して逃げ出そうと…いやいや、厄介」とを回避しようとしていた美神の髪を掴み、間延びした話し方で美神を引き止めた肩までの黒髪を持つ女性 GS「六道 眞子」は、楚々とした雰囲気を持つ、洋風お嬢様であった。

見た目は。

そして、そんな年頃の女性、しかも、可愛い女性を目にした横島は、久しぶりの新たな出会いと言つ事もあり、本能と煩惱がゲージを振り切った。

カタパルト、オンライン！ 発進、どうぞ！

そんな脳内メッセージが流れたかどうかは知らないが、横島の身体は無意識のうちに宙を待っていた。

犬飼 忠夫 いきまーす！

弾道ミサイルの「」とく、正確に目標「名も知らぬ美女」の向かって飛び立つバカ一匹。

「お嬢さん！」

着弾まで、3秒

「嫁につ！」

おキヌが何時の間にか隣から突如消えた横島を見送り、美神が靈力を高めた右手を振りかぶり、残り2秒

「来ないつ」

が、美神の拳が振るわれるより早く冥子の影が光を放ち、残り1秒。

「かあぶろべしつ！…」

美神の渾身の右ストレートより早く、迎撃ミサイルの「」とく炸裂したのは、12本、いや、12匹。

「あ～。靈の氣配でこの子達～、今殺氣立つてるので～、近づくとあぶないですよ～？」

GSの大家、六道家に伝わる、12神将と呼ばれる、現代では一国の軍隊にさえも匹敵する式神達であった。

不埒者に対するお仕置きなのか、それとも主人を守るうとする行動なのか、忠夫は直撃を受けた後も、十一支を模した式神達に纏わりつかれていた。

ギヤーツス！

「あ～れ～？」

ギブ、ギブギブギブ！

「あのバカ…。なに、どうしたの冥子？」

電気はいーやーつ！！

「ん、なんていうか、あの子達、攻撃してるんじゃないわ」

うおっ！あぶなっ！かすつた！かすつたつて！

「？」

キャインキャイン！

「なんにこひかへ、久しぶりねめむとひへ懷いへぬみたい
なう？」

「あの、横島さんが大変な事になつてるんですけど…」

がぶ。

「 「 「あ」 」 」

なんとかかんとか逃げ回つてはいたが、何せ相手には悪意や殺氣といつものが無い。

しかも冥子曰く、子供がじやれでいるような それにしても激しそぎてはいたが ような物である。

個々でも反則気味の連中が集団で来るからたまつたもんではない。何時の間にやら彼らに追い詰められていた横島は 大口をもつた式神に呑えられていた。

しばらくぐじたばたと動いていた彼の下半身も、三人の前でその動きを徐々に緩慢にしていく。

おおおおとおキヌが手を出そつか出すまいかその周りを飛び回り、美神はどうしたものかと額に手を当て呆れた様子。

ひとりのほほんと眺めていた冥子は、忠夫を呑えた式神と田を合わせると、笑顔でこくつと頷いた。

彼女的にはもう良いから離してあげて、と言つたつもりで頷いたのだが、何故か彼らは横島を離す事無く彼女の影へどんどん沈ん

でいく。

あれ？と首を捻った冥子に対し、もはやピクリとも動かない横島を咥えたままの式神が最後に影に飛び込み、そのまま消えていった。

「どうやら、気に入られた横島は彼らの棲み家である六道冥子の影の中へとおひ持ち帰りい、されてしまったようだ。

「……ど～しましょ～？」

「……やつをひと出しして……まあいいか。十一神将もいるし、戦力的には問題ないから、そのままほっときましょ。ビー死にやしないわよ」

「美神さあーーん！」

頭痛をこらえながらの美神の台詞に、おキヌは必死で呼びかけるも、「除靈に入る前から疲れたわ」といつ風に除靈対象の新築マンションに入つて行つた美神には届かなかつたようである。

それから数時間後、ようやく式神の『甘噛』から開放され、式神の涎でべたべたのまま影から引っ張り出された横島が見たものは、記憶の中では新築マンション『』であった『瓦礫の山』であった。

非常に疲れた様子の美神曰く、色々あつて、こうなつた。予想はしていた（冥子が来た時点で）、反省はしているし（冥子と組むとこうなる）、後悔（冥子とはもう組みたくない）もしている。

が、ちょっとまあ…結果を見れば除霊には成功したのでOKだろう、とは思うが、依頼人が納得しないかもしれない。

そう言つて、後方で膝をつき、呆然とマンション後を眺めている依頼人を指さす。

「はあ。で、ビーするんすか」

「『』ねられる前にばっくれるわよ。せつせと乗りなさい」

「良いのかなあ…」

後ろめたそうな表情で依頼人を眺めるおキヌを助手席に押し込み、何となくぱっちい横島を後部座席に蹴り込む。

運転席でキーを捻り、タオル一枚後部座席に投げながら、そのまま流れるような動きでアクセルとハンドルとサイドブレーキを作。180°。ターン。

呆けたままの依頼人と、「お母様に叱られるわ～」と憚っている冥子を置き去りに、嫌な事があつた場所からとつと離れたい、と言つた様子で、美神はアクセルを踏み込んだ。

その夜、六道邸にて。

「ん～～」

「あ～～？冥子じつしたの～？」

その夜、六道邸にて

「あ、お母様～～」

「珍しいわね～貴方が考え方だなんて～」

「そんなん～、お母様つたらひどいわ～」

なんともんびりとした会話を交わす、六道冥子。

が、その余裕も眼前の女性がまとう雰囲気が一変するまでだった。

「そんなことより～、貴方、また除霊に失敗したんですね～？」

「あ～、「めんなさいお母様～～～！」

それまで冥子の影の中で大人しくしていた式神達が、その女性の放つ威圧感とともに冥子にフレッシャーをかける。

母と呼ばれたこの女傑こそ、六道 マイカ冥華。

先代の式神十一神将の主であつた。母子だけあつて、その面立ちは良く似ているが、こちらは着物の着こなしからして熟練された「大人の風格」がある。

「で～？ 何を考えていたのかしら～？」

「えつくえつく、お母様酷いわ～～」

しばらくの間、奪われたコントロールを返してもうつむき一息ついた。何處となく煤けている冥子と、母の会話は続けられる。

中心は久しぶりに出会った旧友たる美神と、その従業員であり「六道に伝わる」十一神将に「異常に懐かれた」少年、横島 忠夫である。

「…そんなはずは無いわ～。あの子達は先祖代々伝わるれっきとした『六道家の式神』よ～？」

「え～、でもでも～」

「そんなにほいほい懐いてけりや～、式神としては致命的よ～？」

「…ほんとのこ～」

拗ねた顔をして部屋を出て行った娘を見送った後。しばらく、そ

の絶えない笑顔の裏で何かを考えていた冥華は、なにかに思い当たつたような、同時に凄まじく、ここ数年、睡眠中以外は殆ど崩さなかつた笑顔を忘れるほど驚いた顔をした後、軽い音を立てて手を叩く。

「フミさんへ。フミさんはいるかしら~」

何事もなかつたかのように、筆頭侍女を呼びつける。

「元気だ」

何処からともなく、音どころか、気配すら出でずに背後に現れた懐刀の侍女に、全く崩れない笑顔で。

「お願いがあるの~」

「ハツ」

冥華は、お願いと言ひ名の『六道家当主としての命令』を出した。

「やあ」また来てくれたのかい?

客人も来なければ、動き出す歯車も無い。
そんな時間に比べて、ここ最近の時間のなんと「楽しい」と。
幸せすら感じるね。

見えるかい?あの歯車が。一つの歯車の動きが、次の歯車を動かし、その次の歯車を動かす。

しかも、この歯車って言うのが曲者だ。予想なんかできやしない。ついでに言えば、分かつてているかな？ 君もまた、私と同じなのや。

君は、一体何を見ているのだろうかね？

答えは、自分で、見つけたまえ

それでは、良い夢を。

「あー寒かつたでござる。しかし、あの女、何が「すべて凍るはずなのにーー！」でござるか」

「……」

「あの程度で、この犬塚シロに流れるエモ・・・」ほんつーもとい、「兄上への想いが凍るわけがないでござるー！」

1

「どうした、狐。そんなに凍つたことが悔しいんで」さるか

二
ケ川川ッ！」

「わー、立派な話だ！」
「ん~どうが行くでしょもるかな~?」

ぴた（止まつて）。じーつ（何かを確認した後）。…ふつ（もう一
人に向けて嘲るような笑みを浮かべて）。ずだだだだだだ（全力

「ちよつ！　まてーい！　このクソ狐ーーー！」

「しぐしぐしぐ……」の世にまだ凍らせられないものがあるなんて……
また雪女修行のやう直しね

ボロボロになつて吹き飛んだ玄関、もうまつと煙を上げるそこからふらふらと千鳥足で出て来たのは、顔を朱に染めた酔っ払いどもだった。

各々刀を持つたり、全く安定していない靈波刀をぶら下げたり、武器のつもつか酒瓶とたくわん一本ある」とを刀の如く腰に差したりと、一言でいふなれば「駄目だこいつ…せやくなんとかしないと…」である。

「へおりあああああ！ ポチセーン！ 出でーーー…ヒック

「すねじー！ 犬飼家ばっかり良い田見やがつて…ひー

「くおのHロHロむつわー！ ケタケタケタケター！」

「ひつべーとこつわけでえー殴りこみなのだつまほろぬるるべー

当然ながらそんな彼らを田にした彼らの上司たる里の長は、酔つ払ひどもを成敗する為にこちらも武器を構えた。

長老は額にぶつとい血管を浮かべながら、くらへらと笑つたりあるいは蒼褪めて入口の影に蹲つてゐる輩共に躍りかかる。

「Jーの、馬鹿たれどもがあああああー！」

先日からの庭の上拠の事もあつてか、大分腹にすえかねていたよ

うで、結構な勢いで振り回された靈波刀に叩かれてぽんぽんと飛んでいく酔っ払い達。

すっかりバーサーク入った長老の振り回す靈波刀と、吹き飛ばされた彼らと、ふらふらながらも相手が誰だか分つていな様子で反撃に出る酔っ払い。

当然ながら酔っ払いの攻撃がまともに目標に行くわけもなく、殆ど適当に暴れ回っているだけである。

酔っ払いが頭から突き刺さって破れる障子、割れる窓ガラス、吹き飛ぶ襖、ひっくり返るちゃぶ台、真つ二つになる絵、靈波刀に切り裂かれあつという間にボロボロになる畳。

「ああああああ！　拙者が描いた沙耶の絵（等身大・輝く笑顔ばかりじょん）がああああ！」

途中で家主の寝室に飾つてあつたらしい入魂の一作が破れたようだ。

怒りで増えたバーサーカー一体目が、殺意の波動に目覚めながら戦場へと突撃していくのを横目に、犬塚はぼつりと呟いた。

「…あいつ妙な所で器用だよな」

一向に収まる様子の無い騒ぎをよそに、犬塚は一人安全圏である庭の外まで非難しており、どこからか飛んできた絵の残骸に描かれた、それはもう気合いの入ったフルカラーな全身が描かれた彼の妻の絵を見て、気楽に呟いた。

今度娘の絵でも描いてもらおうかな、と思いつつ、彼は庭の地面に突き刺さって気絶しているアホ達をてきぱきと縛り、医療班の所へ御世話を押し付けに歩き出す。

と、いつだけで。突如として酔っ払った嫉妬狼侍どもの襲撃を受けた犬飼宅では、相変わらずの混乱が起きていた。

「あー。ポチさんが増えたー。ヒック」

「むう・・・分身の術かっ！ 流石だなつ！ …ういっ」

「H口さも掛け算だー。ケタケタケタケタ」

「（氣絶中）」

「全員其処になおれー！ 沙耶（の絵）のかたきいいいいいっ！…！」

「はつ！ 落ち着けポチッ！… 流石に真剣はまずいぞおおおー！」

「おーやれやれー。あ、ポチー？ あとどうちの娘も描いてくれ

「犬塚あああああつ！… お前もポチを止めんかあああああー！」

里は今日も平和である。

さて、そんな里の日常はともかく、ここは東京。

そこで生活を始めた横島の朝は、早い。

「いててて… 梓子搊らせやがつて」

都会のコンクリートビルに囲まれた木造安アパートを出ようと早く抜け出した少年は、今、東京を遠く離れた山中にいた。

「今日の戦果は猪が一匹に鴨が一羽か。良し良し、好調好調

そう呟く彼の手には、狼としての本能をフルに使った「狩り」で手に入れ、既に血抜きなどの下処理を済まし、ロープで吊り下げられた猪と鴨があった。事務所での給料では賄いきれない栄養を、自給自足で確保しつこじまで 散歩がてらに 来ていたのである。

「あ、そろそろねぐらに戻らんと、遅刻しちまうな」

そう言って鼻歌交じりに山中を自動車並みの速度で、しかも獲物を肩に担ぎながら駆け出す横島。

東京に来てはや一ヶ月。当初は不慣れな環境で迷子になったり、ふいに襲撃してくる冥子とその式神達に絡まれたり、時給250円では家賃と切り詰めた生活費で精一杯という事に気づいて「東京つて建物も物価も高いっ！」と驚愕したり、その他色々と問題があつたものの、すっかり都会での生活にも慣れ、今では毎朝狩りに出か

けられる程度にはなつていた。

そんな彼は、無駄にサバイバル技能と適応力の高い、都会に暮らす半人狼である。

そして田もすっかり山裾から顔を覗かせ、都会の喧騒が一気に目覚めて騒がしくなった頃。

GS美神除霊事務所は、一人の客人を迎えていた。

応接室のソファーに腰掛け、目の前の友人であるぽやぽや雰囲気を漂わせる女性と雑談に興じながら、美神はその最中に飛び出したとある人物の名前に驚きを露わにする。

「ドクター・カオス？　…ってあの、鍊金術師の？　まだ生きてたの！？」

「そうなの～～～」

その友人、GS六道冥子はケーキをつまみつつ、フォークをふらふらと、と言うには遅い速度でふらふらと揺らしながら、その時事を思い出す。

「古代の秘術を使って、不死になつたのは良いけどここ百年ほど姿を晦ましていたじゃない～～？　それが今、日本に来ているのよ～

「

「へー。どうして知ってるのよ、眞子？」

とは言え驚きはしたもの、商売敵になる訳で無し、まあそんなに自分に関係は無いだろう、とふんで、あまり興味を引かれた様子もなく、じらりむせつをと食べ終えたイチゴショートを片付ける令子。

「」の前へ空港であつてサインもらつちやつた～

「…有なじ誰でもいいのね」

「でも～、聞いた話だけだと～、なんとなく怖い人かもしれないじゃない～～」

そんな相手からびづけられてサインもらつたのかしら？ その疑問が表情に出たのか、眞子はその理由を告げる。

その理由を軽く答える眞子であった、がその際に飛び出したまた別の人物の名前で、事態は急転する。

「たまたまその人と一緒にいたお友達に頼んだら～、快くサインしてくれたわ～～」

「…オトモダチ？」

その「お友達」に心当たりがあるのか、イヤーな雰囲気を漂わせ始める美神。

『今昔物語』

「小笠原 ハミツ！」

二人の共通の知り合いであり、美神にとつても商売敵であり、ラバルであり、そして因縁の宿敵である女性であつた。

都内・某所

ここで日付は一日戻る。

「……と、いうワケで、このG.S小笠原エミが、あんた達と協力する」としたつてワケ」

「なるほど。その、美神令子とやら、たしかに求め得る素材としては申し分ない。我が秘術の栄えある被験者としては、文句なし、
じゃな」

「イエス。ドクター・カオス」

ある喫茶店では、今日突然訪れた不幸を店長が店の裏で嘆いていた。

今日の朝までは平和だったのだ。ビル街の狭間、主要道路から一本外れた土地であるにも関わらず、それなりには存在する常連の客に何時ものモーニングセットを出し、自慢のコーヒーで目をしゃつきりと覚ました会社員たちが職場と言つ戦場へ出かけていくのを見送った。

その後は時折ベルを鳴らして入ってくるまた別の常連達　何時も新聞を30分きつちり読んで、「コーヒーを一杯飲んで出勤していくどこかの重役や、徹夜の仕事明けで朝食を食べながらうとうとしている若い社員、ほぼすっぴんで訪れてはカフェオレ一杯を飲みながらものの数分で化粧を完成させ、別人のような風貌で契約先へと出撃していく」、そんな人達に憩いの一時を提供する筈だった。

しかし、今日はそんな常連達も店内を覗くなりロターンして出て行つた。

「…くつくつくつく。」それで、私はあんのこつべき令子を消すことができるし」

「わしは目的を果たすことができる

「くつくつくつく。笑いが止まらないワケ！　おーつまつまつまー！」

「わーっはっはっはーー！」

「ヤレでよ、ます

」「

「なるほど、しかしそれならこうした方が……」

「レコード・開始します。演算・開始。ドクター・カオス・情報出力媒体の・使用許可を・求めます」

せめて隅でやればいい物を、店の真ん中のテーブルで怪しい雰囲気をふんだんに撒き散らし、時折高笑いや含み笑いを放つ三人組。

一人は見た目は綺麗な、褐色の肌と長い黒髪の美女。きっと静かにコーヒーを飲んでいれば非常に絵になるであろうし、眼福であろう彼女はしかし、周囲の視線も気にせず高笑いを放ち、誰かに向かつて呪詛を吐き、と迷惑度では一番だった。

もう一人はこれまた非常に奇妙な女性だった。

短めの赤に近い桃色の髪をした女性は、見た目はまさに人形の如く整っていた。

しかし、動くごとに小さく機械音がしたり、妙に片言だったとはつきり言つて怪しい。

付け加えるなら力チュー・シャから突き出しているアンテナがさらには怪しい。

が、怪しさだけで言つならば残った一人も負けてはいない。

皺と年季の入った風貌、整えられた白髪、見た目外国人なのに異様に上手い日本語、そしてなによりも季節と場所を無視した吸血鬼のようなマントと服。

どこの中世貴族ですか、と言つかなんのコスプレですか、と言つた服装ながら、妙に威厳と風格のある老人である。

そんな奴らが店の真ん中で怪しい会話に耽つてゐるのだ。

当然寄は帰るし営業妨害甚だしい。

「店長一。今田はもう店閉めましょうよー」

「…いやー、負けはせんー。こままで幾多の地上げにも負けず、毎日店を開き続けてきたこの私が、この程度の嫌がらせで屈するわけには…！」

「でも、あいつらコーヒー2杯でもう3時間も粘つてるんですよー？」

「…あれでも寄。あれでも寄。あれでも寄。あれでも寄。あれでも寄。あれでも寄…」

「あー。もう、ショーガねー人だこと」

結局その日は6時間ほど新しく注文もせず、コーヒーのお代わりも無しに居座つた彼らが帰つた後、店長は塩をまいてそのまま店を疲れた表情で閉めたのだった。

そんなことが昨日あつたとは露知らず。今日も今日とて事務所に元気良く出勤する横島である。

「しまつたなー。里じゃねーんだから竈も鍋も無いのすっかり忘れてた ん?」

早朝にゲットした獲物を調理しようとして道具が何もない事に気付き、残り少ない現金でどうやりくりして料理道具を入手しようかと悩む彼であつたが、出勤時間まで残り少ない事に気付いた。

捨てるのも勿体ないので大家の老婆に全部渡し、今日の食事は事務所でなんとかしてもらおうと鼻歌交じりに通勤路を歩いていた所で、ふと、その前方に立ちふさがる2人の女性を発見。

忠夫レーダー、感ありつ！！

総員、対衝撃よーいつ！

はつっしんっ！！

残像さえ残さず接近すると、

「おねーさんがあつ！ 嫁に来ないか？」

「対象・接近を・確認。捕獲モード・作動。捕縛用スタン・ガン
発射」

そして、真っ黒いコートを纏った女性が、その手首から飛ばしてきた先端に端子のついたワイヤーにあつさりと絡めとられ、黒焦げ

になつて昏倒した。

「…ちよつとい、マリア。これ流石にやりすぎなんじやない？」

「ノー。ミス小笠原。収集したデータによれば・これ以下の電圧では・作戦開始前に逃亡する可能性・70%オーバー」

「70%オーバーって…流石人狼なワケ」

黒焦げ、というか炭になつた横島に、その2人の女性は近寄つていつた。

小笠原と呼ばれた女性に、人狼についてなにかとんでもない勘違いを与えたようではあつたが、ともあれ彼女達はてきぱきと横島をロープで縛ると、近くの路地に止めてあつたワンボックスカーにマリアが抱えて連れ込んでいく。

(小笠原さんとマリアちゃんかー。しつかりと美女の名前を覚えたぞう！…がく)

とは言え、今までに絶賛拉致られ中の横島は、気絶しながらも余裕があるようひだが。

その夜。

G S 美神除霊事務所は、ここ最近の三人組でなく、美神とおキヌのみという2人で今回の依頼人、いわゆるヤーさんの大手、地獄組・組長宅にいた。

どうも最近身の回りで警察に出頭したりとか、自首して罪を償えだとが、言つ不気味な声とともにポルター・ガイストが発生し、夜も眠れないと言つた。彼の顔にはくつきりと隈が浮いており、かなり消耗している様子である。

そんな依頼人、しかも高額報酬を約束してくれた組長を前に、美神はイラついた雰囲気を隠そうとしてもいられない。

(横島君が来ていない。前日までの情報を踏まえるとこの仕事にエミが関つていることは間違いない。と、いつ「とは」)

「ふ、ふふふふふつ！」

おキヌと組長に背を向けたまま、不気味な笑い声を洩らす美神。

突然発生した迫力ある彼女のオーラの前に、慣れない二人は思いつきり背筋を震わせていた。

「ゆ、幽霊の嬢ちゃん、美神さんはいつたいどうしたってんだ？」

「や、まあ。今朝からあんな調子で…」

「ふふふふふふふふふふふつ！…」

昨日までの不可思議な呪いよりも、とりあえず目の前の夜叉の方が危険だと感じたヤクザの組長は、護衛人からの距離を大きく、おへきく開けたのであった。

「と、いうわけで、だ」

組長宅より少し離れた公園で、人払いの結界を引いたエミとカオス、マリア。

周囲は鬱蒼とした木々に囲まれ、また公園の中心部からも離れているせいか辺りは電灯の明かりがあつても薄暗く、また地面に描かれた複雑な魔法陣も相俟つて、サバトでも開かれそうな雰囲気となつていて。

「今日の材料はこの半人狼の子と、イモリの干物、鼈、マンドラゴラ、玉葱、その他諸々の呪術材料つてワケ」

「ひー！イモリと玉葱はダメっス————！」

そして、なんというか、禍々しさを十二分に放つたくさんの怪しい物体（と、玉葱）に囲まれた、鎖でぐるぐる巻きの忠夫の姿があ

つた。

「安心するが良い小僧。今回のお前の役割はいわばブースターと対美神令子用の靈波コーティングじゃ。手強い相手のようじやからな、そやつの靈力に対抗するには、その靈波を日常的に浴びて、慣れたお前さんが一度良かつたもんでの」

「私が送り出す呪いの力をあなたの血の力で増幅して、それをあのじいさんがマリア用に調整！」

「その力に更におまえさんから取り出した…アンチ美神フィールド、とでも言つかの。それを転用しつつ、マリアが目標を撃破」

「そして護衛がいなくなつた依頼対象をじつへつと「説得」するつてワケ」

「「完璧なワケ！（じゅくわー）」「

「マリアちゃん、つて言つんだよね。可愛いねー。ねね、歳いくつ？結婚の予定とかある？」嫁に来ないか？」

「ノー。その質問に対し・回答権は・『えられていません　お褒めの言葉に対し・アリガトウと・のみ返答させて・いただきます』

「聞きなさいよつー

「…余裕じゃのー小僧」

上機嫌で今回の作戦を説明していたエミとカオスをよそに、マリアと共になんだかいい雰囲気の下地を作り始めていた横島は、二人

の突込みに対し、「やれやれ」とこつた表情を浮かべると、答えた。

「あんたがうそー。わかつてないと思ひつけへー。」

「なにをよつーへー。」

「…ふむ？…面白に事を言ひつのか」

「…横島・さん？マリア・信用・できませんか？」

「…へつ？」「

出合つたばかりの協力者ならまだしも、数百年一緒に存在していた製作者でさえ全く予想外の疑問符を放つ人造少女に対し、横島は慌てて言葉を続ける。

「…いやいやいやー…そーゆひじじじゃないんだつてつ…マリアはわいこと思つよ、實際！…」

「…アリガトウ・と返答させて・いただきます」

「あのー、マリア？」

自分の知らない姿を見せられて、なんとななく困惑の製作者を余所に、なんとなくさつきの続きをはじめそんな一人であつたが、イラついた様子で、今度は褐色の肌を持つ女性が激しく問い合わせる。

「それじゃービー言ひことなワケつへー。」

「相手があの美神さんだつてことづすよ

「ワケわかんないわよっ！」

「つまりですねー、その一、実はですね？……一度しか言いませんから、良く聞いてくださいよ？」

「くだらない前置きは良いからさっさと」

苛立つた様子で横島の胸ぐらをつかみ上げるエミ。

ドクター・カオスもまた興味深げに彼の言葉の続きを待っていた。が、その続きが語られるよりも早く、彼女達の背後の茂みで靈力の輝きが膨れ上がる。

「ふつふつん。やあっぱり横島君を拉致つてたわねっ！ 見つけたわよ、エミッ!!」

「…あの人は、「性格的に」攻める方が得意なんですよ」

突如エミの背後にあつた繁みを搔き分け現れたのは、亞麻色の長髪を持ち、神通棍を構え、戦闘態勢万全の美神令子とおキヌ。横島と話していた為に完全に不意を撃たれ、しかもその特性から接近戦

の苦手な小笠原ヒミは その奇襲の一撃で落ひた。

実は忠夫、東京に来てすぐに、そのあまりの人の多さと交通の複雑さに大混乱を起こし、迷子になつて「えぐえぐ」と泣いて歩いていたところをおキヌに保護された、という事実があった。

それならば、迷子になつたときの為に、とバンダナに発信機を付けていた美神であったが、六道冥子襲来時にサンチラの電撃によつてあつさり故障。こういった仕事で、迷子で助手が使えませんでしたー、では話にならないと、耐電、耐水、耐熱、耐衝撃の高価な発信機に付け替えたのである。

「いちいちぶつ壊れるような奴を使ってたんじや、経費も馬鹿にならないからねー」とは美神の弁。今回は、その発信機が思わぬ効果を表した結果となつた。

「…ふむ。あつさりとこちらの計画が潰されてしもーたか。」

「ドクター・カオス。ミス・ヒミの脱落により・勝率・ダウン。撤退を・推奨・します」

先ほどまでの戸惑つた雰囲気はすぐになく、味方の脱落さえも冷徹に受け入れるドクター・カオス。

そしてその娘、マリア。

「あなたが『ヨーロッパの魔王』ドクター・カオスね

「いかにも。して、美神とやら、小僧の方に気を引かせての奇襲とは、なかなかやるのう」

「…なんのことよ？　あんた達が勝手に横島君に絡んでたんでしょうが」

「なるほど、一流の呪術師が結界を抜けられて気付かない程興奮しているとは、妙に挑発めいた戯言だとは思っていたが　　お前の策略か、小僧」

そういうて、横島を眺める目線には先ほどまでは確かに欠片も感じさせなかつた、超一流を超えた鍊金術師としての、深い　正に深海のような　知性と、底知れなさがあつた。

しかし、その人類の超越者に対し、

「え、なんのことつすか？」

と返す、悪戯の成功した子供のような顔を、隠そうとして隠し切れていない横島。

「…ふ、は、はははははっ！…」

そして、堪え切れなくなつたように大声で笑い出すと、そのままロングコートを翻して夜の闇へと消えていくカオス。

「　行くぞ、マリア！　今回はわし等の負けじやー！」

「イエス。ドクター・カオス」

彼は、自らの最高傑作である人造少女を供に、そのまま公園の外へと歩き出していった。

「ほーつほつほつほーー！」それで20勝18敗1引き分け！私の勝ち越しねつー！」

「ううう…次こそ見てなさいよ今すおおお…」

「美神さーん。そんな死人に鞭打つようなことしなくても」

「甘いわよ、おキヌちゃんーー！」の前は私が黒星だったんだから、
「れぐらいはせんつぜんのくよーおーつほつほつほーーー！」

その後ろでは、臍をかむHIMIと、それを足蹴にしている得意絶頂の美神、それを宥める幽靈少女の姿があつたが。

「…くくくくく。面白い小僧じや。なあマリア？」

「その器にて・答える・機能・持ひません・ドクター・カオス」

「なあま、うつ問うとこりつ。あの小僧こ、また会いたいか？ 我が娘よ

「…イエス。ドクター・カオス」

「わーっはっはっはーーー！」

「ビニードレッジいるかああつー！狐ええええつー！」
意味深な笑いを浮かべて走り去ったタマを追いかけシロが見た
ものは

「…狐が9匹いつ？ー！」

強烈な妖氣を漂わせる口を囲み、タマが9匹・・・綺麗な円を画
いて遠吠えを繰り返す様であった。

『へおおおおおおおん』

』

鳴き声が共鳴しあい、その響きがあたりを満たすと共に、その中心から湧き出でる妖氣はその密度と、量を増し、

『ぐおおおおおおおおおおおおん

』

一際長いその鳴き声の元 破け散つた。

舞い起こる粉塵に視界をふさがれ、あたりに満ちたあまりにも強烈な妖氣は人狼の鼻を狂わせ、シロに見えたのは、その衝撃に巻き込まれる9匹の九尾の狐と

「狐ええええっ！」

その姿が、9本の光り輝く金色のナーナカとなつて、混ざり合ひ光景だけであった。

「やあ」また会えたね。今回は残念ながらこの後用事があつてね。あまり相手をしてあげられないんだよ。

だから、手短くお話をするとしよう。君は、磁石とこのものを知っているかい？ そう、あの、子供の頃に君達ならば一度は触れたことのあるあの磁石だよ。

アレを砂場に落としたことはあるかい？

するとだねえ、真っ黒い小さな者達がたつくをさくつこいくるわけだ。

何が言いたいのかって？ 私が、今まで、君に伝えたくて話したことば、全て無関係なことではないよ。 もうひとも、戯言の中に含まれるソレを見つけるのは君だ。

『今』の私は観察者。

只見つめる存在だから。

おひと、お呼びがかかったよつだ。それでは、今日までの邊で。

良い夢を。

その日、G.S.美神除霊事務所で、美神は窓の外に降る雨音と、電話の応対に出ているおキヌの声を聞くとも無しに聞きいていた。

「はい、美神さんは今田は靈的に良くない田だから、予定を変更したいとおっしゃつてしまして、どうもあいすみません」

天気予報では一日中振りづけるらしい雨が事務所を包む。降りしきる雨に打たれ続いている事務所には、すっかり互いの存在に慣れた三人の姿があった。

事務所の内務係が板についてきたおキヌの後ろには、ソファーに寝つ転がり雑誌を読む美神と、その傍にぼけーっと立つて外を眺めている横島。

おキヌが電話を置いたチン、と言づ音にふと、特に意味も無く口から押し出されるようにして忠夫が美神に話しかける。

「雨が降つたから仕事は休みですか。大名商売やなー」

「この雨の中一晩中墓地にいたい? ギヤラも安いのに私はやーよ」

別に責めるような雰囲気は無く、ただちょっとした雑談と言つた風に話しかけた横島の問いに、やる気の欠片も見せず答える美神。

大して面白くも無かつたのか、ページの中ほどまでしか読んでいたない雑誌をテーブルの上に放り投げて身体を起こし、美神は大き

く背伸びをした。

閉じられる事無く中を見せたまま放りだされた雑誌を拾い、代わりに電話が終わってすぐお茶を入れてくれていたおキヌが美神の前にティーカップを置く。

軽く礼を言って一口啜り、会釈を返して今度は横島にも飲み物を届けに飛んでいくおキヌを見送りながら、美神は睨みつけるように雨雲を見る。

「それに、今夜は私の靈感がうずくのよ。なにか事件が舞い込んできそうな予感がするの」

不敵な横顔を所員達に見せつけながら、美神は続ける。

「…大きくて、とても厄介な事件が、ね」

「厄介、と言いながらも美神の表情には不安は窺えず、むしろその事件を待ち望んでいるような様子さえ垣間見えた。

その答えを聞き、考える表情になつた横島は、おもむろに美神に接近。

その鼻の頭を舐めた。

「なにすんのよこの馬鹿大つ！？」

当然の「」とく繰り広げられる阿鼻叫喚の地獄絵図。その中でも、横島は

「…ふ、ふ、ふ。お、俺の行動までは美神さんの靈感も察知できなかつたようですね」

「…脳みそぶち撒けなさい」

とつても馬鹿だった。

横島に絶対零度の視線を向けながら、美神は三割増に光り輝く神通棍を振り上げる。横島忠夫、絶体絶命の危機。

「ちよつ、まつ、美神さんそれは死ぬつ！？ おキヌちゃんヘルプ
ーつ！」

「死んだら私の仲間ですね」

そして美神の神通棍が今にも振り下ろされようとするその瞬間、玄関のチャイムが機械音を立てて来客を知らせる。

横島を救つたのは、笑顔の今まで美神を止めなかつたおキヌではなく、突然の来訪者が鳴らした玄関のチャイムであり、その来訪者に彼は心からの感謝の念をドア越しに贈つたのだった。

翌日、イタリア、ローマ空港

「へー、いたりやつて空港つひとじゆうそくへしどすねー」

「・・・・空港なんだつてば

明くる日の朝下がり。早朝の便で東京を出発した事務所員たちの姿が、日本から遠く離れた地中海の国、イタリアの首都にあつた。

「……」れは夢だこれは夢だあんな馬鹿でかい鉄の塊が空を飛んだのは夢だつたんだつ！ 絶対にそつだ間違いない間違いないはずだああああつ！

「ひめこわす」

物珍しさにきょりきょると周囲を見回しながら、しかし平然としてこむおキヌを余所に、忠夫は初めての飛行機体験にちよつとトラウマっていた。

虚ろな瞳で空を睨みながら、ぶつぶつと同じ言葉を繰り返していたかと思つと、突然頭を抱えてわめき出す。

周囲の視線を集めることに恥ずかしくなった美神は、そんな田舎者に迷わず突つ込みの一撃を叩きこんだ。

初めての飛行機にとち狂つた横島を、腰の入つた振り下ろし氣味のフックで元に戻す美神。

頭に直撃をいただいて、しばらく唸りながら蹲っていた横島の目に光りが戻る。

「…はつ！ ここはどこだ！ 外人のおねーさんたがいつぱい？ ーーこれは極楽があつ！！」

「本当に逝つときなさい！」

かなり本気の込められた一撃で、今度こそ正氣を取り戻した横島であつたとぞ。

「シーラータ美神！」

「どーも」

「おう、パーティーじゃないか！」

「ピートさん」

人込みでごつた返す空港で、美神たちに声をかけてきたのは、昨日、美神曰く「大きくて、厄介な事件」を持ち込んできた依頼人のピート。彫りの深い、整った顔を持つかなりの美形である。

「お前も大変やなあ。あの後、こっちにとんぼ返りやつたんやろ?」

「まあ、事態が事態ですから」

親しげに話し掛ける横島に対し、そんな彼にほんの少しの警戒心を持ちながら答えるピート。

ちなみに、犬飼忠夫、相手が美形だからってあんまりどう思つたりはしない。なんてつたつて実の父親が「アレ」である。

あの、凶悪面で、泣く子をひたすら謝ら「せた」という伝説を持つ犬飼ポチである。そのポチが、とっても優しげな美人を嫁にした、しかも押し掛け女房で。

それは今でも人狼の里、七不思議の一つのとなっているが、そんな凶惡な風貌の父親を持つ彼である。

いまさら顔なんぞで自分の理想の嫁さんが簡単に手に入るもんでもない、と幼少の頃からなんとなく悟っている。

しかも、だ。

彼が来客としてあの雨の日にこれ以上ないグッドタイミングで訪

れてくれたおかげで死なずに済んだという、ある意味命の恩人であるからして、生まれ育つた環境もあつてか、彼には結構恩を感じており、悪い態度を取る筈もない。

また見た目には同年代である事も手伝って、それなりに親しさを籠めた対応を取っているのだ。

余談ではあるが、かの伝説を作った後、その現場を妻に見られ、3日程生死の境をさまよい、さらにつの後誤解を解くまで全く喋つてもうえず、その度に泣きながら長老宅でやけ酒と愚痴に付き合わされる羽田になり、長老がとつても迷惑したそうな。

「え、ええと、お疲れでしょうが、時間がありませんのでまっすぐニチャ ター便までお願ひします」

乗り込むときに横島が抵抗したので一悶着あつたものの、とりあえずぼろりひにプロペラ機に乗り込む」一行。

が、そこには美神と横島にとって、あるいはこの先の命運を占つような人物達の姿があつた。

「あ～令子ちやん～

「令子ですか？！ なんであいつがここにいるのよ？！」

「げつ～ [冥子]HIIH～ まあか、協力するGUTSてあんたたちの」と？」

外観どおりせまつ苦しいキャビンには、先日出合った式神使いのGUSである六道冥子と、横島を攫つて怪しい儀式に使おうとしたG

S、小笠原エミが驚きの表情でこちらを見ていたのだった。

昨夜、東京・GS美神所靈事務所

「今回の依頼ですが、貴方の師匠であるGS唐巣神父からの依頼であります。報酬はこの黄金の鷹の像歴史的にも貴重な品です。それと、相手が相手なものですから、あなた方以外にも、何名かのGSに協力をお願いしています」

「そんなに厄介な相手なの？ 私と先生の二人でもまだ足りないほどなの？」

「ええ。とても手ごわい相手です。…あなた方も十分に気をつけて

それだけを言い残して、ピート・ド・ブラドーと名乗った青年は事務所のドアを閉め、雨の中へと出て言った。

「ふーん。報酬は文句なし。さっすが先生、わかってるじゃない

」

「へー、美神さんに師匠がいたんですねー」

「まあ、ねえ。それにしても、あの唐巣先生が私以外のGSに渡りをつけなきやいけないほどの相手、ねえ」

手に持つた人の二の腕ほどのサイズはある黄金でできた鷹の像を弄びながら、美神は眉を顰めた。

「すごい人なんすか？」

「ええ。確かに冴えないし馬鹿だしお金に疎いし頭は薄いけど、この業界では、間違いなくトップ10にはいるほどの凄腕GSよ。ただ、教会では悪魔祓いは認めていないから、ずっと昔に破門されたらしいけど、ね。神父っていうのも、通称みたいなもんよ」

半分くらいはボロクソに貶しているような台詞であつたが、彼女の表情には負の感情は無く、むしろ苦笑いの方が大きく存在している。

何せ彼女自身の母親も凄腕として鳴らしていたGSであり、そんな母を見ながら育つてきた美神も当時からそれなり以上の自負を持つていた。

そんな彼女が　修行中は金銭面に不満を感じていたとしても師匠として師事し、現在もその師匠が独り立ちした弟子を応援に呼ぶ程の信頼があり、美神もまた彼を凄腕のGSとして認める発言をする、そんな良好な関係を保っているのだ。

生き馬の目を抜くGS業界に置いて、同業者でありながらも子弟として信頼しあえる相手、それは彼女にとつても貴重なものであつ

た。

「ふえ～。そんな人が美神さんの先生なんですか、すつじいんです
ねえ」

「そんな先生が、こういつ物を報酬にして、しかも複数のG.Sに声
を掛けるって事は……」いや一筋縄では行きそうにないわね

だが、今までにその師が応援を求めている。

その事実は、彼女にこの先に待ち受けた事態の厄介さを伝えてい
るようだつた。

「まあさか、あんたがここに来るとは思わなかつたワケ!」

戦闘態勢つ!

「…………そりや、いつの台詞よ。この前の痛手はもづなおつた
のかしこり?」

デフコン一つ

「…………ううへへ..

：決して、このように因縁の相手と一緒に仕事をしなければならない、なんて言ひ意味の厄介さでは無いと思つが。

ライバル同士が視線を争わせ、火花散る視殺戦を繰り広げる傍らでは、押し倒され、伸しかかられ、顔を舐められ、巻きつかれ、と式神達に一方的に親交を深められている横島の姿があつた。

しかし彼も笑顔でそれらを受け止めている様子からすると、特に嫌がつている訳ではないようである。

幾度となく冥子が事務所を訪れるたびに繰り返されてきた状況にもすっかり慣れた横島は、手慣れた様子で彼らを優しく引き剥がし、長い胴体から抜け出し、小脇に抱えて、と手慣れた様子でちやっちやと動けない状態から離脱していた。

そして漸く落ち着いて、十二神将一部の大きな者達は出てこられなかつたようだが、に一聲かける。

「おうー、お前ら元気してたか？」

ぱうつ
シャー
ヒヒン
ぶるるつ

元気に返事を返す彼らの頭を撫でてやりながら、忠夫も顔をほころばせていた。一方的とはいえ、好意を向けてくる存在に対し、嫌

な感情を持つのは難しい。

そんな彼らを微笑ましげに前方の座席から眺める一人も、何度も顔を合わせているだけあり、リラックスした様子で互いに挨拶を交わしている。

「あら～、おキヌちゃん～。こんなにちわ～」

「あ、眞子さん。今回もよろしくお願ひします」

式神達に纏わりつかれる、ムツーロウさん状態の横島を横田に、二人の少女は、そのほんわかとした空気に溶け込みながら、雑談に花を咲かせていた。

まだまだ慣れの足りないピートを余所に、なんとも妙な空間が形成されていく。

「え・・・ええと、それでは全員揃つたようなので、出発させたいだきたいと思つます」

とは言え何時までもんびりしている訳にもいかず。

ピートの一聲に、各人それぞれに座席に着いたり、シートベルトを締めたり、再び張り付いていた式神達を和やかに話す主人を余所に、勝手に一声をかけて戻つてもらつたりと用意を整えていく。

「え～、ぴ～とお～もつとゆつくつしてこまおじょつよお

「いや、そういうわけには…」

「…ふ、色ボケ女」

「…レズは黙つてゐワケ」

「「やるかつ?...」」

が、一部はそんなの関係ねえ！ といった様子でいがみ合い始めたたりもする訳で。

なんでも無い一言であつさりと再開された夜叉達の視殺戦に気がされ、思わず横島の背後に隠れるピート。

「おいつ！ なんであの一人一緒に声かけたんじゃつ...！」

「そんなこと言われても、僕は先生の言われた通りに...！」

睨みあつ一人を背景に、横島とピートは「んー」としゃがみこんで小声で怒鳴り合つ。

その視線がゆっくりと背後の掴み合ひを始めた美神とHIMI、その間に割り込んで宥めるおキヌへと向かつ。その向こうではシートベルトを締めて大人しく座席に座っていた冥子が今にも泣きそうになつており。

「互いに生き残れるように頑張りつ

「協力、感謝します」

引き攣つた笑顔で肩を組む美神とHIMIを尻目に、一人はがつちり

と握手をするのであった。

「トーナビペーター、」の車は何処を走るんだ？」

「へ？ これは飛行機ですから、勿論飛んで…」

「馬鹿だなあ。ペーター君は、空を飛ぶのは鳥だけで十分だぜ？」

ああもつ駄目かもしない、とひょっとイライラしながら彼は心から思つたそつうな。

その後も色々じたじたは有つたものの、飛行機は無事、乗り換え地點の島に到着し、そのまま近くの港で借りた漁船に乗り換え、目的地ブリードー島へと一行はその足を伸ばす。

彼女らとしても、吸血鬼の活動できない毎間のうちでできるだけ接近し、あわよくばブリードー島内部に橋頭堡を作つておきたいという考えがあるからだ。

美神、HIMI、ペーターの三人は、漁船から降り立つと、海鳥の声一つない不気味な静けさに包まれた砂浜を警戒していた。

「…妙ですね」

「…ええ。見られてる感じはするのよ、ここまで接近しても全く反應が無い。静か過ぎるわ

ブランデー島至に辿り着いた美神達。しかし、彼女達のとおり、全く持つてそれに対するリアクションといつもののが無い。

「やーな予感がするワケ。いつたん撤収して、ここは様子を見たほうが良いんじゃない?」

「しかしそこでこの間にも先生たちがつ！」

ある意味冷たいHIIの言葉に、パートは彼女に詰め寄り激昂した。が、その焦り混じりの怒りを田にしても、HIIは冷静な表情を崩さない。

突き放すよりはあるが、先ず情報と退路の確保はやつておきたい、それは普通のGうなら当然の思考であり、また彼女達はその道の一派のプロ。

命の賭け所を間違いたくは無いし、そもそも命を賭けるような事態に陥る事こそ失態もある。

「で、突っ込んでいつて私達もピンチって言つ展開がお望み?」

「 つ！」

眼前に突き出された指と放たれた言葉、一いつに動きを止められたパートは、それでも何かを反論しようとして、その口を開く事無く悔しきで食いしばるに止めるのが精一杯だった。

「頭を冷やすワケ。そうカツカしてたんじや、まとまる考えも纏ま

らないワケ

「…で、H!!。ほんとのところ、ビハ邸ひへ。」

ふと、なんでもなことのよハテヒ言葉を投げかける美神。

「…確かに、誘いにしてはあからさま過すぎるけど、だからといってこのまま引き返したくじやG!!としての沾券に関する問題なワケ」

「…珍しく意見があつたわね」

だが同時に彼女達は普通のG!!では無く、己の能力に自信と誇りを持ち、傲岸不遜で大胆不敵、そしてそれに相応しい実力を持つたプロであり、その性格ゆえに罷と理解して食い破るつて、悔しがる相手を笑つてやる事が大好きでもあつた。

「…それなら、やる」とは一つ、なワケ

一人揃つて不敵な笑みを浮かべ、横目で睨み合ひながらも、楽しそうな表情。

「「まつ正面から、堂々と乗り込んで、逆に挑発してやるわ（ワケ）
……」」

これから派手な喧嘩を仕掛ける子供のような顔である。

その頃、飛行機の中で再び錯乱して暴れ出しつとした横島は、美

神に鳩尾に良いのを貰つて氣絶し、砂浜で騒ぐ美神達を遠くに眺める留守番のおキヌと冥子の足元で、波に揺られて白日を向いていた。

昼間だと言うのにその空間には日の光が一切入り込んでいなかつた。真紅に染め上げられた上等な布の掛けられた、玉座に当たるその場所に腰掛けた人物の前に、二つの足音が近づいていく。

不遜なる侵入者を待ち受けていた城主の眼前に、古い記憶の中にある忘れられない顔に良く似た人物が現れた。
いや、似ているのではない。

長い年月による老化を重ねさせ、面影を残して、しかしその眼だけは相変わらず底の知れない知識と好奇心に彩られている。

「…ふん。懐かしい顔を見たかと思えば、貴様か、『ヨーロッパの魔王』」

「ひをしづりじやな、夜の王」

「貴様に負けた以上、その名を語るには少々プライドが勝ちすぎでな」

「ふむ、ならば吸血鬼ブладー、と呼ぶとしようか」

「それで、何のようだドクター・カオス？ 機械人形を連れて、今度こそ我が存在を滅ぼしにでもきたか？」

男が立ち上ると共に、這い出すように彼から強烈な威圧感が吹

きつける。

が、老人は何も気にしていない様子で口元を吊り上げた。

「いやいや、何 ちょっとした戯れじやよ」

「失せろ。我を、『夜の王』であつた我を一度は退けた者として、今回だけは見逃してやる」

男は威圧感を収め、再び玉座に腰掛ける。

が、老人は拒絶とも脅しともとれる言葉を受けながら、その余裕の表情は小搖るぎもしていない。

それどころか、久方ぶりの旧友に会つたかのような親しさで、腰掛けた男に話しかけた。

「まあ、そう急ぐでない。一つ、提案をしきただけじゃよ。老いたりとはいえ、『ヨーロッパの魔王』と呼ばれたこのワシ、ドクター・カオスと、その最高傑作『マリア』が、お前の手伝いをしてやるうといつのじやよ」

「…何を企んでいる?」

眼前の老人が放つた言葉の意味を図りかねたか、男は眉を顰めて訝しげに声を低くする。

しかし、老人は黙して答えない。

返答を問つよう人に、楽しげな表情を保つたまま、受諾の握手を求

めてその手を男に突き出した。

「…！」今まで入りこんだつていうのに、歓迎のセレモニーもなし？
全く、ふざけてるんだか、余裕かましてるんだか…」

前進を決定した美神たちが舟を浜辺に固定し、そのままブリードー島唯一の村の入り口まで、その歩を進める。

だが、予想していた妨害どころか　村民達の姿さえも見えず、

ただ、ゴーストタウンが彼女らの目の前には広がるのみ。

「そんなんばかなつ！　先生！　みんな一つ！　誰か居ないのかあー
ーつ！」

ピートの声だけが、むなしく響き渡る。小さいながらも、百数十人は生活していたであろう村は、不気味な古城に見降ろされながら、今は只その抜け殻を其処に残すのみであった。

未だ時計の針は夕暮れ時を指し、太陽はその姿を水平線の向こうに隠してはいない。

だが、その古城の一室では、その光を無視するように蠅燭の灯りだけが彼らを照らしていた。

三十一個の駒が盤面を飛び交い、相手の王の首を搔き切らんとぶつかり合ひつ闘いの差し手らは、しかしその場面を見てはいない。

駒の移動を指示するのは互いに深く椅子に腰かけた老人と男で、駒を動かすのは彼らからは数歩離れた位置に置かれたテーブルの隣に控えるマリアで、動く駒とチヨスボードはそのテーブルの上だ。

盤面を見ずに、マリアの操る駒の動きと同時に一言づつ会話を交わしながら、彼らの局面は進んでいく。

「… ポーンを e - 4 へ。下の村に住民は存在していない」

「ポーンを c - 5 へ。ふむ、といづと？」

ほんの少しの思考の上に前進した黒の駒の隣を、反射にも近い速度の指示で白の駒がするりと搔き分け陣地に潜り込む。

「む、なかなか厭らしい手を指す。なに、半分は我が僕となり、残

り半分はこの島の地下に広がる洞穴に避難しておるのだよ。…ナイトをc - 5へ」

が、白の駒は前線から舞い戻った騎士にその首を刎ねられ、そのままボードの外へと消えていく。

「そやつらを放つておくつもりか？ ルークをd - 4へ」

しかし騎士が抜けたことで密度の薄くなつた兵士達のフーランクスの中央を打ち破るよつて、戦車がそのライン上へ躍り出た。

「……いらぬ世話だ。追い詰められた鼠は、猫に反撃することもある。ビシヨップをc - 3へ」

戦車によつて開かれた隙間を埋めんと僧侶が立ちはだかる。

が、しかし、その連携は既に断たれ、今となつては最後に王へと振り下ろされるであろう女王の剣を遅らせる程度の効果しかない事は、差し手たちが互いに悟つていた。

「鼠が追い立てられ無いからと静かにしてある道理もあるまい。まあ、あやつらがこの島の現状を知るには、地下の住民達と合流する必要が出てきた訳じゃな。ならば…」

ドクター・カオスが立ち上がり、静かにその纖手で駒を操つていたマリアの前に立ち、一つの黒い駒を摘みあげた。

空を飛んだ騎士は崩れた兵士の列に突き刺さり、女王の為の花道をこじ開ける。

「合流する前に、退路を絶ち、数の力で一気加勢に攻め落とすがよ
からう」

白の女王は既に落ち、白の騎士もその動きの中で王を守るには一
手足りず。

「…ふん、チェックメイト、か。良いだらう。」の「アドラー、気に
はいらぬが、貴様の指示に従つてやろうではないか」

結果を見ることなく漆黒のマントを翻し、すでに口の落ちかけて
いる空へ向かつて窓から飛び出していく吸血鬼を見送る。

「…くつくつく。わあ、小僧。今度は、どのよつた悪戯を仕掛けて
くるのか。失望せてくれるなよ?」

囁くカオスの前には、白の王をその狙いに収めた、黒い女王の姿
があつた。

すつかりと日も暮れて、丸い月が空にその表情をはつきりと見せ
始めた頃。

「おーつまつまつほほー!!」の「G.S美神にかかるば、吸血鬼なんて
ちよちよいのちよいよー!! しかも報酬アップのおまけ付! もつ
としづばいで、大儲けよー!!」

「ねえ～んぴーとお？追加報酬はいいからさあ～、私の事務所で働かない～？」

「いえっ！ あ、あの、そのつ…」

「えーなー、えーな。美人のおねーさまに誘われるなんて…なんだかとってもチクショー！！！」

「れい～ちゃん、これ～、とってもお～しいわよ～～？」

「あは、あはははは…」

麓の村では、とりあえず一番堅固そうな建物に籠り、ピートから相手が吸血鬼である」と、この島の住民が全て吸血鬼か半吸血鬼である事、そして、相手がピートの実の父親であることを聞き、交渉の末追加報酬をゲットしたGUS陣による大宴会が始まっていた。

「な、何なんだこの人たちのこの余裕はっ！」

周辺の空家から、日のあるうちに保存の利く食べ物と上等そなうな酒類を持ち込み、壁や窓に板を打ち付け、玄関を全開にして簡易な「要塞兼罠」を作り上げた後、床下に「ある物」を見つけた美神たちは、一先ず銳氣を養うことにしてある。「これが日本に古くから伝わる由緒正しき『天ノ岩戸作戦』よつ～」という美神の一言から始まった宴會は、日が沈んでも全くその勢いを衰えさせることも無く続いていた。

天の岩戸で騒いでいたのは外側であって、内側にいたのは神話の時代の引き籠もりであるが。

「こんなんでだいじょーぶなんでしょうか？」

「ん～まあ、大丈夫なんじゃね？ここが相手の手のひらの上って事は、攻めるも守るもアドバンテージはあっちのもん。あんまり気を使つても、疲れるだけだつて」

上質のワインナーをかじりながらの横島の台詞は、あんまり説得力が無かつた。

「それに、よく見てみろつて。の人たちはああ見えてもプロだぜ？酒なんて、始めの数口以外、舐めてもいねーよ」

そういわれてピートがその視線を忠夫から騒ぎの中心へとやると、確かにテーブルの上には、散々喰い散らかされたワインナーやらハムやらパンやらの残骸と、ホンの少しだけかさの減ったワインの入つているコップがいくつか。

「確かに・・・。横島さん、よく見てますねえ」

「わははははっ！！ 美人ぞろいだからな！ 眼福眼福つてやつよ！ ちつ！ あわよくば、とかくよつと思つてたのに」

「何か言われましたか？」

「なんも言つてねーぞ！ うわはははっ！」

何故か冷や汗をたらしながらの忠夫の台詞に、不思議そつな田で
そんな彼を見るピート。居たたまれなくなつたのか、

「ちょ、ちょと小便！」

「あ、横島さん！」

そのまま、忠夫は小屋から飛び出していった。

「うーん！…今日はいい月だなー」

降り注ぐ月光を浴びながら、気持ちよさげに背伸びをする。

「 里の皆、元気にしてつかなー」

そのまま、ふと月を見上げるも、その下に僅かに何か大きな建物
から突き出した細長い塔が引っかかってせっかくの月が台無しだ。

残念だなー。…そう思つて、しばらく月を眺めていると、その障害
物から、小さな、その本来のものと比べれば劣るとはいえ、人狼と
しての視力が微かな違和感を見つけ出した。

「ん？ なんだ、あれ」

其処に意識を集中して、更に『よく見る』。

「んん～～～～」

その障害物、古ぼけた城の尖塔に、建造物とは違う何かがある。

屋根の上の小さなモノ、それが何かは分らないが、しかし彼の持つた違和感が、徐々に焦燥感へと変わっていく。

すぐさま身構えた、その瞬間。その小さなモノが、動いた。

丁度その時ゆっくりと登っていた月が、その尖塔から抜け出し、小さく見える物をはっきりと横島の眼に写し込む。

「つーーーー！」

満月を背に、全長2メートルはあるうかという巨大なライフルを構え、こちらを狙う先日出会った鋼鉄の少女、マリア。

彼女はその銃口を、長大な銃身に見合つた人では支えきれぬであろう重量と暴力を持つそれを、海に向けて静かに佇んでいた。

「マリア！ …つて」とは、あの変な爺も屈やがるのかつ！…」

瞬間、彼女の持つ巨銃の先頭が光りを放つた。

目視できる速度ではないが、ややあつてその銃口の向けられた先で巨大な水しぶきが上がる。

夜空にぶちまけられた海水の中には、粉々に碎かれた漁船の破片が踊っている。

直線距離にして約7？。常識外れの超々距離から放たれた弾丸は、着弾の後で、長く響く銃声を聞かせながら、忠夫たちが乗ってきた舟を粉砕した。

「つ！ しまつたあ！…」

銃声でようやく逸れていた意識を取り戻した横島は、そういうて小屋に向かつて駆け出す。彼の背後には、茂みを搔き分け、家のドアを打ち壊し、その眼を真紅に光らせた村人達がいた。

「海の孤島で逃げ道無しどか、えつげつないことしてくれやがるつ！…」

走り出す横島の耳に、今度は別の方角から、しかも今度は連續で

着弾音が響いている。

射手は彼らが狙いではないようだが、その足は一隻たりとも見逃すつもりはない様子で、淡々と同じリズムで引き金を引き続けていた。

が、突如その赤熱した銃身が半ばから歪み、最後に放たれた銃弾は何もない海へと突き刺さり水しぶきのみを夜空へかち上げる。

「…間接部・ロック・解除。火器管制・停止。望遠モード・通常モードへ・移行。試作型・長々距離狙撃ライフル・『ベヒーモス』破損、即時破棄。…通常モード・復帰します」

古城の尖塔部、頂上にて、役目を終えきれなったライフルを投げ捨て、その連續した射撃に耐えるために固定していた関節部を開放しながら立ち上がるマリア。

「……ヨコシマ・さん」

その人工知能に去来するのは、先ほど望遠で捕らえた青年の姿。

「ふーむ、機関部はともかく、銃身が先にヘタりおったか」

何時の間に現れたのか。

階段も無く、マリアでさえ登つてくる為にロケットブースタを使わねばならなかつたその場所に、静かにロングコートを夜風になびかせるカオスの姿があつた。

興味深げに打ち捨てられたライフルの銃身を、顎に手を当て眺めるその表情にはマリアを責める色は無く、ただ己の思いつきで作った装備品の不足部分をどう改良しようか、と悩んでいるだけである。

「ドクター・カオス。質問を・よろしいですか?」

「ほう? わしの行動に疑問を持つようになったか。ええぞ、聞いてみる」

「なぜ・いのよつなことを?」

背中を向けたまま問いかけてくる彼女は、ほんの少しながらも、育ちつつある感情が生み出した不満の色が見て取れる。

それを聞いたカオスは、少し微笑んだ後、大きくその口の端を吊り上げた。

「決まつておる。おもじろそつだつたから、じや」

「ノー。ドクター・カオス。その答えでは・納得・致しかねます」

「ふはははっ! ……さてな、それこそ、あの『傍観者』ならば、こういつじやろつよ。眞実は、自分で見つけてこや、価値がある、とな

「いつに無く饒舌な娘に、愉快そつに、心底面白やつに答えるカオス。

「それとな、マリア。それはロジックではない。納得していないのは、お前の、『感情』じゃよ」

「… ハラ。 その回答は・私自身が・否定しています」

「わーっはっはっはっはっは…！」

高笑いを上げる力オスを見るマリアの表情には、だがしかし本人が否定した感情が、微かな苛立ちがあつた。

「むう。 現代のGSとやら、なかなか侮れるものではない、か」

GS陣営が要塞として固めたその小屋は、もはや、ただの木の壁に囲まれた小屋でなく、呪術師エミと、GS美神の結界術により、まさに鉄壁の要塞として機能していた。仕方なく狭い入り口から入ろうとする操られた村人達は、その狭さの為人数の多さを活用できず次々と各個撃破の憂き目を見るばかり。

「大分相手の勢いも落ちてきたわね、もう一頑張りよ、ピート！
エミッ…」

「はいっ…」

「そんなこと、言われなくてもわかってるワケ…！」

進入してきた相手に対し、ピートがその満月で絶好調の吸血鬼としての能力で攪乱し、美神ががっちりと漫透を防ぎ、エミが大技で

一気に殲滅する。正に、軽騎兵・重歩兵・砲兵といった組み合せである。

「眠れつ！――」

ピートが一気に懷に飛び込み、吹き飛ばし、

「喰らいなさいっ！――」

美神がさらに切り崩し、

「靈体、撃滅つ、波あああああつ！」

HIIがその広範囲技能で仕留め続ける。

攻防戦は、たった「三人」のGJ陣営の有利なままに移行していくようであった。

その光景を、まるでケーキに群がる蟻のよつな村人たちの動きをその後方で見守るのは、城から飛び立ち、夕暮れの闇に潜んで操り人形となつた彼らを集結させていたブладードである。

「ふむ、やはり『夜の王』としての誇りは捨てきれんとみえる。この期に及んで、最大戦力である自分自身を出し惜しみするとは、な

その様子を、さりに遠く離れた樹上より眺めるカオス。

マリアのロケットブースターで一気にここまで駆け下りるようこ
移動してきた彼は、娘を木の下に残したまま一人観察を続けていた。

「最初から、己が飛び込んでいけば、あの程度の結界など、ものの5分と持たずに破れたであろうに」

どこか、物足りなさを感じさせる表情で、そつそくカオス。

「詰まらんが…やはりアヤツ程度ではこいらへんが限界か」

「ドクター・カオスっ！」

「なんじゃマリ…つおつー？」

いつに無く慌てた様子でマリアがカオスに声をかける。

と、同時にその田の前をすさまじい速さで、なにかがすっ飛んでいった。

「ちいっ…！ 外したかっ…！」

「えへへそんなあ～～～」

「まよい、真子君、私の後ろに下がりたまえ！」

その声に慌てて聞こえた方を振り向けば、真後ろの木の枝の上に、いくつもの握りこぶし大の石を抱えて、一つ目を投げつけ終えた恰好で舌打ちをしている忠夫と、その木の根元で背後に真子をかばっている唐巣神父の姿があった。

少なくとも老人に向けて投げつけるような威力と速度では無いそれを不意に食らえば、いかなカオスとは言えただでは済まない。し

かしそれを全く容赦なくやつてみせた横島に、力オスは久しぶりに驚きと焦りを感じさせられた事もあってか感嘆の声を上げる。

「ほおう！！　どうやつてこの場所、いや、このわしのところまでたどり着いた！？」

それまでのつまらないなさ氣な様子など無く、まるで出来の良い生徒を見た、と言わんばかりの表情でそう尋ねる力オスに対し、

「あほかっ！！あんたを追いかけたんじゃねえ！！　俺の鼻は、一度見つけた美人のねーちゃんを自動で追尾するんだよッ！！！」

と、胸を張りながら大声でそう返す横島。

どうやら彼の鼻が探し当てたのは、力オスとともにいたマリアの方だったようである。

「動くんじゃねえぞ！　もし動いたら、この石をつ、満月下の半人狼がつ、思いつきりあんたに投げつける！」

「…ほう、で？」

「わからんのかあああ！　ものすッ＼＼痛いにきまつとるやろがああーー！」

「……痛いじやすまない速度だつたような気がするんだがね、横島君」

力オスと顔を合わせ、追いつめている筈なのに追いつめられたような表情の横島を見上げながら、少々髪の毛の薄い人物が呆れたよ

うに呴いた。

種を明かせば、一〇〇である。

要塞作成の際、美神たちが見つけた「ある物」とは、地下へと続く扉であった。

ピートも知らないその扉の中には一本の通路があり、途中に横道が無く近くの森の中にある出口まで一直線に伸びてゐる事を調べ、とりあえず使える物は使おうと判断した彼女達は、簡易な結界と偽装をしていたのだ。勿論その周辺に誰か居たり、侵入者があれば分るようにした上で、である。

後は、相手をおびき出した後、背後から大将を強襲するつもりだつたのである。

そして、作戦決行の時、地下を移動中の忠夫と眞子は、その戦いの音を聞きつけて、巧妙に通路に隠されていた扉を開いて偵察に出てきた唐巣神父と出会つた。

初めは警戒したものの、眞子が唐巣神父を知っていた事、また長々と説明している場合でも無かつた事もあり、三人はそのまま鼻が効くと主張する横島を先導としてここまでやってきたのである。

そして樹の上で美神達が居る方向を眺めながらぶつぶつと呴いている黒いマントの怪しい人物を発見。

警戒しながらも声をかけようとする唐巣を余所に、横島はその辺にあつた石をいくつも拾つと、するすると無音で樹に上り、いきなりそれを投げつけたのだ。

唐巣も止める間の無い早技であった。

ちなみに、何故この人選になつたかといふと、冥子がもし小屋の中で暴走した日にはまずG.S陣営は全滅するのは必至。

しかしあまり戦力を割きすぎると大将を倒せない可能性があるし、時間がかかり過ぎれば要塞が落ちてしまう。

そこで横島が護衛兼宥め役としてその貪そくじを引かされたのである。

ちなみに、冥子には「大将の近くで開ける」と、横島は存在さえ知らされずに、本人は中身を知らないビッククリ箱が渡されている。

使用目的は、押して知るべし、だ。

しかし、その結果として人違いではありながらも、王手をかけたように見える横島の眼前では、腕を組んで木に寄りかかったカオスがにやにやと笑みを零していた。

「ふうむ」

「なんだよつーー！」

「小僧。お前、『コーロッパの魔王』を、ちと舐めとりやせんか?」

「…まずいっ！横島君、引きたまえーー！」

「えつ？」

瞬間、横島の斜め下から連続した銃声が響いた。

それは一発も外れることなく、彼を　彼の足元を襲つ。

銃弾に抉られた枝は、それまで支えていた横島の体重にあつさりと負け、彼を空中へと放りだした。

「つそーん！…」

石つぶてを大量に抱え込んでいた横島は、空中で姿勢を正す事も出来ずそのまま茂みへとその姿を隠す。

どうも若干生々しい音がしたことから察するに、姿は見えないが、受身には見事に失敗したようである。

「目標の・排除を・確認。ドクター・カオス・お怪我は・ありますか？」

「全く問題ないの。ピンピンしどるわ」

「イエス。ドクター・カオス」

忠夫が立つている木の枝を正確無比な射撃で打ち落としマリアは、カオスに寄り添うようにその傍らに立つ。

「詰めが甘いぞ、小僧。相手の戦力は、キチンと確認しておかんとな？」

「いたたたたつ！…　ちっくしょー！」

「大丈夫かね！？　横島君！」

頭を振り、茂みの中から木の枝と葉を振り払いながら立ち上がる横島の隣に唐巣が駆け寄る。

「全然平氣つけど……あんの爺い~~~~!!」

その手を借りて足元に絡みつく茂みから脱出し、先ほどまで力オスが立っていた樹上を見上げるが、すでに其処にその姿は無く。

「それでは、諸君！　また会おう！　わーっはっはっは~~~~!!」

「ソーリー。横島・さん」

その声だけが、月夜に響いていた。

その後は特も問題は無く、作戦どおりに背後から高みの見物をやつていたブладーに唐巣神父を加えた三人での強襲が成功する。

幸いにも、例の箱は弟子の考えがなくとなく読めた師匠によつて使われることが無かつた。

使い手はともかく、最強の火力である十二神将と、彼らと完璧な連携を取りながら十三番目の式神のごとく襲い掛かる八つ当たり気味の横島の投石と、操られた村人を人質にとられること無く凄腕G.Sとしての能力を存分に振るいまくった唐巣神父の手によつて、全戦力を投入し、全くの無防備となつていたブладーは一気に追いつめられる

しかし流石に相手は歳経た吸血鬼。

満月下であつた事もあり善戦するも、その影響下に置かれていた
かつた村人達が帰つて来ない唐巣神父を救出に出て来た先がGS二人
とピートが立て籠もる小屋だつた事で顔見知りのピートのお陰も
あつて合流、支配下の村人達を突破してきた美神たちが参戦。

最終的には集団リンチの無残なありさまとなり、怒りに燃える村
人達とGS、十一神将、そして相性最悪の神父の手によつてフルボ
ツ「！」。

こうして時代錯誤にも世界征服を企んでいたらしい吸血鬼は、味
方であつた力オスの名を呼ぶもとつくに逃げ出した彼が合流する筈
も無く、そのまま息子のピートによつて、その影響を取り除かれ、
島には、平和が戻つたのであつた。

「あらがとうござります！　これも先生とみなさんのおかげです！」

「いやいや、全ては神のおぼしめし、だよ」

「！」

「どーでもいいけど、ちゃんとした、追加報酬の方、おねがいします
ね、先生」

「…あいかわらず、君は師匠への尊敬つて物が足りないのだね」

翌朝、父を封印した棺桶を背負つたピートとともに、GS一行は残

つていた船の前で別れの挨拶を交わし合っていた。

ちなみに島に残った船はこれが最後である為、ピートは彼らを見送りがてら父を海に沈めてくるつもりらしい。

何となく、どこか別の場所で引き揚げられた棺桶を、金目の物が入っていると勘違いした漁師が開いて復活し、奇妙な冒険の第一部とかが始まりそうだな、と横島は思った。

「まあ、頑張れよな、ピート」

「え？ はあ、よく分りませんけど… はい」

友人の肩を叩く横島であるが、彼にもこの後再び空の上を飛行機に乗つて飛ばなければならないと言つ試練がある。

人を元氣づけている場合でも無いのだが、しかし彼の頭にはそんな考えは欠片も無かつた。ただ、時間が止まつたり加速したら友人のよしみで助けに行つてやろうか、とは思えるほどには気遣つている。

頬を引くつかせて弟子の態度に頭を痛めている唐巣神父。

追加報酬の内容に期待を膨らませている美神。

おキヌと会話に花を咲かせている冥子。

ピートの腕に絡んで従業員に誘つているH!!。

それを羨ましそうに見ている横島。

彼らの上に、さとさんと地中海の陽光が降り注いでいた。

タマと呼ばれた狐を巻きこんだ粉塵は、しばらく漂っていたかと思うと、突如それまで禍々しい妖気を放つていた岩があつたところを中心にして渦巻き始める。

「…くわおーー！」で見捨てては、寝覚めが悪いでござるなつ！

それまで呆然とその光景を眺めていた人狼の少女は、その中心に向かつて走っていく。

「狐つー生きていなくとも返事をするでござるーー！」

かなり無茶な呼びかけをするが、それに対する返答はなく、再び、

粉塵に動きが現れた。

「ふわっ、なんでござるか！…」

「よつしゃあああああつ！…！」

粉塵が吹き飛ぶと同時に、眩い光が差し込み

現れたのは、

「やつたわ！！ 私はやつたのよ！！ 九体に分けられた金毛白面九尾の狐の分御魂！ その主人格をとつたわ！！ これで私の女の魅力にあの朴念仁もめろめろよー！！」

輝くナインテールを持った、少し釣り目の

「これであんたに馬鹿にされることも無いわーど、この私のなあ
あいつすばでいは？！」

年の頃13・4の、無いつすバティをもつた美少女であった。

「…あれ？」

それから少し後の事。

「ひつく、ひつく」

「あ～なんと云つか、元氣を出すボーリングねえよ。」

体育座りで膝の間に顔を隠し、泣き声をもらす少女と、それを良く分らないながら慰めるシロがいた。

「ふえん」

「ああああああ、泣くなで！」
せりぬかああつ……」

「わたしのないすばでい／＼」

「…泣いても兄上は寝込んで居るよ」

「あんたに許可もひつ必要があると思へんの?」

しかし、それまで泣いていた筈の少女は、シロの声に反応して顔を上げる。

その顔には涙の跡など一筋も無い

「やはり、狐は狐でも、女狐でござつたか」

— — — — —

しばし睨みあう二人の間を、乾いた風が吹き抜けた。

の事を覚えている人が居たとは！－－これは久方ぶりの驚きだよ！

流石はドクター・カオス。人にして、人を超えた天才だ。あの邂逅をその記憶に残せるものが、そしてその言葉を聞くどこができるとは、なんつとも最高だよ！

あー、驚いた。おや、客人。なにをそんなに驚いているのかね？

ひどいなあ。私だって、たまには声をあげて笑うとも。

いつも言っているだろう？「楽しい」って。

いやいやいや。今日は美味しい酒が飲めそうだ。どうだね、客人も一杯？

そうかい、それなら、君にも

良い夢を。

人狼の里、鍛冶場にて。

昨夜から響いていた槌と鋼の音はすっかり鳴りを轟め、今は砥石と刃の擦れ合う音がその空間を占めていた。

襷掛けで一心不乱に短い刃物を砥石で研ぐ犬飼と、こちらは刃物の柄であろうか、木屑を吐息で吹き飛ばし、最後の仕上げにやすりで形を整える作業に入った犬塚、その二人が居る。

ややあつて、大きく息をついた犬飼は顔を上げ、満足げにその短刀の艶やかな刃に顔を映した。

「よし、できたぞっ！…」

「ほつほー、見事な仕上がりじゃないか」

その声を聞いて寄つて来た犬塚の手には、何やら細いノミと筆が握られている。先程まで彼がいた所を見てみれば、そこには途中まで數文字削られた柄があつた。

「むう…、昨日の不埒者は腕はたいしたことは無かったが、こりして見れば獲物だけは業物だつたようだな」

「まあ、月夜に刃物を振り回しながらうちの里に突っ込んでくるからには、そりや何かしらの自信はあつたんだろうが」

鍛冶場の隅にはどうやらその短刀の元半分であつたらしい柄付き

の日本刀が転がっている。

途中から見事に折られたそれは、かつての禍々しさを失いつつも、しかしその刃物としての切れ味は残つており、まだまだ切れるぞと主張しているようでもあった。

「…昨日の客人は、久しぶりの真剣勝負で少々興奮しそうとは言え流石にやり過ぎたか？」

「武器無を無くして気絶した上、あの程度の腕なら良い刺激になつたんじやないか？」

ちなみに件の客人こと不埒者、気が付いたらまるで一晩中山中を駆け廻つていたようにボロボロの服と筋肉痛で、今も大量の疑問符を浮かべながら、放置されていた山道を下山中である。

怪しい日本刀を全く警戒せず握つてしまつた上に、暴れるだけ暴れて姿を消した彼を発見した上司、某反社会的組織とその組長に、訳の分らぬまましばらく追いかけまわされる目に会つただが、まあ、余談である。

「やう言ひつ事だ。さて、勢いで作つてしまつたが、これ、どうする？」

「…バカ息子に押し付けるか」

「親馬鹿だなあ。素直に様子を見に行へつて言えば良いじゃないか

「何のことだ？」

「さーて、な？」

横目で犬塚を睨むも全く答えた様子が無いのに鼻息一つ。

犬飼は素知らぬ顔で短刀を布で拭つた。

「…まあよい。行き先は百合子嬢から聞いておる。行くぞ犬塚」

「まてまて、いま仕上げるから」

そう言い残し、先程まで作業していた場所に戻つた犬塚は、犬飼の手から受け取つた刃物を柄と合わせ、その握る部分に薄くノミを当てていく。

そして最後に彫つた部分をなぞる様に筆を動かしていく。

「良し、完成」

それを覗きこんだ犬飼は、感心した様子で頷いた。

「『伝家の包丁・しめさば丸・まあくつう』…なかなかうい名前ではないか」

「だろー？」

元妖刀、現包丁のそれを和紙に包んで箱に入れると、懷に突つ込んで鍛冶場を出て行く男一人。

…そして、それを離れた物陰から観察する一人の少女の姿があつた。

「聞いたでござるか！父上たち、兄上のところに行くつもつござるよッ！…！」

「まあ、あの犬飼つておっさん締め上げる手間が省けたわね」

「死ぬ氣か狐」

「…えつ？ そんなに？」

「おひと、おひきせりもつ出発するよつでござるな、行くぞ狐つ」

「ちよ、待ちなさいよ、そんなマジ顔で言われたら怖いじゃないつ」

その日、人狼の里から一人の人狼と、頭に木の枝を括り付けた人狼と狐の少女が出て行つたのを、太陽だけが遙か天上より見つめていた。

場所は変わって、『ひらは都会のとある地下。

縦横に走る下水道の通路である。

「へっさいなー。もう鼻が馬鹿になつてますよ

「あんたにはきつつい依頼だつたかもね。なんてつたつて下水道が除霊現場なんだから」

東京の地下深く、まるで高速道路のトンネルのよつた、人が歩けるほどに整備された下水道。そこにはおなじみの事務所のメンバーの姿があつた。

『最近になつて化け物が姿を現し、職員が多数被害にあつた。早急に退治して欲しい』

要約すれば、今回の依頼はそういうことであつた。除霊対象の正体は不明。正確な出現位置も不明。その強さも不明。しかし、できるだけ早くやつて欲しい。

当然の『』とく危険度は高く、しかし報酬も大きい。美神は、その依頼を聞くと迷う事無くOKを出し、その日の内には下水道へと潜つた。

が、その広い事。

発見された場所まで行き着くにもそれなりに時間がかかり、その間中廃液や生活排水の匂いの只中にいた横島の鼻は、すっかり麻痺して使い物にならなくなってしまった。

「はああ」

「どーしたんですか、横島さん」

「いや、なんでもないよ。それより美神さん。そろそろ化け物とやらが田撃された地点ですよ」

「ええ。…来るわよー！」

美神がその歩みを止めると同時に、

「しねやあ！」

化け物が水中から姿を現す。下水道の水を撒き散らしながら、しかしその匂いに負けないほどの腐敗臭を放つ妖怪、西洋で言うゾンビそのものの外見をした敵だった。

「雑魚が面倒くさい事してくれるじゃない！　いいかげん、極楽へ行きなさいってのー！」

いつもの不定形の悪霊と違い、腐りかけ、変貌した元人間の肉体を持っている。

ネクタイをし、元はスーツであつたろう襤褸切れを身に纏つたその

姿は、かつてはどこかの家庭の良き夫だつたかもしれない、頼もし
き父であつたかもしれない彼が、既に人を襲う化け物へと墮ちてし
まつた事を示していようつだつた。

何処で手に入れたのか、そいつの体の一部とでも言つのだらうか、
えらく妖気を放つ金属バットをもつている。

啖呵を切つた美神は、輝く神通棍を振りかざし化け物に向かつて、
一気に振り下ろす。

「げは、げははははつ！」

しかし、化け物はその手に持つた金属バットでその一撃をあつさ
りと防ぎきる。

「かつたあああい！！　何よこいつ！　いつもの奴らとは一味違つ
！」

「援護します、美神さん！…」

そう叫ぶと忠夫はおもむろに懷に手を突っ込むとなんとなく、輝
いているようにも見えないことも無い石ころを取り出した。

「ぐらえい！唐巣神父お手製の聖水をまぶした、人狼・だいなみつ
く・すとれーとおー」

勇んだ横島の取つた行動は、どうやら前回の吸血鬼の事件の際に
学んだ投石だつた。

しかし、綺麗なピッチングフォームでそれを投げた横島の眼に、往年の超有名打者のような一本足打法で待ち受けるゾンビが見えた。

バットが一閃。

次の瞬間、横島の額から凄く良い音がした。

「はう！ … いたたたた、こんちくしょ――！ 人の新技あつさり破りやがつて――――！」

「げはげはげはげはげは――！」

忠夫の手から凄まじい速度で投げ放たれた『人狼・だいなみつく・すとれーと』とやらは、あっさりと強烈なピッチャーフォームで忠夫の額に直撃する。が、コンマ2秒で復活する辺り、その威力もタカが知れているのか、忠夫が非常識なのか。

「馬鹿やつてんじやない！！ しょーがないわね！ ちょっともうたいないけど、これでも喰らいなさい――！」

そういうて美神が取り出した破魔札には、燐然と輝く一千万の文字。

高笑いしていたゾンビが気付いた時にはもう遅かった。

靈氣を籠められ飛んでくるそれをよけるには時間が足りず、さりとて迎撃するにも態勢が悪い。

「ぐばつ？――げはああああつ――！」

そのまま破魔札の巻き起こした光と爆発に巻き込まれて、その姿を消す化け物。

もうまうと上がる白煙の向こうに、上半身だけになつて動きを止めたゾンビが見えた。

「ふう…仕留めたみたいね」

「美神さん！まだっ！」

が、しかし、ほんの少し息をついた美神を嘲笑うように、彼女の背後で水しぶきが上がり、その中から何かを吐きだした。

「うそ、もう一匹っ…！　つあ！」

「げはははははははは…！」

油断をした、とも言い切れないが、背後から化け物の下半身のみが突然浮上し、美神に一撃を加えると、そのまま上半身と合体する。おキヌの声によつて致命傷は避けたが、それでも頭部に喰らつた一撃によりふら付く美神。

「美神さん…ちつくしょーーー！」

横島は激怒した。

しかし美神の前に佇むゾンビは彼女を見ながらも、横島を挑発す

るよつに指を一本上げて、くいっと自分に向かつて招く動きを見せる。

よわしい、その挑発に乗つてやるうではないか、と決意した横島は、大きく振りかぶつて第一球を投げた。

「これでもくらえい！！ 人狼・だいなみつく・ふおーくつ！！」

唸る剛腕。

迫る球。

そして自分の手には金属バット。

その瞬間、ゾンビの腐つた脳裏によぎつたのは、いつか見たあの球場と、そして炎天下の中ともに霸を競つたライバル達の闘志に溢れた若々しい姿、そしてベンチから見つめるマネージャーの

何かがゾンビの脳裏に溢れかけ、動搖したが故にか振られたバットに手こたえは無かつた。

そして、よぎつた物を全て吹き飛ばす様な痛みが股間から頭頂部まで突き抜けた。

ボールではなく歪な形をした石じろは、横島の手によつてフォーカクとはとても言えない、まるで生き物のような動きで見事に化け物のバットを掻い潜り まあ、その、いわゆる『漢の急所』に直撃したのである。

「…………ふおおおおお…………」

切ない声を上げるゾンビの脳裏に、あの日の記憶が蘇る。

あの夏、自打球を同じように食ひた彼の腰を優しく叩いてくれたのが、もしかしたら今も家で帰りを待ってくれているかもしれない妻だった。

早く帰ろう、帰つて、遅くなつたと謝らなくては

その瞬間、復活した美神が叩きつけた破魔札で、彼の記憶と思い出は、自らを縛っていた怨念と共に儚く散つて、逝つたのだった。

「……ここにことがあつたんですよ

「……横島君。モーチョットましめ使い方は無かつたのかね？」

「いやー……あつはっは……」

次の日、唐巣神父の教会には、額に打撲の治療痕がある美神と、その助手、横島忠夫。そして、何故かこちらも少々腰が引け気味の唐巣神父とその弟子、ピートの姿があった。

「やはり、悪霊全体が少しずつ強くなつてきてこるようだね

「…殺虫剤と害虫の関係ですね？先生」

「その通りだよ美神君。やれやれ、まだまだ修行が足りないということか？」

例えば、ある細菌に良く効く薬があるとする。しばらぐの間その薬で細菌は殺すことができるだらう。だが、もしもその薬に抵抗できる細菌が現れたら？

繰り返される人の知恵と極小生物の齟^{シツ}。

単純にして、だからこそ難しい答えの一つが、より強い薬を持つてその細菌に当たる事だ。

「その事ですけど、先生。『妙神山』への紹介状・・・頂けませんか？」

「…美神君、君にはまだ早すぎる」

「あら、こつこつ修行を続けて…また相手に負けそうになつたら修行するんですか？」

「…むう、しかしだね」

「私達のお仕事は…そんなに甘いものでは無いことは、先生もよつぐ存知でしょ？」

「…下手をすれば命に關るんだぞ？」

瞳に不敵な輝きを宿し、美神はその言葉を舌先にのせた。

「あら、そんなこと やつてみなくちゃ、わからないわ……」

シリアルスな光景を見せる師弟の背景では…

「あれ、ピートじやないか、お前HIIちゃんとこに行つたんじやなかつたのか？」

「僕は先生の弟子ですつばほ……」

「ほーか。そーいう割に、あん時は少し靡いてただろ？」

「…だつてあの人のところに行つたら、「血を吸つて」とかなりそひですから

「…まあ、田嶋の行いとこがなんとこつか

顔に縦線を入れたパートと、自分の田嶋の行いに自覚が無い忠夫がのんびりと余話を楽しんでいた。

時は少し流れ、G.S.美神除霊事務所の面々は、とある山、しかも靈峰とされる山こいた。

妙神山。世界でも有数の靈格を誇る大靈山であり、神と人間の接点の一つといわれる靈峰である。その山中に、靈能力者間では有名な修行場がある。

その存在を知る者達曰く、「強くなつて帰つてくるか、死ぬか」

その修行場に続く一本の細い道。いや、道といつのもふさわしくない。まさに、断崖絶壁の崖にできた一筋の亀裂。彼女達は、現在、そこをひたすらに歩いている途中であった。

「な、なんちゅーとーですか、こいじま」

「あんたは落ちてもいいけど、荷物だけは落とさないでよ」

「…落ちるときは横島さんの命と荷物、一緒に落ちやうですね」

「不吉なこと言わんとこしてくれーーーー！」

彼らに緊張感を求める事自体が間違っていたようだ。

「へつりつやつてゐるひて、たひつひて、目的地へと辿つづく。

「見えたわよ」

「ふええ～。おつきな扉ですねえ」

「へんな顔がつこてるけどね」

木造の、古めかしくも威厳を放つ、いかにもな扉の前で、何気なく会話する彼女らの間に

「「誰が変な顔じゃ～～？」

「「うひやあ～～？」

突然の怒声が鳴り響く。驚いて飛び上がるおキヌと忠夫を尻目に、美神はその声の主達に話し掛けた。

「修行希望者よ。さうさと口・口、開けていただけないかしり？」

「「我らは」の門を守る鬼。我らの許可なくして、」の門をくぐる」とまかりなりんつ～～？」

その声が終わるか終わらないかの「ひ」、内側から、その扉が開かれた。

「あら、修行希望者の方ですか？」

「… 5秒と持たずを開いたわよ？」

「「小竜姫さまあつ～～？」

扉を開けて顔を覗かせたのは、一本の角を持った、いやせか妙な服を着ていたが間違いない、美少女であった。

瞬間、風が吹いた。

「嫁に来ないか？」

「「「ひおひーーー。」」

「…はあ？」

「美神さん、私、ぜんつぜん見えませんでしたよ、今の」

「…」」んなとこりだけレベルアップしなくともねえ」

もはや人の目どころか、おそらく鬼の目にさえ止まらなかつたであろう速度で動いた忠夫は、塵一つ舞い上がりせずニ少女の前に慣性の法則さえ無視しつつ停止すると、とりあえず口説いてみた。

頭を抑えつつ忠夫が驚くことに、小竜姫を口説き始めると同時に地面に落下した落とした荷物の中からおもむろに神通棍を取り出した美神は、とりあえず、打撃音が生々しい音を出すようになるまでシバキあげた。

「…えー。私がこの修行場の管理人を務めます、小竜姫と申します」「小竜姫さんっすか！！　いいお名前ですねーー！　嫁に来ないか？」

「何者ですか、この方は」

「…只の「ぶあか」です。今片付けます」

真っ赤に染まっていたはずの横島が、瞬時に復活し、性慾りも無く小竜姫の手を握り、口説こうとしたところで再び美神の躰が行われた。

決め顔のままで沈んでいく彼の手をどうしたものかと握る、ちよつと困った表情の小竜姫を目に焼きつけながら、そのまま横島は暴力の海へとなすすべもなく飲み込まれていった。

そして、再びぼろ雑巾と化した忠夫が眼を覚ましたときには、美神と管理人を名乗った小竜姫どころか、心優しき幽霊少女の姿さえあたりには無く、代わりに何故か扉の顔に張られた巨大な札があつた。

「「しくしくしく」」

むせび泣く鬼の声と、開かれた扉。むさぐるしいふんどし姿の首なし石像がこけている光景だけが広がる中、流石の横島もちょっとリアクションに困るのだった。

妙神山・修行場

「だれか～。おキヌちゃん～。美神さん～。小つ竜つ姫いさあああんつ！～！」

誰もいない中で復活し、とりあえず泣きが鬱に変わった鬼達を無視し、扉の隙間から内部へと侵入する。なぜか先ほど出会った角付美女の名前を2倍近く大きな声で叫びながら、辺りを見回す忠夫。

「誰かいませんか～～。特に小つ竜つ姫いさああああんつ！～！」

「あうち！ … 石こりゅ～！ … そうちですね～～～～！」

突然、頭に飛んできた手のひらほどのある石を見つめると、とりあえず飛んできた方向に当たりをつけ走り出す忠夫。

「今行きますよ小竜姫さーん！～」

と、視界に何かを振りかぶって投げようとしている美神が見えた。打ち出された岩はそのまま横島の顔の横を通過していく。

「わざわざこんな所まで来て恥晒すんじゃないわよこの馬鹿犬つ！」

美神の怒声とともに、今度は大人の頭半分ほどの石が頭上から降ってきた。

「お、おうじえ～」

流石に警戒していなかつた真上からの一撃はきつかつたのか、そのままふらふらと崩れ落ちる。

「ちよつとやりすがりました」

「…お、おキヌちゃん？ 何してるので？」

「はい なんですか？」

「なんでもないわっ！！ ええっ！ 全く問題なしよッ…！」

某幽霊少女がほんの少しづつ黒い何かをその背後からむりむりと溢れさせながら半人狼を回収に向かう。

それを見送るなんだか冷や汗だらだらの2人であった。

「ほんっ。えー、気を取り直して私がこの妙神山の管理人「小竜姫」と申します」

「えー…つまり貴方が先生から聞いてる竜神様ってわけね」

「先生？ どなたかの紹介ですか？」

その問いに懐から封筒を取り出し、美神は小竜姫にそれを手渡す。開封し、小竜姫はそれに目を通すと、納得した様子で頷いた。

「唐巣…ああ、の方。ここ最近の修行者の中では、人間にしてはかなり筋の良い方でしたね」

「OKかしら？」

紹介状を封筒に戻すと、それを懐に収め、小竜姫は先頭に立つて歩き出す。

「いいでしょ。」こちらにどう、「あー、死ぬかと思った」ってなんであれでもう立ち直ってるんですかっ！！」

おキヌ引きずられてその辺りにうち捨てられていたはずの忠夫が、何時の間にか頭を振り振り立ち上がり、もうダメージの欠片も無い様子で辺りを見回していた。　流石にこの動く非常識に慣れていないだけあって、反応が新鮮である。

「あー、あの子半分人狼の血が入ってるからよ、あつと」

「へえ、珍しい…じゃなくって、それにして也非常識すぎますっ！それに、純血の人狼なら、昔、幾人か修行に来られましたが、あんな風な方はいませんでしたっ！！」

「え？」

そう言われて考えてみれば、確かにあんだけタコ殴りにしたり、とんでもない衝撃を受けたりしているにもかかわらず、何時の間にか復活している。今はおキヌの笑顔に怯えながら「もうしませんもうしませんもうしません」とHンドレスで土下座タイム中であるが。

違和感に近いしこりを心に覚えながらも、所詮は横島、と美神はその思考を放り投げた。

「…まあ、いいでしょ。どーせただの荷物もちだし」

「…へ？ 人狼の血を引く者が、荷物持ちですか？」

本日2度目の小竜姫の呆れ顔を拝むことになる美神。

「だつて、体力とすばしっこさ『だけ』はあるけど、靈能力が無いんじや…」

「あ。ひどいなー美神さん」

「…人狼が、靈力を持たない？ そんな訳無いじゃないですか」

「「へ？」

「彼らは、そういう姿を取つても『妖怪』なんですよ？ その中でも稀な靈力を使う…というか、靈力を元にして存在しているのですが…彼らにとつて靈力とは己の存在エネルギーそのもの。いうなれば、体を動かす為の力の延長線上にあるものです」

「あー。俺は混血だから『それでもです！』…はい」

人狼に限らず、生まれついての妖怪、神族、魔族等は、程度の違いこそあれど、正に「歩く」「走る」それと同レベルで靈力の使い方を覚える。それが彼らにとつての生存手段であり、周囲に危険の多い環境であれば更にその「使いこなせる」程度が大きくなる。

人狼の一族であつても、その体は完全に肉体化しているわけでなく、ある程度靈的因素に基づいた存在のしかたをしている。だからこそ、靈力不足や自分の意志で獸形態や半獸人形態への変化ということができる訳であり 彼らにとつては成長によって靈力を制御

し、『入れ物』をある程度変化させる事は自然な事であるのだ。

また、基本的に「か弱い」人間の血が人狼の血に負けるといったことも考えにくく、例え半人狼と言えど、どこぞの半吸血鬼同様、その人外としての能力、少なくとも靈波刀、もしかすれば半獸人化を使えるはずであり、どちらかというと『妖怪寄り』な存在の仕方となるはずである。

「へへへ」

「へへへって、あんたのことでしょ」

「いやだつて、半人狼なんて俺以外に知らないし」

小竜姫と美神は、そろつて頭を抱え込む。

「でも、なんとなくその理由分かるような気がします」

「…で？」

「親父、血まで尻にひかれてたんやなあ・・・・・」

「…んなわけあるかい（ありません）」

一人は揃つて否定する物の、彼の故郷で話せば間違いなく全員が納得するであろう筈なのだが。

若干一名は否定するかもしれないとは言え。

「えーと、今回の修行者は美神さんと其処の男性…横島さんですね」

「いいえ？ 私だけよ」

「へ？ 横島さんは修行受けられないんですか？」

「さつとも言つたけど、只の荷物持ちだし」

「…素養はあると思つんですねけどねえ」

不思議そうに横島の顔を覗き込む小竜姫

嫁に来ますか？」

可愛らしいとも言えるような声で、小竜姫は腰の神剣を抜き打ち様に薙ぎ払う。

「うわたあつ！？」

が、それが横島の首の皮一枚を切つて止まるよりも早く、上下から挟みこむように閉じられた掌で抑え込まれた。

「ほらほら、私の剣を白羽取り出来るといふとか」

「無茶な」とせんぐださいつーー！」

「残念ですねえ」

こきなり真剣で切りかかる辺り、この女性も見た田通り浮世離れした所があるようだ。

「とつあえず、修行者の方はこひらへじひつ…」

そして一行は修行場へと小竜姫の誘導に従って歩きだした。

途中で、ふと思いついたように小竜姫は修行を受けにきたところを忘れていた質問を投げかける。

「ところで、今回まではどのような修行をお望みで?」

「一気に短期間でバーンと強くなれるやつ…いままでの性に会わないわ

「クスクスクス…威勢のここと。それでしたら、今日一日で強くして差し上げましょう。そのかわり 強くなつてこいを出るか、それとも、死ぬか。そのどちらかになりますが?」

齧しそうな小竜姫の言葉を、だが美神は眼を逸らさず傲岸不遜に笑つて見せた。

「私は美神令子よー例え地球が吹つ飛んでも、私だけは生き残つて見せるわー!」

「結構です。ではその扉をくぐつて中でお待ちください」

そういう残すと、小竜姫はまるで銭湯のようなドアをくぐつてその先に進んでいく。

「おキヌちやーん！」横島君はびっくり？。「」

「覗かれる心配だけはなさそうねー」「

着替える前に何をしたかは定かではないが、覗かれる以外に忠夫の命が心配では いや、心配する必要性が感じられないのは口うるの行いと言つやつだらうか。

「あ、悪夢のような光景やなあ」

「いつもの」とくやつぱりあつさり復活した忠夫が、幾分しょんぼりしながら扉をくぐると、背後には扉しかなく、辺りにはストーンヘンジのように巨岩が乱立しており、その中心に立つ小竜姫、そしてその前方でなにやら法陣の説明を受けている美神の姿があつた。

「腰するに、」の法円を踏めば・・・「

「はい。貴方の「影法師」つまり、貴方の靈格、靈力、その他様々なもの『のみ』を取り出した貴方の分身が生まれます」

「そして、その「影法師」を鍛えることで、直接靈力そのものを鍛えるって事ね、りょーかい」

美神がその法円を踏むと、一瞬後には美神の2倍ほどの身長を持

つた女性型の、体を黒いボディースーツで覆った複雑な模様の彫りこんである槍を持つ、式神のような「影法師」がその姿を現していた。

「これが私の……」

「ええ。貴方の影法師です。それでは早速修行を開始しましょうか。

剛練武、出ませいつ！」

「ウオオオオオン！…」

小竜姫の一聲に答えて出てきたのは、体中を岩で覆った　といふか、岩でできた体をもつた一つ目の歪な人型をもつ存在であった。

「先ほども言いましたように、負ければ命は無いと思つてください。そのかわり、勝てば新たな力を得ることができるでしょう」

あくまでも事務的な口調でそつ美神に話し掛ける小竜姫。対して美神は

「オール・オア・ナッシングって奴ね。　上等つ！」

その眼に戦意を乗せ、影法師を岩の怪物に向かって突撃させる。

「まずは先制　　いただきつ！」

勢い良く繰り出された槍の穂先は、しかし、その体を構成する岩に防がれる。

「……………」。やつぱ正面からじゅう無

理みたいね」

「おや、もつ氣付きましたか」

「当つたり前でしょ？どうみても、重装甲、大質量つて感じじゃない！そんでこの手のタイプは

「うつ！」

その大質量で構成された繰り出される右拳を掻い潜り、懷に飛び込む影法師。そのまま相手の膝に足の裏を乗せ、跳ねるように飛び上がり

「この辺りが弱点でしょっ！！！」

生々しい音と共に、今度こそその槍の穂先を一つ目の巨人のその眼を貫いた。

「よしつ、楽勝楽勝！」

「わあ、流石美神さん！！」

岩の怪人が崩れ落ちると、その体を構成していた岩が微粒子となり美神の影法師に纏わりつく。

一瞬後には、ボディースーツの上から新たな鎧を身に纏った戦乙女が存在していた。

「へえ。」「やつて力つてこうのをもうえるんですねー」

「ええ。美神さん、これで貴方は今までとは比べ物にならないほど
の靈的防御力を手に入れたことになります」

「ふーん、ま、あのくらいなら何とかなるわね」

「・・・・・次からは見た目も重視してみますか」

何気に次からの修行者に対するレベルが上がったようである。

剛練武の残滓が完全に搔き消えると、小竜姫は次の試練を呼び出す。

「禍刀羅守つ！出ませい！」

しかし、先程のような光が起きる事も無ければ、何かが出現すると言ひ事も無く。

「あれつ？」

」」」.....」」」

「禍刀羅守つ！出ませい！」

ただ、沈黙が広がつた。

.....」

「ち、ちょっと待つて下さいっ！ 祖國守護ーーっ！ 出ませいーー！」

だが、何も起きない。

「あ、あれ？」

「どーしたのよ、小竜姫様？」

「い、いえ私にも何がなんだか・・・」

「じつかりしてよねー。全くこれで竜神だつて」

「美神さんっ！――！」

「つあ――！」

小竜姫の声に、さつきの様に修行場の中心から出てくるものと思つていた美神は、周囲を取り囲む巨岩の影から突如飛び込んできた4本の刃でできた足を持つ昆虫のようなソレにて、背後からの不意打ちを受け、深いダメージを負う。

「へえ、富本武蔵のつもりかねえ。真つ正直なばっかりと思つていたけど、なかなかやるなー」

「横島さんっ！――！」

「いや、だつてさー」

「「だつてさー」ではありますん……」れはつ――」

「命をかけた真剣勝負、何でしょ？」

「分かつていいなら、何故つ！？」

傍から見れば卑怯な行為に、激昂する小竜姫を余所にあくまでも平然とした忠夫。その瞳には、非難する色は無い。

「これでも侍の端くれ。ソレくらいのことは当然です」

「それは、でも美神さんは只の人間なんですか？」

「それに、いつちや悪いけど小竜姫さん。あなた、あの人のことばんつせん知らないっすから」

「当たり前ですっ！－！ 今日会つたばかりなのですよ！」

「あの人は、ただの人間だけど超一流のGSで、汚い手でもなんでもありな所で生きてて、そんでもつて…やられたことは、千倍にして返す人なんすよ」

横島の前で、美神が膨大な靈力を纏いながら立ちあがる。

その表情に不満は無く、むしろ自分に痛撃を与えた相手に対する怒りが燃え上がっているようであった。

「よしへもやつてくれたわね！－！の蠍螂もどきつ！－！の痛みは、高くつくわよつ！－！」

口みあげる笑いを噛み殺しながら、美神の台詞を聞く忠夫。

「さて、小竜姫さん。一つ提案があるんっすけど

「…なんですか？」

良くも悪くも真っ直ぐな性格なのだろう。

納得がいかない！という顔をしながらも、とりあえず聞き返す小竜姫。その後ろでは、やはり結構なハンデとなつたのか、いまだ動きに精彩を欠く美神の影法師を、少しづつ、鉛筆の先を削るようにして更に細かな攻撃を繰り出す禍刀羅守。美神もいまの動きでは、その小さく、速い攻勢に対応しきれず徐々に押され始めている。

「不意打ちするんなら、助太刀もありつすよね？」

「……………
・・・・まあ、いいでしょう。特例として、あくまでも『特例として』、認めます」

かなりの長考の後、搾り出すようにして特例の部分を強調しながら小竜姫は忠夫にそう返した。とはいって、その表情はいまだ不満の色を濃く残してはいたが。

「それでは、貴方の影法師を抜き出します。動かないでください」

そのまま忠夫の額にその右手のひらをあてると、忠夫の体から「ナニカ」が抜け出していく。その抜け出た「ナニカ」は忠夫の背後五メートルほどの辺りで収縮し 狼の頭と、人の体をもち、真っ赤な下地に、白色で「鳥獸戯画」風の様々な動物の絵が書いてある上衣に、金縁の黒い生地で作られた直垂、左右に太刀と脇差を一本ずつ計四本の刀をぶら下げた、キセルをふかす、美神の影法師よりも一回り大きな、異形の歌舞いた侍らしきものを生み出した。

「…なんつすかあれは」

「貴方の影法師」のはずなんですがど

狼頭をもつ忠夫の影法師は、ゆらり、と歩き出すと、そのままその辺のちょうどいい感じの岩に腰掛け、のんびりとキセルをふかし始めたのだった。

「俺、タバコとか吸つた事ないんですけど」

「・・・・・貴方の影法師・・・・のはず・・・・・」

「横島さんっ！ 美神さんがーっ！」

おキヌの悲鳴まじりの鳴き声を聞きながら、一柱と一匹は呆然とそいつを眺めていた。

「やあ」たしか、そう迎えるのだったかな。

まつたく、君はよっぽどじいじが珍しいようだね。そんなに辺りを見回していくには、いつかその足元に開いた奈落に気が付かないまま、いつのまにか動きなくなってしまいそうだ。

たまにはよく田の前を見るんだ。この天文台にだって、それなりに見るべき物はあるのだから。それが例えなんでもないようなものに見えたとしても、本当は大事なものだといふこともある。

たとえば、ほら、今君が座っているその古い椅子。君が座る前は、一体誰が座っていたと思う？

ふむ。そう途方に暮れた顔をすることは無い、たまには回答が与えられても良からう。答えは

「僕」が座っていた、と。そういう事だ。

彼女から伝言を預かっているよ。「その顔が見たかった」だそ�だ。

実に悪趣味、実に彼女らしい。

さて、謎は謎のまま。君には一言だけ

良い夜を。

第十一話

美神の影法師が槍を横薙ぎに振つ。

「ケーフ！」

が、禍刀羅守は嘲笑うように後方に飛んでかわすと、お返しとばかりに着地で抉れた岩を足で蹴飛ばして来た。

慌てて眼前に構えた槍で防ぐ影法師。

が、その一瞬の隙に回り込んだ禍刀羅守は、その防御した腕を僅かに掠めるように鋭い刃を振つてくる。

使い慣れない武器であるせいもあるつが、若干反応が遅れた美神が腕を押さえて顔をしかめ、だが反撃に振られた槍の届く頃には、禍刀羅守は既に離れている。

「こんのがへた蠍螂ーー！ 昆虫なりひじへ単純に来なさいよーー！」

「…グケエ」

「あああっーー！ 今馬鹿にしたわね！ 虫のへせこーー！」

「グケケケケ！」

「…ふつ潰す。絶対にぶつ潰すーー！」

「ああっ！美神さん落ち着いて……」

先ほどから細かく細かく攻撃されている美神は、堪忍袋の緒がとつての昔にブツチ切れていた。

おキヌの声も届かないらしく、握った槍をしじこいて突っかけていく美神の影法師。命懸けの試練の割に子どもの喧嘩のような雰囲気が見え隠れしていた。

其処から少し離れた巨石の列。ド派手な狼侍の姿をした忠夫の影法師が、相変わらずキセルをふかしながらのんびりと寝そべっているそのそばで。

「とりあえずアレを動かせば良いんですね？！」

「つてやつぱり横島さんが動かしてたんじゃないですかっ？！」

「俺は煙草吸いませんからっ！……」

「そういうことじやなくつづけ……」

地味に混乱している忠夫と、今まで無かつた事が起きたせいで状況把握に困っている小竜姫が大変困っていた。

どうにも彼女、生真面目な性格である為か突然的なトラブルには少々弱く、処理しきれていない様である。

ともあれこうして混乱してばかりも居られない、と自分がやや焦っていた事に気付いた小竜姫は、大きく息を吸い込んで、ゆっくり

と吐き出す。

よつやく落ち着いたのか、瞳に冷静さを取り戻した彼女は、横島の影法師を指さし、勤めて常のように声を出した。

「あれは貴方から生まれた影法師なんですから、貴方の考えた通りに動いてくれるはずです」

「勝手に動いてますよつー！」

「だから分からぬといつているんです！ 私だつてこんな影法師初めて見たんですからーーー！」

「結局どいつすりや良いんですかーーー！」

どうやら落ち着いていたのは一瞬だけの様で、あっさりと逆切れた小竜姫はハツ当たり気味に咆哮した。

「こちちはこっちでドタバタと大混乱であつたが、一方美神達の方では決着がつきかけていた。

もはや全身の鎧に細かな鱗が入り、頭部の兜から生えていたであろう角は一本の先端が欠け、もう一本は根元から折れている。ボロボロの、という表現以外に考えられない様相となつた美神の影法師の上に覆い被さるようにして、禍刀羅守はその右前足についている巨大な刃を振り上げた。

『命をかけた真剣勝負』

先ほど忠夫自身が言つた言葉である。そのシビアさは良く分かつ

ているつもりであったし、また、侍に成りたいのならば忘れてはいけないことの一つであるとも聞き育つてきた。

命を狩ると言つ事は、命を獲られるかもしれない状況と表裏一体。であるがゆえに、このG.Sといふ職業を、見習いとは言えやつていくつもありであるならば、もしかすると仲間の誰かが命を落とすかもしれない。

だが、それを本当に理解していたのだろうか。

美神が負ける訳はないと思つていたのか。

まさか、自分の仲間がそんな事になるはずがないと思つていたのか。

そんなはずがないと、思つてしまつたのか。

それでも、忠夫の目の前で、その刃は確實に美神の影法師の喉元に向かつて突き進む。

だが、だが、どうすればいい？

この身は無力。

そしてその心はいまだ未熟。

「 美神さああんつ ! ! ! 」

『未熟者』 叱咤するような囁き声が、自分の中から聞こえた
気がした。

「 ガオウ ! ! ! 」

それまで周辺の状況など空に浮かぶ雲のごとく気にせずに、泰然とキセルをふかしていたはずの忠夫の影法師が、何時の間にか、そつ、誰もが振り下ろされる禍刀羅守の刃にその眼を奪われた瞬間、ふらり、と立ち上がると、生身の人間の侵入を拒んでいた修行場を囲む堅固な結界を、只一鳴きで打ち壊した。

その右手でこれまで寝転んでいた、どう見てもその影法師自身よりも大きな盾を片手で持ち上げ、そのままその声に一瞬固まる美神の影法師と、禍刀羅守の目の前にブン投げる。

そして巨岩が禍刀羅守と美神の影法師を纏めて潰さんと迫り、最早誰にも止められない、そのタイミングで、横島の影法師はその手に持ったキセルを巨岩に投げつけた。

左手で投げたキセルが閃光のような速度で目標に到達し、先端から砕け散りながらも、巨岩を粉々に打ち碎く。

が、圧死の危険からは抜け出したとはい、目の前で砕かれた欠片はショットガンの様に美神の影法師と禍刀羅守をしたたかに打ち据えた。

「うあつ！！」

「グゲエ！！」

両者共に吹き飛ばされ、そのまま動かなくなる。

いや。

「…グ、 ケエ」

ふらつきながらも立ち上がったのは、禍刀羅守が先であった。

「…くうう」

禍刀羅守はふらつきながら起きあがり、忠夫の影法師に一睨みをくれるが、ソレはその場で腕を組んだまま動く様子がない。

ならば

「ケケケエ」

今は目の前の獲物の息の根を止める事が先決、と禍刀羅守は警戒はしながらも、いまだ動く様子のない美神の影法師に近づいていく。

「美神さん！…くそつ！…何がなんだかわからんが、こんな

もん黙つて見てるよ「うじや、侍じやねえよなつ？！」

巨石が碎かれた際にこちらまで転がってきた一抱えは有る石を拾うと、其処に向かつて駆け出す横島。

しかし。

「ぐけえつ！ー！」

「横島さんつー？」

「 がつー！」

飛び上がり、振り下ろした岩」と吹き飛ばされた。

おキヌの悲鳴を聞きながら、「」^{ヒヒヒ}りと地面を転がり、横島の影法師の足元に叩きつけられる。

幸い岩が盾になつてくれたらしく、大きな怪我はしていないうだが、かなりの距離を飛ばされ、打撲と擦り傷だらけになつた身体を起こしながら、横島は上から降つてくる視線に気づいた。

「なんだよつー！」

僅かな、ほんの小さな溜息が頭上から聞こえ、見上げれば其処には呆れた表情の狼の顔。

狼頭の侍は、そのまま黙つて、その腰の脇差の一本を忠夫の前に落とす。それは見る間に縮み、忠夫の手にちょ「うび良い大きさの小

刀へとその姿を変えた。

「…助太刀、感謝！！」

それを立ち上がりざまに引っつかみ、再び美神の影法師に覆いかぶさりその刃を振り落とさんとする禍刀羅守へと駆けだした。

小太刀を抜き放ち、そのままの勢いで一撃を、と速度を上げる。

「なんだこれっ？！　抜けねえじゃねえか！－」

しかしその鞘は、刃を抱え込み放さない。

「ええい！－　それがどうした！－」

一瞬の逡巡。

武器を得たがゆえに、その武器が使えないと言う状況に落ち入り、そして横島が選んだのはそれでも前進する事だった。

ほんの僅かな時間で良い。

その時間さえあれば、彼女ならきっと何とかしてくれる。

信じて駆けつけ様に、まるで棍棒のように振るわれたソレは、邪魔者を排除しようとした振られた禍刀羅守の一撃を確かにその刃を受け止め、一瞬の隙を作り出した。

眼下の影法師ならともかく、まさかただの人間が吹き飛ばされる事も、真つ二つになる事も無く、その両足で地面を踏みしめながら己の刃を受け止めている、と言つ予想もできなかつた事態に、禍刀羅守の思考は完全に止まる。

「美神さん、これっ！」

「…っく！… ありがとおキヌちゃん！ 食らいなさい…！」

そんな分りやす過ぎる隙を、意識を取り戻した美神が見逃すはずも無く。

禍刀羅守が氣付いた時には、胴体はがら空きで、しかも眼下の影法師は幽靈の少女が引つ張つてきたらしい槍を構えている。

慌てて刃を引き戻すも、もう遅い。にやりと笑つた美神は、影法師に攻撃を念じた。

そして、起き上がりざまに突いた美神の影法師の槍は鈍い音を立てて、禍刀羅守の胸に大穴を開けたのだつた。

「…はあああああ。ありがと、横島君、おキヌちゃん」

「…やばかった。死ぬかと思ったわい」

「二人とも大丈夫ですか！？」

「なんと言つ無茶を… 良くその命あつたものですね」

呆れかえる小竜姫の前で、倒れ込んだ横島と美神におキヌが慌てた様子で文字通り飛んでいく。

生身で巨体が争う戦場に飛びこむ少年も、靈体の身で必死に槍を運んだ少女も、あれだけ追い込まれた状況から一瞬の好機を逃さず逆転してみせた女性も。

それぞれ中々無いほどの無茶を見せてくれた事に、小竜姫の口元は僅かに引き攣っていた。

「今度ばかりは、やられたわね。とりあえず命が助かつただけでもめつけもんか、な。一応礼を言つとくわ」

「もう、美神さんつたら

「それって礼じやないっすよ」

性も根も尽き果てた、とばかりに寝転ぶ美神と鞘付きの刀を持った忠夫。その様子を喜びと共に見るおキヌと、呆れた視線を忠夫に向ける小竜姫。

三人揃つて緊張の糸が切れたその時、転がつていた禍刀羅守から光が溢れた。

一つ目の試練を超えた時のように、静かに佇む美神の影法師と、なぜか横島の影法師に向かつて来る禍刀羅守から生まれた新たな力の証。

そして美神の影法師の持つ槍は両端に刃を持つ薙刀へと姿を変え、もう一方に向かつて行つた力は、横島の影法師の手の上で金色のキ

セルへと変化した。

狼頭の侍の口からは、満足げな吐息と共に煙がどっかに飛んでいったのであった。

「 「 「 「 …え？」 「 「 「

しばし、何とも言えない空気が修行場に漂つ。

「ホン、と咳ばらいをし、最初にその空気を取り扱うように動いたのは小竜姫だった。

「…え？。それでは、最後の試練へと行きたいと思います」

「無視つすか、あれ？」

半眼の横島の問いに対し、小竜姫は悟つた様な笑顔でこう告げる。

「何がですか？」

微かに残つた管理人としての意識を碎かれまいとする防衛行動か。

小竜姫は決して視線をそちらに向けず、仮面のような笑顔のままでの発言に、三人は互いに眼で触れない事を決定したのだった。

「…ふう。はいはい。んで？次の相手はどんのかしら？」

暫く後、何処となくすつきりとした表情で立ち上がった美神に、小竜姫は次の、最後の試練の説明を始める。

「最後は、私と戦っていただきます」

「…え？」

笑顔でのたまう小竜姫に、絶句して固まる美神。

そして、「あんたの影法師のが一番効いたわよっー！」という理由でぼこぼこにされていまだノックアウト中の横島と、それをかいがいしくも看護するおキヌ。それを煙でもあるい輪つかを作りながら眺める横島の影法師。

努めて横島の影法師から眼を逸らしながら、小竜姫は三人を見回し、一つ頷いて見せた。

「なかなか面白いチームではありますか。久々に面白い勝負ができそうです」

「…マジで？」

最後の試練が一番厳しいところは、お約束といつ事なのだろ？

「ちよ、ちよとまつた！…」

「えー。なんでしょうかー？」

「つきつきと神剣を素振りしながら修行場の中心へと向かつ小竜姫。よっぽど何かストレス的なものでも溜まっていたのか、テンションが上がりっぱなしの彼女になんとか美神は声をかける。

「そ……作戦タイム……！」

やう叫ぶると、残念そうな小竜姫をその場から追い払った。

「…さて、そこで逃げようとしてる横島君？」

「はいっ！」

何時の間にかこそそと尻尾を丸めて修行場を抜け出そうとしていた横島の背後に回り込んだ美神は、彼の首筋に薙刀となつた影法師の刃を当てた。

冷たい感触に硬直し、小竜姫が追い出された時に感じた嫌な予感がばつちつ当たつた事を悟つて、横島は冷や汗を止めどなく流す。

「分かつてゐるわね？」

「いやー、全く分からなーすよはつはつせー。」

「…あの龍神に天罰喰らひのと、私に今ヒヒド哀れに苦しんでぶつ殺されるの。どっちがいい?」

「俺の未来が無いじゃないですかーー。やだーー。」

「さあ、さくさく決めなさいねー。」

「あうあうあうあう」

音を立てて構えなおされた影法師の薙刀と、音を立てて拳を光らせる美神に挟まれ、もう傷はないが、なぜか涙が止まらない忠夫であつた。

「それでは、準備は「こうなつたらもつヤケじやああああーー。」
「…なんで横島さんがそんなに気合はいつてるんですか?」

修行場の扉を開けて入ってきた小竜姫は、異様に気合の入つてい
る忠夫を見ていぶかしげな顔をする。

悲壯なまでの表情で決意を固め、しかし同時にやる気も感じられる横島を、美神は慌てて叩き倒して沈黙させた。

「いいえ～～何でもありますよ？！」

「ハハハ…。そ、そうです。何でも無いです」

じとーっとした半眼であまりにも怪しい一人を睨みつけるが、どうせ何か妙なことでも考えついたんだろう、とほつたらかす小竜姫。

「それでは、これは私からのサービスです。面白いものを魅せていただきましたから、ね」

そういうてチラリ、と横島に田線をやると、美神の影法師に向かつて手を伸ばす。その手が光ると、影法師にあつた大小の傷は全て消え失せていた。

「最後の試練、始めます」

「…OKよ」

その姿を神々しい、戦装束を纏い、光り輝く龍神としての戦闘形態に変化させ、修行場の真中へと歩を進める小竜姫。美神はそれに応じて影法師を小竜姫の正面へ配置につかせる。

「それでは小竜姫、参ります」

小竜姫は神剣を構え、その一撃目を繰り出した。

いいわね、あんたの役目は、なんとしても小竜姫に隙を作り出すことよ！」

手段は選ばないわ。なんとかしてみなさい。失敗したら私が死んでもあんたを殺すわ。でも、役に立てば、…「ほーびよ。

「（）ほーびかあ、やる気が出て来たあああつ…！」

空を見上げ、未だ見ぬ優美の内容を考え悶える横島。

「高級なお肉か？！　いやいや、もしかしたら嫁に来るとか…！」

その口はだらしなく開かれ、肉の味でも想像したか、それともよいよ成功するかもしれない嫁取りの事でも思つたか、不気味な笑い声がこぼれていた。

「…ぐふふふふふふふふふふふふふ…！」

が、彼の背後では今まさに小竜姫と美神の影法師が互いに武器を振つて火花を散らす鉄火場が形成されていた。

「ヨコシマアツツツツ…！」

「はいはいはい…！」

美神の怒声で妄想の羽を閉じた横島は、殺意の籠りまくつた美神の視線を受けてようやく現状を認識することに成功する。

焦つた彼は、とりあえず走つて戦場へと近づくのだった。

ちなみに忠夫の影法師は、四本の刀を枕元に置くと、岩の上で仰向けになつて鼻提灯を製作中である。

「ふふふ、ふふふ、うつあらう」「戻を戻」^{アラシ}、「だか」^{ダカ}

L

小竜姫の繰り出す斬撃をひたすら防ぎながら、美神がこちらを殺気の籠つた視線で見ている。なんと言つか「早くしないとヤルぞ?」と言つ意思が溢れすぎて正直怖い。

その視線をうけ、おもわず尻尾を丸めながらひたすら考える横島。しかし、どうしても殺氣が気になつて考えが纏まらない。

「どうしました？防戦一方では勝ち目はありませんよ」

防御に徹すればしばらくな持ちここたえられる！ なにやつて
んのよあのバカは！ さつさとちよつとでいいから隙を作りなさいつ
ての！ こんなときくらい少しは役に立ちなさいよ！

先ほどのお礼は一体なんだつたのか。

「...」
「...」
「...」
「...」
「...」

焦りが思考を上滑りさせる。

早くしなければ殺される。美神の事だ、言つた事は必ず実行するだろうから、もし失敗して命を落としたら、間違いなく末代まで祟られる、と横島は思つた。

こういつたときに慌てれば慌てるほど余計にいいアイデアなど浮かばないものだが、恐怖に脅かされた彼はよりもつて、

「…小さい隆起で小竜姫、なんつて」

自分で地獄行きの片道切符を購入した。

瞬間、修行場の空気が死んだ。

何かが纏めて数十本ぶち切れる音がする。

彼女の顔は見えないが、その目の前に立つてゐる美神の顔が引き

七二

た。そして、小竜姫から溢れ出たオーラが、怒り狂う龍となつて咆哮し

地獄の底から響くような低いトーンの声が聞こえる。

「母上、俺、死ぬかもしけん」

後悔とは、後で悔やむから後悔だ。いまさら後の祭りである。

ゆつくりと振り向く小竜姫。

その瞳は、すっかり怒りで染まりきついている。

あまりの殺氣の密度に当てられたか、何か他の理由でもあつたか
のか、或いは最初から寝て等居なかつたのか。

完全に寝に入っていた筈の影法師は飛び起き、とてつもなく怒っている小竜姫を目にすると、横島に向かつて顔の前で数回ぱたぱたと手を振った。

横島には分る、あれは「無理」と言つてゐる。

三人と影法師一体は、迷わずダッシュで逃げ出した。

しかし怒り狂つた小竜姫は、彼らを逃がすつもりなど無いのか、突如として身体から膨大な力と閃光を吐きだした。

それが収まつた時に現れたのは、巨体を持つ、一匹の神々しくも荒々しい龍だつた。

龍の咆哮で修行場が震える。

そして振り向いて確認した三人も震えあがつた。

「このバカッ！！ 隙を作ればいいつて言つたじやない！！ なんでいきなり逆鱗に触れてんのよつ！！」

「だつてだつて、しょうがないじやないつすかああああああつ！！！」

「いいから早く逃げましようよつ！！！」

出口があつたであろう場所に向かつて駆け出す三人。

と、横島の影法師が先んじ、銭湯の脱衣所の様な扉に向かつてその刀を振う。

ガラス片と木屑を撒き散らし碎け散る扉を潜つて逃げ出した美神達を追いかけ、龍もまたその身体を修行空間から妙神山の敷地内へと現わさせていく。

出口に向かつて逃げていく美神達。

何時の間にか横島の影法師が消えていたが、三人にはもうそんな

事を気にしている余裕は無い。

なんとか出入り口の扉までたどり着き、美神の影法師がこじ開けた隙間を縫つよにして転がり出た三人の後を、美神の影法師が扉を飛びだしざまに蹴つて閉めた。

が、龍の怒りは收まる所を知らないよつで、扉の向いではまだ荒れ狂う咆哮と破壊音が断続的に響いている。

「「お前らーーーーー 一体何をやつたのだーーーーー」

扉に張り付いた門番たる鬼達の怒声が息を切らす三人の背中に降り注ぐ。

溜息一つ、疲れた表情で立ち上がった美神。

「だいたいこいつのせいよ」

そう言つて埃まみれの彼女は、背後の横島を指でさした。

「…小竜姫さん怒りしちゃつた。てへへる」

「死ねつーーーーー」

サラウンドで響いた悲鳴のよつな怒声に、美神とおキヌは思わず耳を押された。

結局暴れるだけ暴れた小竜姫は、美神の「とりあえず、こういうときは生贊よねー」の一言で山門の中に蹴り入れられた忠夫を12時間に及ぶ追いかけっこの中、消し炭の上ミニンチ寸前といつすぶらつたーなするという光景を作り上げたところで正気に戻り、「ああっ！！だれがこんな事を！」と荒れ果てた修行場を見ておっしゃった。

「あんたよ、あんた」

「そんなん……」このこんな不祥事が神界に知れたら……

「大丈夫よー。私がお金出したげる。一週間もあれば元通りに成るわよ」

「ほ、ほんとうですかっ！…ありがとうござりますー…」

「いいのよつー…そのかわり最後のパワーちょうどいねつー…」

最後は金で解決した美神は「力が正義じゃないわーお金が正義よつー！」と力強く言い放ったとさ。

「いたぞ、通報のあつた犬だ！」

街中に、巨大な犬（狼であるが）が首輪もつけずに、しかも片方はなんだかおどろおどろしい雰囲気を放つ風呂敷を首に巻いたのが一匹うろついている。

「ワフ（つょーかい）」

「わおう（とりあえず）」のまま忠夫のところまでいくでござるよ（

「ウオーン（あの青い服着た奴等、てっぽうを持つているとば、中々めんどくさいな）」

「…わん（ふう、やつと撒いたよつでー）」ぞるな）」

保健所といつもの一つの役割として、野犬の捕獲があつたりするわけで。

「わうー（今度は何で）」
「わうー（わかるんが逃げた方がよさそうだ……）」

「逃げたぞー……」

「捕まえろーー！ 猟友会を呼べーつー」

でつかい犬と、市民の安全を守るという使命感に燃えた職員達の、昼間の大追跡劇が始まるのであつた。

「…わいつきまで『けーかん』とかいつのと大立ち回りやつてたかと思えば」

「…」

「ねえ、シロ。あんたら人狼つてや」

「何も言ひなで）」
「武士の情けつ」

「…全体制に馬鹿なの？ 死ぬの？ あと私は武士じゃないわよこのお馬鹿」

「へへへへへへへへ。父上、犬飼殿。兄上のところまで案内したらその後は

用済みで「さるよなあ……？」

「……はああああああ

いやいや、あんまり頻繁に会えるものだから、ちょっと心配になつただけさ。

それなら、せめてゆっくりとしていくところ。

「やあ

君つて人は、暇なのかね？

さて、ここに来るのも何度目かな？今日はこんな話があるんだよ。

ある一人の人間の中には、もう一人の人間が住んでいる。そしてその中には、またもう一人。そして合わせ鏡のように一人の人間と、一つ個体の中には、無限の人間を内包する。それは、彼の中には、無限の世界があるということだよ。

世界は主観と客観とで作られる。

ならば、だれもその中にいない人間というのは、果たして存在しうるのか。

また、遊びにきてくれたまえ。いつでも歓迎するよ。

それではまた、

良い夢を。

第十一話

犬飼忠夫は考える。

侍とは何か。

仲間とは何か。

負けるとは？

ドクター・カオスに詰めの甘さを指摘され、美神の危機に大した役にも立てず、結局自分はそこまでか？

そんな訳があるものかっ！

「ちわーっす」

今日も今日とてG.S美神除霊事務所に青年の声が響き渡る。

空元氣も元氣の内、と言つではないか。何かに悩んでいよつとも、

そいつらへんを見せるといつのは彼の男としてのプライドが許さない。

だからじるの空元氣であり、そして彼の矜持もある。なりば、結構同じうじうの悩んでる暇などない。やることやって、それから何を悩んで何が変わるか、とりあえずそれは後回し。

「あら、横島君だったの？」

「こきなりひどこすよ、美神さん」

だから。

「ん~いま、ちょっと急いでてね。早いとこ届いてくれるといいんだけだ」

「今日のお仕事に関する」とつすか？」

まずは、今を頑張り。

「日本にパイパーっていつ『悪魔』らしきものによる被害があつてね、それで、ソイツに対する切り札の到着を待つてるとこなんだつたのよ」

「パイパー？」

「や。なかなか凶悪な奴でね、能力としては相手を子供にするつて言つ只それだけ、なんだけど

「

悪魔パイパー。

ヨーロッパにて散々その特殊な能力を振るいまくり、時の僧侶によつてその力の源である『金の針』を奪われるまで莫大な被害を撒き散らした世界規模での賞金首である。「ハーメルンの笛吹き」とも呼ばれる彼の力は、本当に相手を子供にするという以外には、それなりの魔族としての能力しかない。

それでも並みのGSにとつては十分に強敵となるだろうが。

『金の針』がその最も大きな弱点である、と言ひ事。

そして、その能力の半径がとんでもなく広い事。

特筆事項としてはこれらが挙げられる。前者は、その弱点が力の源であることもあり、僧侶に『針』を奪われたことでヨーロッパから駆逐された訳だが、後者はかなり文明社会にとつて危険な能力となる。その範囲が一つの都市を軽く覆つてしまえるほどに広いのだ。

もし、その能力が大都市のど真ん中で発揮されれば？

パイパーが猛威を振るつていた時代とは人口密度も、そして技術力とそれが制御を離れた場合の被害も比べ物にならない。はつきりいつて、そうなつてしまえば只一体で一国どころか、オカルトにあまり耐性のない国ならばまとめて数ヶ国ぐらいは無くなつてもおかしくない。

だからこそその高額な賞金であり、国連が世界中のゴーストスナーに抹殺を呼びかける程の危険性を持つているのだ。

「…なんだがセツ「イ能力ですね~」

「甘く見ちゃダメよ。確かに子供にする、って言つといひだけなら大した事はないように見えるかもしだれだけど、実際は厄介な事この上ないわ。効果範囲にいる人間の力と記憶を纏めて奪っちゃうんだからね」

社会は歯車と現されることもある。別に歯車を卑下している訳ではない。

まるで複雑で超高度な技術の集大成である機械の塊のように、多くの人々が組み合わさって、それぞれ動くことで社会と言つ物が動いていく。その様子が、『歯車』と言つ表現につながる訳である。

では、その歯車のうちいくつかが抜け落ちてしまえば、その機械はどうなるだろうか。

多少の不備ならばこの機械は自力で補修できるであら。

しかし、あくまでも「多少」である。幾つかの都市に存在する人間が、ごつそりと子供になってしまい、つまり機械の中から、幾つかのブロックがごつそりと抜け落ちてしまうと言う事態になれば、さすがの高度な社会も、いや、高度であるからこそ機能を保つことは不可能だ。

そうなってしまった場合、復旧までにどれほどの時間と予算が費やされる事か。

「…結構怖い悪魔なんですね」

「怖くない悪魔なんて聞いた事ないわよ、おキヌちゃん」

とはいって、その凶悪な悪魔もここ数百年ほどは力を蓄えるつもりであったか、大人しくしていた訳だが。

「つまり、切り札って言つのは」

「やつ、『金の針』、よ」

「……美神さん?」

「なによ?」

なんとななく汗をたらしながら、忠夫は美神に質問を続ける。それを横田でみながら、除霊道具の用意に余念がない美神。

「パイパーつてのにとつて、金の針は絶対に取り戻さなければモンなわけですよね」

「当たり前じゃない」

「……んで、今回の依頼はどうから?」

「解体業者よ。こきなり「うちの社員が変なのに子供にされちまつた! どうにかしてくれ!」って高額の依頼が来てね」

「変なの?」

「ええ。ピヒロのかつこしてラッパを持った、変な笑い声の悪魔だ

つたつて…」

美神の手が止まつた。

横島の言わんとしている事に気がついたのか、表情が焦りと驚愕の色に一気に染まる。

「そいつを見て無事だつたんですねか?」 「つてまさか!…」

「ああひひああひひああひひああひひああひひああひひああ

同時に放たれた美神と横島の声に含まれた焦燥を嘲笑うように、その音は事務所の中に届いた。

何処からともなく妙に明るい音楽が聞こえる。TVか、とも思つたろう その音楽に、強力な魔力が籠つていなければ。

「美神さんつ…」

衝動的にその音楽が聞こえてくる方、窓の方へ、美神たちを庇つよう にポケットから石を取り出しながら飛び出す忠夫。彼が窓を開け放つと、其処には果たして。

「あ、ひひひ、ひひひ、ひひひ、ひひひ、ひひひ、ひひひ、

悪趣味なピロロの格好をし、ラッパを吹き鳴らす悪魔。パイパーの姿があった。

「へいっ！！」

「うおっ！！」

慌てて手に持つ石を投げよと振りかぶったが既に遅く、忠夫はそのパイパーの『子供にしてしまつ』能力をもろに喰らってしまう。

「ちいっ！！」

悪魔パイパーは最も大きな靈力を持った、おそらくGUNであるう女性が無事であることを確認すると、そのまま中に飛び上がり、東京の空へと消えてしまった。

「しまつたっ！！ この依頼自体が罠だったのねっ！」

「美神さん！！ 横島さんが、横島さんがっ！」

つまり、パイパーが目撃されたこと自体が罠であり、パイパーとしてはその姿と能力を見せ付けてしまいさえすれば良かつたのであ

る。

あとは自分を悪魔パイパーだと判断した人間達が、放つておいても勝手に自分に対しても最も有効な武器『金の針』を取り寄せる。

その受け渡しの現場を抑えるも良し。若しくは片方を先んじて潰しておき、後から来た獲物を狩るも良し。後者には、自分の存在がばれると言つリスクがあるものの、どちらにせよ『金の針』奪還という目的は果たせるはずであつた、が。

「あの妙な小僧！！もう少しじだつたって言つのに、とぼけた顔して勘の良い！！」

忠夫が横槍を入れたおかげで、予定が大幅に狂ってしまった、と言つ訳である。

「ちつ！ やつてくれるじゃないあの禿げ！ おキヌちゃん、すぐGJS協会に連絡を取つて！ こっちから『針』を受け取りに行くわよつ！」

「わんつ！！」

窓の外を睨み付ける美神の耳に、甲高い子犬の鳴き声が届いた。

それは、彼女の背後から聞こえてくる訳で、そしてそこには先程バイパーの能力を食らつた横島が、おキヌに抱えられている筈で。

恐る恐る振り向いた彼女の眼に、呆然と小さな子供を抱えているおキヌが見えた。

「「」の子、横島さん…ですよね」

「おねーちゃんたち、誰で「」るのか？ それに「」は「」るのか
か？」

パイパーの攻撃を喰らつた忠夫が起き上がり、其処には、狼の耳と尻尾を持つた年の頃十歳を超えないであろう年頃の和装の子供が、腰に挿した全長50センチ程の木刀をその先っぽをぶるぶると震わせ、涙をこらえながら美神に向いている姿があった。

「それじゃ、おねーさんたちは敵ではないでござるな？」

「「」る…ええ、そう思つてくれてもいいわよ」

こまだにソファーの陰から警戒心剥き出しでこちらを眺める忠夫に対し、あまりの口調の時代錯誤っぷりから、違和感バリバリの美神。

「ええと、どうしましょひ美神さん？」

「…足手まといを連れて行くわけにも行かないわね。先生のところ

で預かってもらいましょう」

「あしでまといとは無礼なー」これでも父、犬飼ボチと母、沙耶の息子一れつきとした侍でござるつー

「でも子どもでしょ？」

会話の流れは分からずとも、なんだか自分が役立たずといわれたつぽいことは分かる。思わずソファーの陰から飛び出し、反発し反論する横島（小）であつたが、あつさりと子供であることを指摘され、悔しさに唸る。

再び木刀を構えて唸り声を上げる横島にふと悪戯心を刺激されたのか、美神は子どもの構える木刀を片手で握りしめた。

驚き木刀を取り返そうとするも、いかに半人狼とは言え大人と子供。

しかも相手は女性と言えど、年がら年中荒事をこなし、神通棍を振り回している女傑である。

しばらくうんうんと唸りながら引っ張っていたが、ぴくりとも動かなかつた木刀が、美神が急に手を離したことで勢いよく後方にすっぽ抜け、結果として横島は後頭部をソファーに柔らかく受け止められる事になつた。

「…ううううう～～～

「み、美神さん

「な、なに？」

「 」

「なんだか、泣きそうな目でこっちを見てるんですけど~~~~~!」

「ちょ、ちょっとやりすぎたかしら。でも、本当に危険なんだから、がきんちょを連れて行くわけにもいかないでしょー。」

「ヒック」

「お」

そのまま窓から飛び出していく横島。

「ああああつ！！ 逃げたあつ！！」

別に逃げた訳ではない。本人曰く、「せんじゅつてきてつたいで
ござる！」である。

慌てて窓から身を乗り出して探してみたものの、元が山を駆けまわつて育つ人狼の里の子である。「あつ」という間にその視界から消えている。

「…参ったわね。こつちはこつちでパイパーに狙われてるって言う

のに

「どうしましょ、美神さん。私が横島さん探ししましょか?」

「…いえ、一緒にこのままGJ協会に行って、『金の針』を受け取る方が安全ね。さつさと切り札持つて、パイパー倒さないと被害が広がっちゃう可能性が高いわ」

「そんなんー横島さんはどうするんですか?」

「…あれでも半分人狼なんだし、そうそう捕まつたりはしないですよ。あの逃げ足の速さといい、一いちがせつと決着つければ、問題無いハズよ」

「でも…」

事務所のドアに向かつて歩き出した美神の背を追いかけながら、おキヌはちらちらと窓を振り返る。

見なくとも心配そうな表情をしていると分かる彼女の聲音に、美神は振り向いて叱咤する。

「いいから早く行くの! これ以上グダグダしてたら、それだけあの子の危険も増えるわよ!」

どこにいったか、そしてその捜索にいくら時間を取られるか分からぬ以上、とりあえず所員である忠夫のことを後回しにして、元凶を一気に叩き潰す作戦に出た美神たち。それでも一人の足取りには、振り切るには少々ならず後ろ髪引かれる気持ちが見え隠れして

いた。

「…つまくこつたで、」
『れぞ奥義』逃げたふり』… 役立た
ずじやなことを母上に誓つて証明して見せるで、』
『…

事務所を出て急ぎ足で移動し始めた美神とおキヌの後ろ五百メー
トル程の場所に、頭に木の枝を括り付け、何時ぞやの妹分にそつく
りの格好で美神たちの後をつける狼耳と尻尾の生えた子供の姿があ
つたとか。

コンクリートで覆われた街中では、たが立つことだらけ。

「…つたくあのハゲピヒロ…離れたところからからからからから
からからから…いいかげんつゝとーしこのよー…」

「でも、横島さんの方に行つてな」のは分つたんですね…」

「「」の結界石、買つたら一体いくさると思つてんの… あの子の
時給じや十年たつても払いきれないのよー。」

「無料で手に入れましたよね…？」

あの後、車に高価な対呪歌専用の結界を封じ込めたといつ、オカ

ルト商品取り扱い「厄珍堂」の今月の田玉商品というひつじょに怪しげな試供品を使い、幾度となくあつたパイパーの能力を使った嫌がらせに近い攻撃を凌ぎつつ、最初にパイパーが発見された場所である「バブルランド遊園地」にたどり着いていた。

ちなみに、以外にも結界石 자체の効果は高かつた。

それを売りつけた厄珍堂の店主は、「たまたま」パイパーのうわさを「何処から」か聞きつけ、「たまたま」美神に商品を持つていつたらしい。

美神は美神で、「そんな怪しげな商品、テストもしないんでしょ? 今ならレポートとGS美神のお墨付きをあげるわよ。役に立つたらね」と只同然の値で強奪していつたのだからなんともはや。

ともあれ、この遊園地、バブルの崩壊とともにその建設計画も正に泡と消え、そのまま何年も放置されていたと言つ曰く付きの物件であるが、今回のパイパーが目撃された地点もここである。

強固な結界の張られたGS協会にて『金の針』を受け取り、それを使った『ダウジング』でも確かめてみたが、やはり反応はここであつたことから美神たちはその根城を断定。

そのまま突入することとなつた。ちなみに神父達は別件で除霊にでかけているらしく、連絡が取れなかつた。

「ちくしょうっ! あの小娘ども、とうとうここまできやがつたか!! だが、なんとしてもアレを取り返して、またあの頃のようにな暴れまわつてやるんだ!」

バブルランド遊園地の地下深く。そう亥くパイパーの周辺には大小様々の、それまでの被害者の顔の浮かぶ風船が浮かんでいた。

その頃。

「…なんでござるかこの惨状は」

亥く忠夫の前には、おぞらく美神たちに対するパイパーの攻撃によるものであるつかレーターや、転倒した自動車、砕け散った街灯、折れ曲がった看板などが道に沿つてずっと続いていた。

流石に途中で車に乗り換え、時速200km近い速度で一般道を道交法を無視しそつ飛ばす美神たちの車には追いつけなかつたのだ。
「これを追いかければ、簡単に目的地にいけるだござるなつて。

「…おや？」

何かの声を聞きつけ、近くに横転しているトラックの荷台に近づく。

「…むーん。何かがいるよつて」「やるが、わからん。」「うごうとき
は、父上の耳が羨ましいで」「やれんなあ」

そのまま、立ち去ることもできず、「仕方なく救助活動をはじめ
る忠夫。

「困つてこらものを助けるのが、武士の役目と母上も呴ついていた
『じやるからなつ！…えいっ』

どうみても歪んで簡単には開きそうに無いその扉を、拾った棒で
じじ開けてみれば、中には無数の輝く光点が。

おもわず仰け反る忠夫に、中身「達」は思わずとこつた様子で反
応した。

「『いやつ…』…」×無数

飛びつき、懐き、じゅれまぐるのであった。

「！」じりり、拙者は狼なんだぞつ…。「うひやひやひやひや！
くすつぐつたつて！…やめてー…」

山中に、半人狼の子供の笑い声が木靈した。

「よし、頼んだわよおキヌちゃん」

「はいっ！頑張ります！」

遊園地内部、その中心にある、おそらく完成の際は出し物が催される予定であったのだろう広場で、美神から何事かを耳打ちされたおキヌは美神からペンチと細長い針のようなものを受け取ると空に舞い上がった。

「パイパーちゃんあああん！」
叫び声とともに、口の針折りがい
ますよおおおおつーー！」

「マジハハハハシ！ ！」

とりあえずパイパーを召還？した。

「お出ましのよつね、悪魔パイパー！」

「お前らなああああつ！！！人がせつかく色々と下準備して待つて
んのに、どうしてそういうことをだなああああつ！！！」

その人質をとるようなあまりと言えばあまりの行為に、おもわず

隠れ家と言つた秘密基地と言つた、とりあえず本体のこじるといひから飛び出してきたパイパー。

「ハン、ばつかじやない？だれがそんな//H//工の相手の罠に自分から引っかかりに行くかつてーの」

「だからって何でいきなりそういう事をするかなあつ！ あればお前らにとつても切り札だらうがあつ！」「

「別に切り札を使わなきや勝てなーって訳でもなさうだしねえ。あんた、悪魔にしてはセッゴイし」

「…グツ！？」

パイパーが美神たちにやつてきたことと言えば、不意打ち、反撃の仕様の無い遠距離攻撃、トラップ、そして多少の、かなりの高出力とはいえ、それこそ呪歌専用のはずの結界でも防げるような魔力を使った砲撃。

「あんた…エネルギー尽き掛けてるでしょ？ そうでなきや、あんなしみつたれた事ばつかりやんないわよねえ？」

「当つたり前だ！ そうでなきやお前らやあの結界なんぞあつたり纏めて はつ！…」

「語るに落ちるとほーの事ね。まあ、もつと諦めて 地獄に帰りなさいつ！…」

あつさりと自分の内情をばらしてしまい、振り下ろされた美神の神通棍を慌ててかわすパイパー。

「…………くそつー」のパイパーを舐めるんじゃねえつー。

そう叫んだパイパーは、口笛を高く響かせる。

— ੨ —

その音に呼ばれてくる大量の鼠たち。

「ちつ！ 厄介な物呼んでくれるじゃない！」

現れた鼠たちそれは普通の鼠である。しかし、その膨大な数と、パイパーによって制御された連携はまさにパイパー自体よりも厄介な壁となつて、パイパーに決定的な一撃を決めることができな

רְאֵבָנִים וְעַמּוֹת

まさに波のように襲い掛かる鼠たち。

『ウニタリーセンターズ』

美神も必死に神通棍で応戦するも、その圧倒的な数の前にはどうしても劣勢を感じてしまう。

そもそもが靈体でも無く、普通のネズミが操られているだけな為に、どうしても対靈、対惡魔に有効な手段が通じにくい。

油断すればあつせいとネズミの包囲に押しつぶされ、生きたまま齧りつくされるだろ？。

そんな想像をしてしまった美神の額に、冷や汗が一つ流れた。

「はーっはっはっはあ… そのまま鼠じもの餌にしてやるわっ！」

「ジラーダンじゃないわよ！ こんな奴らにくれてやるもんなんて一つも無いわッ！」

「あやーっ！ あやーっ！ ネズミーーっ！ いやーっ！」

ネズミから必死に逃げようにも、美神の傍から離れるわけにもいかず悲鳴を上げ続けるおキヌを背中に庇う。

実際に楽しげに哄笑を上げるバイパーの姿に怒りを露わにした美神は、こうなつたら、と切り札の一つであるイヤリングの精靈石に手を伸ばした。

が、それが効果を發揮する事は無かった。

ネズミ達が、その動きを一斉に止め、突然遊園地の向こうに見える山を向いたのだ。

訝しげにバイパーを見上げるも、彼自身も何がどうなったのかを把握しきれておらず、ひたすらに声を張り上げ美神を襲わせようとしている。

しかし、ネズミ達は動かず、じつと一点をその無数の眼で睨んで

い
る。

「…………ああああああ」

最初に気付いたのは、空高く浮かんでいるバイパーでも無ければ、美神の近くでふよふよと浮かびながらネズミの群れに囲まれた状況に耐えきれなくなつて氣絶しているおキヌでも無い。

一人だけ、地面に足を付けていた美神が気付いた。

「……地震？」

い。眩きが漏れたものの、それだけではネズミ達の反応が良く分らな

そして、周囲とバイパーを警戒しながらもネズミ達の睨む方向を見た美神の耳に、その音が届いた。

揺れは大きくなつてゐる。

声も大きくなっている。

そして、一寸の距離まで近づいてきて、美神に正体を悟らせた。

一七九

わんわんわんわんわんわん！！

きしゃーー！

つまつー・つまつー！

かー。

ぱおーん。

山の茂みを突き破り、小さな横島を先頭に、暴走とも言ふるよつな勢いで動物達が突撃してきた。

「たーすーけーてーーつーーーー！」

大音声とともにやつてくるのは、一体何処から集まつたのやら、と思つほどの獣たちの群。犬やら猫やらに始まり、爬虫類、鳥類、哺乳類。じいじら辺りの山の生き物全部ではないかと思つほどの動物たち。

ネズミ達の行動は早かつた。

素早く散らばり、物陰に隠れ、その正面から逃げようとする。

しかし、そのはしつこさを持つてしても、既に最高速まで加速を終えていた動物達から逃げるには遅すぎた。

そして、数えきれない動物が、猛獸が、猛禽類が、彼らを捕食し、踏み散らし、隠れた物陰ごと粉碎しながら通り過ぎていく。

「な、なんだつてんだ…？」

「隙ありつー！」

「ぐぎやあつ？！」

呆然と自分の眷属が蹂躪されていく光景を見ていたバイパーだが、この場で最も眼を離して行けない人物から意識を逸らしたのが間違いだった。

美神が打ち出した靈体ボウガンの矢が、その身体に突き刺される。

思わずバランスを崩し、重力に引かれ落下する。

そして、地面に叩き付けられた、彼の視界に、運の悪い事に今まさに彼を踏み碎かんとするように突進中の動物達の足が入り込んだ。

「ま、待て待て嘘だろおおおおつ！」

バイパーの眷属達は、あわれその質量差だけでも数倍はあるのではないか、と思われるスタンピードの前に、傍く蹴散らされたのであつた。

「こわかつたで！」やるー。怖かつたで！」やるよつわーーー！」

「よしよし、もう大丈夫だよー」

「しつかしまあ、異様な光景だつたわねー…」

狂乱の大暴走が終わつた後、いまだにぐずりつづける忠夫から美神たちが話を聞いたところによると、横転したバスから猫達を助け出した後、どこからともなく野犬の群が現れて、一緒になつて懷いてきたので、しばらく遊んでやつたのだが。

ふと氣付くと、道路の横の森から覗く、異様に多くの視線。

その視線に怯えて、後ずさつてしまえば、後から後から沸いてくる獣たち。

思わず逃げ出した物の、追いかけっこでもして遊ぼうとしたのか、或いはただ単に本能で逃げる者を追いかけただけか。

そしてひたすら一直線に走り続け、気付けば、ここに着いていて、おキヌちゃんに抱きついていた、と言つ訳である。ちなみに彼らは、そのまま何処かへ走り去つてしまつた。

「ひつぐ、ひつぐ」

「ほーら、もう泣かないの」

「まつたく、あんた男の子でしょ。もひょひょと頑張んなさい」

「ぐしづ。うん。ありがとう、えつと…」

「あ、そつか。まだ記憶とか奪われたままなんだ・・・。そつちあキヌちゃん。私が美神よ」

「ありがとうー！美神おねーさんー！おキヌおねーちゃんーー！」

子供の純粋な笑顔で言われたそのお礼に、柄にもなく照れたよう
にそっぽを向く美神と、笑顔でど「ういたしまして」と返事をする
キヌ。このまま大団円、と行く筈だつた。

が。

「ふざけるなあああつー！」

「ナセバハ」

一
な
に
つ
！
？

おねーちゃん達、あふない!!

その真下から地面を突き破つて現れたのは、もはやその力をほぼ全て使いきり、分身を作り出すことさえできなくなつたパイパーの本体。

そしてその手に拘まれたのは、またもや一人を庇つてその前に飛び出した忠夫であつた。

「「横島くん（さん）！…」」

「おおつと、動くんじゃねえぞっ？確かにもう俺は終わりだらうよ、もはやここから逃げ切るだけの力もねえ…だがなあ」

巨大なネズミの短い前足が、美神に向かつて突き出される。

そして、放たれるのは、殺意の込められた黒い光。

「きやつ…！」

「美神さん…」

「美神おねーさん…！」

横島の腕を掴んでぶら下げながら、美神に魔力砲を放つパイパー。からうじて神通棍を犠牲に防いだが、足に傷を負い、神通棍も折れ、もはや防ぐすべも避けるすべもない美神に向かつて

「貴様もツー！道連れだあつ…！」

放たれようとする魔力砲。しかし

「させらかあああつ…！」

それを再び邪魔したのは、忠夫の腰にあつた木刀の中から出てきた輝く刀身。それはパイパーの右目に突き刺さり、その手に溜められていた禍々しい力が霧散した。

「し、仕込み刀って…子供になんて物騒なもの…」

「このクソガキッ……最後の最後までええええつ……！」

もはや魔力砲を放つ力さえなくしたパイパーは、最後の意地とばかりに巨大な口を開く。

右目からは止めどなく血が流れ、残っていた魔力も先程の一撃に籠めていた分でほぼ終わり。

ならば、せめてこの小僧だけでも矛の狂いを忠夫に定める

「鼠がつーー！ 牙で狼に敵うかあああああつーー！」

しかし横島は目に突き刺した仕込み刀をその臂力で引き抜くと、
その勢いのままに、自分の腕を掴んでいる方のパイパーの手首を斬
りつける。

手首が飛び、バイパーの拘束から抜けだした横島を、突然の片目の消失で距離感の掴めなかつた巨大な鼠は、その口の中に獲物の感触を感じる事が出来なかつた。

思わず舌を出したりした罵声が、しかしその口を通る事は無い。

「カハツ」

地面に落ちた横島が、そのまま今度は地面を蹴って飛びあがり、
巨大なネズミの喉笛を噛みちぎったのだ。

「へつ。不味つ、くつさーつ…」

返り血に口元を染め、噛み千切つた物を吐き出し、しかし倒れ行く巨大なネズミから眼を離さないその瞳は、確かに狩をする『人狼』の眼であった。

「…ねえ…おキヌちゃん?」

「…なんですか、美神さん?」

「……うしづばりぐべ、あのままの方が役に立つんじやない?」

「……あは、あはは」

「「あはははははははははははは…」」

乾いた笑い声が、ついに完成しなかつた夢の跡地に満ちていく。

空には綺麗に半分に分かれた月が、顔を出し始めていた。

「長老ー？ いますかー？」

「なんじやー？」

「犬飼さんちのてれびがなおつたらしいですから、いつしょにみにいきませんかー？」

「ええのー。いまいくぞー」

人狼達の中でも特に問題児な奴らが飛び出したお陰で、里にはだらけ切つて、一気に10は老けたような長老の姿があつた。やはり、人生多少起伏があつた方が張りが出るようである。

「相変わらず器用じやの一」

「忠夫君には負けますけどねー。それじゃ、えいつ

「 番組の途中ですが、予定を変更して臨時ニュースをお伝えしております！！ 突如街中に現れた時代劇のような格好をした男二人は、いまだその正体は不明、その姿が巨大な狼に変わったと言つ未確認情報もこちらには伝わっています！！」

「 「は？」

「 …ああっ！ あれです、あの一人がその一人のようです！！ 警官隊による突撃が だめですっ！！ 止まりません！！ 20人近い機動隊をふつ飛ばし、現在新宿区に向かつて進行中！！ 進行方向の市民の皆様は、すぐに非難してくださいっ！！！」

「 ……」

「 わーっはっはっはあ！！ ヌルイぞけーかんとやらつ！！ これなら息子の方がまだましあつたわつ！！」

「 おーい、犬飼ー。そろそろいかないと日が暮れるぞー」

「 犬塚、その手にもつてるやつ、うまそうだな」

「 いや、其処の店先に落ちたもんで、つい

「 一本よこせ」

「 ヤダ」

... 1 1 1

「仲間割れです！！ 仲間割れをはじめたようですっ！！ そしてどうやらあの一人の名前が判明しました、「犬飼」「犬塚」と名乗つていいようです！！ それにしても意地汚い！ 本気です！ 大人の大人が落ちていたフランクフルトを争つて本気で刃を交わしています！！」

「一加減にするで」さぬよ……父上、犬飼殿……！」

「ああハーロシロー！」

「む、犬塚のところの娘ではないか」

「じゃんに回りに迷惑かけて…まあそれは良いとして、いつになつたら兄上のところに行くのでござるか?」

「さあ？」

一
· · · · ·
· · · · ·

最初から」は、これはよか二たのよ

「...」
「...」
「...」
「...」
「...」

「爆発ですっ！」情報によりますと、新たに一人の怪人が乱入した

模様！！　ここでいったんCMでーす

皺くれた手が伸び、テレビのスイッチを押した。

真っ暗になつた画面に、ぎらぎらと輝く眼が映る。

張りを取り戻す所かはち切れんばかりに力の込められた腕から、徐々に皺が消えていく。

張りつめられた筋肉が、その上に被せられた皮膚を内側から押し上げているのだ。

「ちよ、長老？」

「…殺ル。オレサマ、オマエラ、マルカジリ」

「長老ー？」

ふむ。誰だね君は。どうやら全く気付かずにこの空間へと入つてきたようだが、ここでのマナーさえも知らぬのか？

ほう、新入りか、ならばしじうがない。

なに？新入りとはびっくりとか、だと？

なに、それはだな

「やあ」

びびったんだい、そんな、狐につままれたような顔をして。

どひゃり、疲れているよひだね、じぱりく寝ると良ご。戯言には惑わされなことだよ。

いいから、ほり、田を廻つてびらん？ 段々眠くなつてきただろひへ。

それでは、良い夢を。

第十二話（前書き）

投稿遅くなりました。

何時もより長めでお送りいたします。

第十二話

「それでは、行つてくるでござる。」

「は～い、いってらっしゃい」

「全く、こんな朝っぱらから元氣ねえ…ふわあ」

G S 美神除霊事務所。午前5時20分、太陽が顔を出し、鳥達が餌を求めて飛び立ち始める時間帯である。

事務所の入ったビルの前には前には袴姿で箒を持った『お掃除する幽霊少女』がいて、その姿をパジャマ姿の、寝癖であっちこっちに跳ねた髪の毛を片手で抑え欠伸交じりに5階の窓から眺める女性がいる。

そして、どう見ても狼耳と尻尾が生えており、腰に木刀を挿している事以外は普通の、子供服を着た男児が新聞配達員のバイクをブツちぎりながら駆け抜け抜けていくという光景があった。

話はパイパー戦後まで遡る。

「ええつ！ 横島さんの記憶と力が入った風船、見つからないんですか？！」

「そうなのよ…。おかしいのよねえ、実際、他の被害者の風船はあ

つたのに、何であるの子のだけないのかしり?」

「そんな事言つてゐる場合ぢやないですよ! それぢや、横島さんは

…」

「解呪法が分かるか、あの子の風船が見つかるまではあのまま、ね」

パイパーを苦戦の末何とか退け、高額の報酬がもらえるとほつくほくの美神と、車の助手席で眠りこける半人狼の子供、そして、パイパーの開けた穴から飛び出してきた数百個もの風船を空中で捕まえながら、片つ端から忙しげに『金の針』で割つておキヌ。

「おキヌちゃん!…そろそろ終わりそりへへ?」
「ええと、あと5個でーす!..」

「わかつたわ!…頑張つてへへ!..」

「はい!..」

車から身を乗り出し、地上から空飛ぶおキヌに向かつて大声で叫ぶ美神。そしてその隣でひたすら寝こける横島(小)。

「全く… ガラにもない事するんだから」

すっかり子供になってしまい、もう夜だからとばかりあつさりせ
まつ苦しい助手席に丸まって寝息をかく横島の頭を撫でながら、な
んとなく呟く美神である。

「ありがと、小さな侍くん」

とても小さな声と言つか、まるで囁くような声で、熟睡する半人
狼にそう声をかける。その頬がほんの少しだけ赤く染まっているの
は自分の言葉に照れた為か。

「…私のガラでもないわね。とりあえず、こいつが元に戻つたらち
ょっと上等な骨付き肉のボーナスでも出してあげようかしら」

「美神さん！ 終わりましたよ～～～！」

でもちょっと勿体ないかな、と美神の脳裏に少しだけそんな思考
が走つた。

それは横島にお肉を出すのが勿体ないのか、それとも、彼が元に
戻つた方が扱いが面倒くさい事とちょっとだけ思つたからか。

そんな事を考えていた美神の頭上から、仕事を終えたおキヌが声
とともに降りて來た。

益体も無い思考をおキヌを見上げて振り切り、そして二人の大き
めな会話を聞いてもぐつすりと寝こけたままの小さな横島を見て、
その口元が苦笑いを零した。

「そ、お疲れ様…つて?…」

思わず一度見した美神である。

「…え?」

そう咳き固まる美神のそばに、作業を終えたおキヌがふよふよと降りてくる。そして美神の様子を見て、何に気付いたか慌てたように助手席の方に回りこむ。

「横島さん?…」

「むにゃむにゃ…えへへへ母上…」

全ての風船を割つたはずなのに、未だ元の姿に戻らない涎を垂らした寝顔の忠夫がいた。

結局その後周辺を考えられる全ての方法で探し回り、地下に潜つて捜索するも収穫無し。ならばと使つた『金の針』にも反応がなく、そのまま途方に暮れながらとりあえずいつたん事務所に引き返したのである。

「どーします?」

「どーしようか」

それから一週間。

その間の除霊は全て断るか延期し、なんとか横島に、今、両親が忙しくて人狼の里から預かっていて、そう長くしないつひて里に帰

れること、しばらくは此處で過ぐすこと等を納得させることに成功する。

親の躾が良かつたか、礼儀正しく素直な少年として育つていたようで、しっかりとお礼を受けた美神達が、ちくちくと良心を刺激されつつ、どうしてこの子の将来はあんなたのだらうかと疑問を抱えたのは然もあらん。

その間に情報を集めるも現在めぼしい物は無し。

様々な情報屋や文献、GS協会方面にもあまり眠らず当たつていた美神は、直前のパイパー戦の疲れも重なり、とうとう気絶するようになりに落ち、様子を見に来たおキヌが仮眠室まで運んだ。

そして田覚めたのが、丸一日以上経つて、田頃まだ布団に包まれているこんな時間と言つ訳である。

ちなみにおキヌはいつもこれくらいの時間から活動している。新聞配達員や牛乳配りの人たちとも仲良し。

「ま、手は打ったし、後は待つのみ。ふああ。おキヌちゃん、私、一度寝するからしばらく起こさないでねー」

そう言って眼下のおキヌに手を振り、再び仮眠室へと戻っていく美神。その顔にはまだまだ疲れが残っている。

少し心配そうな表情を浮かべながらも、おキヌは一旦筆を置き、温めるだけで食べられるメニューを考えながら事務所の中に戻つていくのだった。

一方その頃、散歩に出た横島。

「と一きょーつて所は、色々あつて面白いでござるな——！」

独り言を言いながら、人の群の中を尋常でない速度で走っていた。

事務所の所長と同僚の悩みなどなんのそ。もう田は頂天に差しかかるうといふのに、元気に街中を走り続けている。

「人も一杯だし、てれびで見た車もたっくさんあるし……これが『観光』でござるなつ！」

辺りをきょろきょろ珍しげに見回しながら、爆走する。

それは、彼が人気の無い住宅街に差し掛かったときだった。

交通事故の原因でも多いのが、余所見運転である。半分とはいえ、人狼は人狼。当然その走行速度も頑丈さも反射神経も人間の比ではない。比ではないが、

「「ぐぎやつ……」」

人狼だらーがなんだらーが、注意も散漫な状態で60kmという速度域にいれば、そりゃいつかは事故る。

「あ、」じめでござる

「 「……」 」

「えつと… そうだー 返事が無い。ただのしかばねのよーだ」

間違いなく父親の悪影響である。

物凄い音を立てて衝突され、塀をひび割れさせながら沈黙する変な帽子を被った異様にひょろ長いにーちゃんと、鋲つきジャケットを着込んだ逆に背の短いにーちゃんという奇妙な二人組。

当然のじとく気絶している。むしろ骨折や流血の様子が無こところが異常である。

「ええと、じつじつとさせ…」

小首を捻る横島の脳裏に蘇る、父に受けた教えの数々。

いつ言つた時に使えたのは無かつたか、と考えに考え、一つの言葉が思い当たつた。

『よこか、忠夫よ。しかと覚えておくのだぞー』

『はい、ドーピングねー。』

『犬飼家、戦の裏道、大人の策略編その四つ……』

『そのよん！…』

『…田撃者は、消せ』

「ええと、たしかまでは田撃者を探して、と…」

記憶の中で、歯を光らせながら異様に怪しい笑顔でそうのたまう
犬飼ポチ。

「いつやつて横島の記憶の奥底には色々なモノがすりこまれていつ
たのだ。そしてそれを忠実に実行する、未だ父の怪しさとアホさを
良く理解していない横島（小）。

そして程なく彼の眼は一つの違和感を探り出す。

「…むつ？…ナニで、ドーピングねー。」

「ミミ置き場に置いてある青いバケツの蓋が、ほんの僅かであるが
浮いているのである。そしてその傍にはまるでぶちまけられたかの
よつな、いや、誰かがぶちまけたのであるひつゝうビバケツに一杯
分のミミの…」

いかにもな現場に、とつあえず離れたところから口を投げて様子を見る。

「わあ、丑いへんなじーじゃねー。」

そして威嚇の声を出した彼に帰ってきた反応はとまづく。

「…………ふえ」

「えー？」

「ふえええええ……」

投げつけられた口によって蓋の外れたバケツの中に蹲る、奇妙な服を来た、角の生えた女の子の泣き声であった。

再び蘇る横島の記憶。

先程と違があるとすれば、彼の田の前に立っているのが母親であり、父親はその足元にボロ雑巾のよになつて転がっている所だ。

『良い、忠夫？あの馬鹿の顔つらせいいから私の顔つらせいいから覚えておこしてね』

『は、はこつ……拙者、まだ死にたくないで』『わねつ……』

『あ、あら、このナつたら……そんなおおげさな』

『い、医者を呼んでくれ……』

『えいっ』

ぐしゃ

『ち、父上……』

『大丈夫よ。昔はあるのくらいならまだまだ避けたわ。そんなことは置いといて、忠夫?』

『はいッ！…』

『貴方は、将来女の子や女性を泣かしちゃダメよ?』

『わ、分かりましたで』『わい…』

『でなれや……』『うわ』

思い出した事と、その内容と其処から導かれる現況のあまりの危険性にとめどなく冷や汗を垂らし始める忠夫。

やばこやばこやばこ……母上にばれたら折檻されぬで』『わねつ

！――

もはや田撲者がどーたらこ たりなどと父の言葉に従つてゐる場合ではない。とりあえず必死に対抗策を考える。しかし、

「ふええええええええ…」

「あああ――――！」

田の前で泣き続ける少女のおかげで全く考えが纏まらない。
もしこんなどいひ母上に見られたら、絶対に口クな事にならんで
「じれりよ―――」

…もうその女性がいなくとも、彼はそのことを覚えていない。いや、経験していない。それがどれほど大切なことであらうとも。それが、パイパーの残した呪いなのだろうか。

「ええと…『めんなせ』…」

「ふえ？」

侍の誇りは何処へやら。

地面に擦り付けんばかりに下げる頭と、泣いている少女本人よりも悲壮な感情の籠つた謝り文句は、とりあえず女の子の涙を止める程度には、役に立つたようである。

「あの、すまなかつたで』『わる。拙者、てつきり怪しい奴かと」

ようやく泣きやんだ女の子であつたが、横島の言葉に首を振る。

「あ、いや、お前が怪しいといつてる訳じゃなくて、その…え？
何でござるか？」

少女は、横島の言葉を遮るように、その服の袖を軽く引っ張りながら自分を指さし、小さな声で呟いた。

「……天竜」

「天竜？　ああ、名前でござるか…！　拙者、犬飼忠夫と申すもの。
侍でござるー！」

「……耳？」

「む、なんでござるか？」

とりあえず初対面というか、一番最初にやったことが石を投げるという、今思えばかなり冷や汗モノの出会いであったが、自己紹介も済んでほっと一息。落ち着いて横島を見た少女が気になるのは、人狼としての部分であった。

「ああ、拙者半分人狼でござるからな」

「…おそろい」

「ん、おおー、角でござるのかー！　なかなかかつこいいではござり

んか！」「

「……」「

泣いた鳥がもう笑う。そんな感じでにっこり笑う天竜と名乗った少女。

「……しつぽめ」

しばらく横島の耳を興味深げに見ていた少女が、ふと横島のふりふりと上機嫌に動く尻尾を捕獲した。

耳もそうであるが、自分には無いふさふさの尻尾の動きに誘われたらしく、子ビモであるせいもあってか結構遠慮なく尻尾を捕まえた。

「うひやつーー、いきなつは止めて欲しいで」ぱわるみつ……

「…ダメ？」

尻尾には神経も走っている為、結構敏感でもあるのだ。

急につかまれ離して欲しいと叫ぶも、少女はその感触に囚われた様子で、にぎにぎとつかんだり離したりを繰り返しながら、小首を傾げて横島に問いかけた。

「……で断ると、また泣きそうだな、と既に諦め半分に横島は溜息を吐く。

残り半分はせめてお手柔らかに、と祈る気持ちだった。

「ちゅ、ちゅうじだけでござるよ?」

「……ん」

「つらやひやひやひや……」

とてとてと歩いて忠夫の後ろに回ると、こきなり尻尾に頬擦りをはじめる天童。

一田は断られ、少々落ち込んだもののOKを貰つてからはかなりお気に召したご様子で、辺りにはなんともいえない和やかな雰囲気が漂っている。

子どもの泣き声を聞きつけて辺りの家から出てきた住人達も、なんだか癒されているようである。

尻尾とか角とか耳とかを気にしてもいないのはどつかと思つが。

人気のあまり無かつた住宅街に、しばし少年の笑い声が響き渡つた。

「ぜはっぜはっ

「……大丈夫?」

「ぶふああ～～。も、もう大丈夫でござるよーー。」

「……」めんなさい

そう咳きショーンと小さくなる天竜に、慌ててフォローを入れる忠夫。

「あああっ！大丈夫でござるよ！」
ちょっと笑いすぎて苦しかった
だけでござるから

「ふえ」

「ああああっ！！」

フオロ失敗。

「そ、そういうばー！何であんなどこかにいたんでござるか！」

「……ふえ？」

「あのバケツの中はどうなるよ」

「あのね」

「五
人
五
人」

と思ったが逆転セーフであつた。

天竜の話によると、親のお仕事で旅行気分で出かけてきたものの、ある事情で宿泊先のお部屋から出られなかつた。そのため、あらかじめ「こんなことあるーかと」おうちのいろんなところからいろんな物を持ってきたらしく、そのうちの幾つかを使って其処からでて、観光していたという。

ところが、なんだかへんなおにーさんたちが追いかけてきたので逃げ出し、とりあえず隠れていたらいきなりすこい音がして、その後隠れ場所に石がぶつかってきたのでビックリした、と。

「そーい「ひ」とで「ざるな」

「……そーい「ひとなの」

「んで、その変な男とはどんな奴らで「ざつたか?」

「……アレ」

そう言つて眩いた天竜の指の先には、先ほど忠夫が轢いた二人組の姿が。

流石に氣絶から立ち直つてはいないようで、まだ意識は無い物の手足がピクピクと震えていた。

「む、さすが拙者! いつの間にやら悪者を退治しておつたか! ! !

「……結果おーらい」

あさつての方角に2人揃つて親指を立てながら、一仕事終えた後の表情で笑う横島達であった。少年の方はちょっと汗を流していたが。

ともあれ、それまで和みながらも一人の話を聞くともなしに聞いていた善良なる地域住民の方々は、その台詞を聞いて速やかに動いていた。

女性陣が一人にお菓子やお茶を出して角と尻尾、耳に触り。

その陰に隠れた男性陣が氣絶した一人組をロープで縛つて小声で子どもには聞かせられない物騒な台詞を各々囁き声で相談し、地面を数人がかりでひきずつて行つた。

なんともチームワークの良い町内である。

「んで？ 俗界には縁の無いはずの竜神様が、なんだつていきなり私の事務所に訪ねてくるのかしら？」

「美神さん！！ 私は今、非常に困っているのですーー！」

「なんか工事に問題でもあつた？」

「それはありません！ 大工の方々も、私が竜神だと知つたら何故かとてもお仕事が速く正確になりましたしつーー！」

「...どーりで」

忠夫が轢き逃げした二人組みをほっぽつて、天竜と一緒に事件現場で歓待されているまさにその時、G S 美神除霊事務所には竜神、小竜姫の姿があつた。

美神が何かに納得した風なのは、何故か大工の棟梁に「手抜きでも良いから、余ったお金の半分は返してね」と言っていたにもかかわらず、返ってきたのが余った金額全部。しかも予想よりも多い。

ラッキー

天罰や仏罰等を恐れた棟梁に比べ、何の恐れも見せず、そう考えるあたり、下手な神や悪魔よりも恐ろしい。

「それで？ 私の所にきたって言う事は、依頼かしら？」

「ええ、実は……」

小竜姫の語るところによると、竜神族の王、竜神王が地上に住む竜神たちとの会議に出席する為、地上に降りてきており、その仮の宿が小竜姫の管理する妙神山であるらしい。

地上に住み、仏道に帰依した竜神王を疎む輩が不埒なことを考える可能性があること。

そこで狙われるのが強大な力を持つ竜神王ではなく、その姫である可能性が高いこと。

しかし、妙神山にて会議が終わるまでの間、会議が終われば、地上の竜神たちにお披露目し、あわよくば娘を見始めた位の高い竜神に…と言つ考えの元であるが、保護されているはずの姫本人が何らかの方法で脱走。早く保護しなければ危険である。

纏めると、そういうことである。

「と、言つ」となのです」

「下衆いわねー。本人に勝てないからってその娘を狙つ馬鹿も、そんな奴らの手綱を取る為に娘を嫁にやろうとする龍神王も」

「ずばつときつぱりはつきり言い切る美神に、かなり含むものはあるもの、とりあえず自分の役目を果たすことが先決である。

「そ、そう言われましても、こちらにも色々と事情がありますて…」

「いーわよ、別に？ そんな話、昔つからあんたらの言う俗界では珍しくも無いんだし。神界の連中も、別に高尚な存在つて説じやないでしょーし」

「… それでは、本題に入つていいでしょーか？」

「どーぞ？ ただし… ギヤラは弾んでもらつわよ？」

全くやる気が見えない。

小竜姫も本来ならば自分の力で探したい。しかし、事は急を要する。

俗界もすでに様相を変え、小竜姫の知らない事が多すぎる。ならば、例え人間であつても、力を借りるのが最善の方策。ここで依頼をせず、不慣れな場所で対象を危険にさらし続けながら、それでも自分の力だけで探そうと言うのは下の下だ。

「結構です。それでは、こちらからの依頼は『天竜姫』の保護。報

酔はこのへりいで…

差し出された箱の中身を蓋をあけて覗きこみ、美神はふん、と鼻を鳴らした。

「りよーかい。その依頼、GS美神が受けさせていただくわ

「お願いします」

身内の情けない内情を晒さざるを得なかつた為か、それとも仕方ないとは言え重要な案件を顔見知りにそつけなく扱われているが故か、小竜姫の顔が、一瞬だけ不快気に歪む。

が、次の瞬間にはいつも通りの冷静な表情がその顔を覆っていた。

「…いくわよ、横島君！おキヌちゃん！…」

小竜姫の表情の変化に気付いているのか、横目に小竜姫を見ながらも、美神は何も言わずに立ち上がる。

「…あのー、美神さん？横島さんは…」

「あ”

三人組の内一人が大問題を抱えている事を思い出したのは、声に出しても返事が無い理由に気付いてからだった。

「……てててつ、畜生！　一体なんだってんだ！　こには何処だつ！」

「兄貴、大丈夫かい？」

「まーだ頭がぐらぐらしやがるーおい、イーム！例の娘の匂いはまだ終えるかつ？！」

「へ、へい、ヤームの兄貴！」

イーム、ヤームと互いに呼び合ひた怪しい男達は、ふら付きながら立ち上がる。

横島に轢かれ、住民たちにショッ引かれ、近くの警察署の牢屋に氣絶したままぶち込まれていた彼らは、光りのさし込む鉄格子がある壁に向かつて掌を上げた。

瞬間、閃光が走り、鉄筋入りのコンクリートで出来ている築のそれは、内部の細い鉄骨をひしゃげさせ、粉塵を吐き出しながら外側へと吹き飛ばされていく。

轟音を立てて脱獄に成功した二人。

そして、のっぽのイームが何かの匂いを嗅ぐと、それを追いかけ走り出す。まだまだ、危険は去つてはいない。そして、その黒幕さえも見えてはいなかつた。

「わっ！ わっ！ すごい！ てれびじょんに色がついて薄くなつてる！」

「小竜姫様危険です！ つかつに近づくと何が起るか！」

「左の言つ通りです！ 此處は一つ慎重に…」

一方その頃、小竜姫達は、何十年振りかに見たテレビが液晶になつて薄くなつた事に大変驚いていた。

「一体何やってんのよあんたら？」

「はっ…さうでした、天竜姫様を早くお探ししなくては…」

数百年ぶりに管理すべき場所たる妙神山から降りてきた竜神とそのお供の鬼神達は、技術の発達とあまりの街の様子の変わり様に何処ぞのド田舎の住民さえも引くようなおのぼりさんっぷりを見せている。

店頭のTVにかぶりつくスカートを履き、いかにも現代風の格好をしたその風体とはちぐはぐな行動をしている妙齢の女性だけならばともかく、その後ろから一緒にになってTVを凝視する2人の黒いスーツを来たサングラス姿の2人の男性の姿もあっては、店員さん

モペド。

液晶テレビから引き剥がされ、氣を取り直してあたりを見回すも、其処には人々の群。

動きを見ているだけで目が回りそうさえある。

「…」こんな中で天竜姫様を探し出すことなどできるのしようか？」

「…やらないぢやなんないんでしょう？その子が危ない田にあつてゐつて言つんだつたら、わざと保護する必要があるし」

「横島ちゃん」

「ほーら、おキヌちゃんもわざと動く！」

捜索活動を再開する美神たちではあったが、何せ半径5キロに絞つただけでも一体どれほどの人間がいるのやら。

「…全く。こうこつのは探偵の仕事だつての

やはりあまりやる氣が出ない美神は氣だるさうに呟くと、その表情を引き締めて辺りに靈感のアンテナを伸ばし始めた。

「ふむ、とりあえず此処まで離れれば問題はないでござりやう」

「……ふへ~」

「どうしたでござるか?」

「……速かつた」

変態かどうかは知らないが、とりあえず話を聞いた限りでは天竜と名乗った少女は危険に曝されているらしい。そして傍には気絶している追つ手らしき2人組。

ならば他にもいるかもしれない、と天竜の前にしゃがみこみ、その背に少女を背負う忠夫。そのままお茶とお菓子をくれた皆さんに二人一緒に頭を下げ、全力で離脱開始。

背中で背後に手を振りかえしているらしい天竜が落ちないように注意しながらではあつたが。

屋根を越え、塀の上を走り、川を飛び越え階段を一気に飛び降りる。

そして気付けば美神除霊事務所まであと数キロといった所まで走り抜けていた。

ちなみに天竜姫、その間中何も言わずにさきゅつと背中にしがみつきながら目を閉じていた。

下手なジェットコースターよりもスピードはないが、そのかわり

慣性の法則に喧嘩を売るようなその速度域での身体コントロールは、さすが人狼、といった所か。

「とりあえず美神おねーさんたちに相談するでござる」

「……おねーさん?」

「あ、本当のおねーさんではなく、ここで拙者が世話をなつててはる方々でござる」

「……いいひと?」

「いい人でござるよつー。昨日のご飯も美味しかったでござる。」

記憶を失い、今までの付き合いが無かつた事にされているとはいいえ、とりあえず餌と住処をくれただけで簡単に信頼するのもどうかと思ひ。……いわゆる餌付け。

「ソーリで待つてこらでござるよつー。ま呼んで来るでござるよー。」

そう言って半人狼の少年は少女を部屋のソファーに下ろした後、飛び出していった。

「……柔らかい」

指先でつつくと、ソファーは柔らかくその形を変えた。

「……」

ぼふぼふぼふぼふ

楽しげにソファーの上で軽く飛び跳ねて遊びだすあたり、こっちの少女もなかなかに太い神経を持っているようだった。

「…ふーん？ 田撃情報によると、この辺りでおそらく天竜姫が見つかつたらしいわね」

電話で知り合いの情報屋に連絡を取ると、小竜姫達を連れ歩いている間に意外にあつさりと求めるものは見つかった。

蛇の道は蛇。いかに優れたG.Sとはいっても、人探し得意と言つ訳でもない。だが、優秀な情報屋と伝を持っているというのも一流と言つブランドの価値を高める一因となっていることは間違いないだろ？

「どがあたりですか？？」

「待つて…結構距離があるわね、車でも回したほうが速いかも」

「先に行きます！」

「あ、ちょっと…！」

美神の前に広げられた地図を見て、大体の方角と田印を確認した小竜姫達は美神の呼び止めにも答へぬまま、焦ったように地面を蹴つて空へと飛び立つ。

「ああ、もう少しだけ…迷子の子供がいつまでも同じ場所にいる訳ないじゃない！ もう少しあと待てば、追加で情報が集まるって言つたのに…」

情報は時間がたてばたつほどにその価値を失うとはいっても、今回は探し物が動いているのである。あっちで見つかったからすぐに行く、と言つるのは下策ではないが上策ではない。ましてや、小竜姫には美女たちと連絡を取る手段がないのだ。これでは単なる分断である。

「しょーがないわねー！おキヌちゃん、一旦事務所に戻って車を回すわよっー！」

「いつなつてしまえば、生身では空を飛ぶ」とのできる小竜姫たちには追いつくことができない。しかも目撃地点に行くのならばどうにせよ足が必要であると判断した美神たちは、とりあえず事務所に戻ることにした。

「美神おねーさん達居ないで」「わるなー。」それでも飲んで、まつと
くでしゃる

「わあ」

「ねーぞー！」の声がした。それがジニアースドア。「アハハ！」

「…………あっがとう」

「いやいや、困っている人を助けるのは武士の役目でござるからな」

事務所の中には、オレンジジュースを飲みながら談笑する子供達の姿。傍の窓から下を覗けば、さきほど忠夫が轢いたはずの2人組が今にも事務所の中に入ろうとしているところが見えただろ。

「……ま、間違いないんだな。匂いはここに入つていつてるんだな」

「よし、とつとと田標を確保するぞ」

そしてそこから更に視線を飛ばせば、こちらに向かつて駆けて来る亞麻色の髪をなびかせた女性と紅い袴をはいた幽霊少女が。

そして、事務所に程近いビルの上からは、その全てを視界に收める全村をフードで覆つた何者かの姿が。

第一幕の準備は、着々と整つて行き。

「なんでござるか?...」

「…みつけたぜ、天竜姫様。だまつてこちらに来て貰おうか?」

「お、大人しくしていれば危害は加えないんだな」

そして、開幕のベルは鳴り響いた。

事務所の中では、今、謎の二人組がその内部に突入した所であった。入つてすぐの応接室にあるソファーと年季の入つた机。そしてそこに立ちすくむ少女と、その少女を庇つて立つ少年。

「小僧。邪魔をするんじゃねえ。怪我したくないだろ？？」

「……た、たのむから大人しくしていて欲しいんだな、別に殺そつて訳じゃないんだな」

その言葉を聞き、震える少女の前に立つ少年は、

「ふざけるなで！」「わるつーー！ わう言われてほいほい退く侍なぞ居るかつーー！」

わう吼える。

「ちつ、しょうがねえ。おいイーム、あんまりひどい怪我させるんじゃないぞ」「ぞ」

「わ、わかってるんだな兄貴」

その言葉に反応し、その2人は、

「人外かつ！」

角の生えた、人の形をしながらも、鱗と角、縦に割れた瞳を持つた竜族へとその存在を変えた。

「しゃつー！」

それでも人であった頃のように、短躯と長身の影からは、未だ殺氣は無く、だがそれゆえに敏感な感覚を持つ少年を僅かに動搖させる。そして、その一瞬で全ては、少年の手をすり抜けた。

「…あやつー」

「しまつたー！」

長身の竜族から伸ばされた手は、その長さを明らかに倍以上に伸び、隙を見せた少年の後ろから少女を搔つ攫う。慌てて腰の木刀を抜き飛び掛るも

「邪魔だ」

短躯の竜族の角から放たれた力により届かない。

「がつー！」

弾き飛ばされた少年は宙を舞い、そのまま背後のテーブルを巻き込みながら地面へ叩きつけられる。

そして、少年が再び動かないことを確認した二人組は、そのまま事務所を出て行こうとした。

しかし、その眼前で黒い光りが収束した。思わず足を止め、天竜を庇うように動きながら、その光りを警戒する一人。

「…苦労。イーム、ヤーム」

「旦那つ！」

だがしかし、場に突如として現れたのは、先ほど遠い所から舞台を眺めていたはずのフードを被った何者か。

「へ、へへへ……」希望どおり、竜神王陛下のご息女、確保いたしましたぜ」

「……んつ」

2人組のうち、天竜姫を捕まえていたイームが怯える少女をその人物に向かつて差し出す。その少女を受け取ったその存在は、そのまま元を妖しく吊り上げた。

「……確かに、天竜姫ご本人だ。報酬だつたな？」

「だ、旦那ツ……」

「これが報酬だ……」

左手に天竜姫を抱え、その右手に禍々しい力を集めると、それを驚愕に身を固めたヤーム達に向かつて放つ。

「天竜を……はなせええええつ！」

「なつ！」

しかし、何時の間にか起き上がりっていた半人狼の少年は、一足飛びに先ほどとは比べ物にならない速度で飛び掛り、腰から抜いた仕込み刀でその左腕に斬りかかった。

慌てて回避するが、不意打ちに応じきれなかつたフードはその一部を切り取られ、思わずその手に持つていた天竜姫を放してしまつ。

そのままの勢いで刀を振るわなかつた右腕で少女を掴むと、一塊になつて反対側の壁に突つ込むが、その身を挺して少女を衝撃から庇う。

「無事か、天竜！」

「……ん、大丈夫」

少女を搔つ攫い返した少年は、まず少女の無事を確認し、ロープを被つたままの人物と、殺されそうになつた事で一時的に動きの止まつている二人組を見渡し、ロープの方が危険度の高そうな相手と判断。

同時に、自分の力量では敵わぬ相手と言ひつ事も、その本能が伝えていた。

「何者かは知らぬが、その振る舞い！ 其方を敵方と判断するでござるつ！ 犬飼忠夫、呐喊！」

ゆえに、横島はそう叫ぶ。

「 後ろに向かつてつー！」

当然ながらやり合つには分が悪すぎるるので、少女を背負つて全速力で5階の窓から飛び出した。

「……え？ ……はつ！ 逃がすかっ！」

「てめえっ！ 最初っから俺らを切るつもりだったのかつ……」

残されたのは、あまりの鮮やかな逃げっぷりに、僅かにだが動きを止めたフードの人物と、捨て駒であることを分からされた竜族達。

「ちつ！ 肩どもが、要らぬ手間をつ……」

「舐めるなああああつ……」

その頃になつてようやく美神たちが事務所の入つたビルへと辿り着く。

その目に入ったのは、光を反射するガラスの破片と一緒に事務所の窓から捜索対象を背負つて飛び降り自殺敢行中の忠夫と、その後を追いかけるように広がる、明らかに魔力を伴つた爆風、そして爆音であつた。

「 「 ……くつ？」

「ふつ、二人だと高過ぎかもしれんじやれるううううつ……」

「……わやつほう」

自由落下をはじめたお子様2人は、そのまま街路樹へと突つ込み、その根元に着地。辺りを見回せばその爆音に驚いたかどんどんと集まつてくる野次馬達。

「いたつ！ 無事でいざるか天龍！」

「……ちょっと楽しかった」

「ならよしつー！」

「良くないわよつー 一体何がどうなつてんの？！ 三行で！」

「ああ！ 美神おねーさん！
お菓子貰つた！
やばそうな敵が来た！
裏切つた！
ドジヤれるよつー！」

その慌てる様子と、事務所での爆発、そして背負つた天竜姫。突つ込み所は山ほどあるも、とりあえず非常事態真つ口と判断。

「…なるほど」

「今ので分つたんですか美神さんつ？！」

「全く分らなかつたから後できつちり説明してもいいわよつー！」

「それならなんでそんな聞き方をしたんですかあー！」

おキヌの突つ込みをスルーしつつ、一声叫ぶと子供達に向かつて手招きし、隣のビルの空きテナントへと駆け込んでいく。全員がビルの中に入ると同時に既に原形をとどめていない事務所の窓から飛び出すロープ。

「…つちーーー！見失つたか！」

しばらく宙に浮かびながら辺りを探していたが、もはや周囲には野次馬だらけで、これ以上探すには不安要素が多くないと判断し、その姿を消すのであった。

「「ふあつーー」」

その姿が消え、消防車両が現場に到達し始めた頃、瓦礫の中から顔を出した2体の竜族の事は、今は誰も知らない。

そして、野次馬の中には『彼ら』の姿があった。

「ふむ、中々面白そうになつておるではないか、のう、マリア」

「イエス。ドクター・カオス」

「…あの小僧、久方ぶりに見てみればえらく縮んでおる。さては例のパイパーとでもやり合つて、解呪しそこねたな？」

「データベース・検索……ヒット。6日前・国連・データベース内・悪魔バイパーの賞金・支払済みに・変更してあります。悪魔バイパー・敗北の確率・98・7%。先ほどの少年の・骨格・靈波調・『犬飼忠夫』との一致率・99%。犬飼忠夫本人と・判断します」

「やれやれ。『世界』に好かれるところの、樂ではないよびじや
の」

「回答・保留・しまわ」

「ふはははははー。 もー、すこーし、引っ搔き回してやるとするか。
ちつとは楽しませてもらいたいもんじやー。」

「 イエス。 ドクター・カオス」

「 ！」の程度で終わらんよなあ、小僧？」

言葉を交わした老人と、ロングコートの女性はそのまま人込みの中へと消えていく。その手に、トイレットペーパーと近所のスーパーのビニール袋が合つたのがなんともはや。

「 全くもつ、えつりい散財だわー。事務所の中にはあつた除霊道具代分、
絶対に後悔させてやるー。」

「 臭いドーピカル〜。 鼻が曲がるドーピカル〜

「 … 美神さん、何でビルの地下にこんなものがあるんですか？」

空きテナントに滑り込んでみれば、其処にあつたのは緊急用非常シート。そのままその中を滑つてみれば、到着したのはいつか見たような東京地下下水道。そして其処に浮かぶ一隻のボート。

実は、事務所のほうにも入り口が合つたらしく、しつちは事務所自体がもしものことに巻き込まれた時用の、非常口の非常用。いくら転ばぬ先の杖とはいえ、此処まで用心する辺り流石と言つかんと言つか。

「ちょっと報酬が払えない顧客から、アーマー… つとね」

「……かつこいい」

「あら、わかる? 中々値が張るのよ、これ

微妙に判断基準がずれている。

とりあえず非常用の缶詰を皆で食べながら、情報を聞き出す美神。この際あたりの環境にまで気を配つて入られない。もう一戦やらかすためには栄養補給が必要である。

彼女の結論としては、直接追いかけていた2人組みはどうやらただの駒であり、最後に出てきたフードの人物がその黒幕である事。

そして、決定的な場面になるまで静観していただけにも係らず、最後の最後は自分の手で直接殺そうとした事。そこから導かれる答えは、相手が他人を信用しない、単独で動くタイプの、プロであること。

ということは。

「間違いなく、もう一回来るわね。今度は本人が」

「そう呟き、手に持つた空き缶を握りつぶす美神。
「まず狙われるのが、貴方よ天竜姫」

「……？」

「いや、不思議そうにしてる場合じゃなくて。まあいいわ。とり
あえず、小竜姫と連絡つけたいところだけど、あの竜神様も何処行
っちゃってるのや！」

ぼやく美神と、缶詰に顔を突っ込んでいた横島が、同時にその視
線を下水道の奥へと向けた。

「美神おねーさん」

「…ええ、早速来たみたいね。まつたく、仕事熱心だこと。皆、乗
つて！ ここじや埒があかないわ！ 見通しの聞く場所まで一気に行
くわよっ！」

そう言葉をかけながら、ボートに駆け寄ると、運転席に飛び移り
エンジンを始動させる。

薄暗い下水道に、獣の咆哮にも似たエンジン音が反響し、排気筒
からは狼煙の如く黒煙が吐き出される。

「さあて…誰に喧嘩売ったか、教えてあげるわっ！…」

そして、それらを超えて霸氣の籠った声を放つ美神。

第2幕 反撃、開始

「　「　「　疲れた」　「　」

「犬塚の娘よ。少しやりすぎたのではないか？」

「…笑いながら白黒の車でドミンゴやつてた犬飼殿には言われたくないで」^{ハル}「

「あ～うまかつた～。東京の店も中々だな。後でもつかい探して
みるか」

「…なんであんたはそんなに余裕なのよ」

そう会話する4人がいるのは現在工事中のビルの中。とりあえず
先に邪魔者を片付けようと、後から後から沸いてくる警官と機動隊

とを相手取り戦っていたのだが、いいかげん飽きてきたそこに、突然凄腕のGSとその助手が乱入。

その冷静沈着な戦法と強大な靈力でこちらを撹乱。辺りにいた警官達を下がらせた後、遠距離からのスナイパーだけを残させ助手とともに4人とぶつかり合つたのである。

とはいへ、人狼+のほうには殺すつもりなど毛頭ない。そもそも親父達にしてみれば只遊んでいただけのよつなものである。被害が全く洒落になつていないが。

だが、流石に相手も熟練したGSのようであり、気付けばいつの間にやら結界の中。

「しかし、たまには狐も役に立つでござるな」

「…いい度胸してんじゃない」

「喧嘩はいかんぞ、犬塚の娘よ」

「全くだ」

「そもそもの原因はあんた達でしょーがつ！…」

なんとかタマモの幻術と狐火を併用した煙幕で視界を閉ざし地面の反響音から地下に通路がある事を発見した犬塚が地面を一刀で深く切り裂き、からくも逃げおおせたものの、いまは早く此処から離れることが先決である。

「先生っ！大丈夫ですかっ！…」

「痛たた、ああ、ピート君。いや、大丈夫だよ」

「あいつら、なんて化け物じみた奴ら…。一体何なんですか、あれは？」

「あれが、本当の人狼つてやつだよ。どうやら私は遊ばれたようだね。やれやれ、こりゃ本格的に修行しないとダメかな」

そういうて地面を見下ろす唐巣神父。3・4mはある巨大な爪跡のようない裂け目が、地面を深々と切り裂いて、その威力を見せ付けていた。

「むう、おかしいでござるな。確かに百合子嬢から聞いた住所は此処のはず」

「ん、どれどれ？ …間違いないな、ここであつてるはず」

「…兄上の匂いが薄いでござる。どうもここ4・5日は帰つていなじよつでござるが」

「…引っ越したんじゃない？」

それから暫く後、人狼+ が居るのは、現在住人の居ないアパートの忠夫の部屋の前。

いい加減面倒くさくなつた彼らはとりあえずそこらを歩いていた、組長と呼ばれていた人物とその護衛から、恐か いやいや、交渉の末、衣服を強だ いやいや、快く譲つて頂き、変装。刀は一応3本纏めて落ちてた代紋付の風呂敷で巻いてカモフラージュしてある。

意外にも侍姿が印象深かつたらしく、警戒中の警官達に怪しまれはしたもののあっさりタマモの幻術で切り抜け、よつやく田的町に到達していたのである。

ところが尋ね人本人が不在。それもそのはず彼は事務所で爆破されたが、寝泊りしていたのだから。その生活臭も薄くなっている。

「とりあえず届け物をしておくか」

「待て、犬飼！これは――」

やおらあたりの匂いを嗅いだかと思うと、いきなり忠夫宅の扉をぶち破り不法侵入をかます犬塚さんちのおとーさん。

「父上つ！ いつみたいなにを それはつ！」

そのまま部屋に突っ込んだ彼が「スパンッ」と開いた押入れの中には

「む、あやつめ、こいつこいつとは得意でござつたな」

「もぐもぐ。む、うまい」

「あー、ずるいでござるー、拙者にもーーー。」

忠夫が作った燻製肉がこんもりと新聞紙の上に積んであった。

「――もぐもぐ。うまうま――」

「…あんたらねえ」

結局何しに来たんだお前等、ヒタマモは呟つた。

「やあ」

さてさて、再び彼らの登場だ。彼に言わせれば乐じゃないのかもしれないが、もっと大変なのは相対するものだらうがね。

ソレは運命。

ソレは流れ。

ソレは意思。

世界が愛した者だから、世界はそれに運命を投げかける。世界が恋した彼だから、世界はそれを導き押し流せる。世界に愛された存在は、その意思で全てを世界を変える。世界が求めた存在は、否応無くその形を進化させていく。

トラブルメーカー？

惜しいね、その呼称は。トラブルを作るんじゃない。

トラブルが魅せられて自分から寄つていくのさ、ああいうのには、
ね。

だからこそ彼の周りには『集まる』。

人も、神も、魔も。

さてさて、『今度』の『彼』は一体それらに何を魅せてくれるの
やら。

今宵は此処まで

良い夢を。

第十四話（前書き）

遅くなりました。
そして長くなりました。

第十四話

「一体これはどういふことなのですかっ！」

「さあ、全く分かりませぬ… 美神殿達に、何かあつたのでしょうか？」

「そんなことは見れば分ります！ 鬼門達は周辺の搜索を！ 私はあそこを見てきます！」

「「はつー」」

天竜姫の情報を基に探しに出た小竜姫達が目撃情報のあつた場所に到着した時、既にそこには天竜姫どころか人影すらも碌に無く、辺りには静寂が広がるばかりであつた。

それでも一縷の望みにかけて探し回るも全くの無駄骨となり、肩を落としながら一旦美神の除霊事務所に戻つてみれば、そこにあるのは無残にも黒く煤けた残骸と、その周辺を走り回る警察官と消防士達、そして僅かに立ち上る白い煙。

しばらく睡然としていた彼女らだが、小竜姫は一人の鬼門に指示を出すと、周囲の人間達に見つからぬように注意を払いながら、ビールテープの張られ、封鎖されたそこに飛び込んでいく。

「…酷い」

数時間前の姿はそこに無く、あるのは只黒く煤けた瓦礫ばかり。

美神と対面に座ったソファーも、おキヌがお茶を入れていたポットも、ただの黒焦げなゴミとして転がっている。

ふと、火災現場には不釣り合いな気配を感じた。

「…」これは

僅かな残り香だった。

しかし、それは火事場の匂いに紛れ込んではいたが、彼女にとつては見逃す事の出来ないものであった。

高位の幼き竜族の気配と、邪悪な力ある者の気配。

「一体何者が…」

その気配に集中していた小竜姫の背後から、瓦礫を突き崩す音とともに何かが這い出てくる。武神らしく凄まじい速度で反応し、神剣を構え振り向く小竜姫。果たして現れた者は。

「いて…ふう、何とか助かつたようだな」「あ、熱かったんだな～～」

イームとヤームの竜族凸凹コンビであった。

あちこちに火傷を負い、爆発に巻き込まれたのか服は破け、その身体にはいくつかの傷を残してはいたが、生来の丈夫さのおかげか動く事に支障はないようだ。

この先も、その首が繋がつていればの話ではあるが。

「何者ですか。名を名乗りなさい」

「「「うわっ！」」

掛けられた冷たい声に顔を上げた二人の前に神剣を抜き、完全に戦闘態勢に入っている小竜姫の表情の無い顔が入る。

巨大な竜氣と、その名を知られた妙神山管理人のいきなりの登場に仰天する2体。

「「「げつ！！」」

今の立場はどう考へても不味い。そのまま回れ右をして逃げ出そうとするが、眼前の武神はそれをやすやすと見逃すほど甘くは無かつた。

「そこ」より一歩でも動けば、そのそつ首叩き落されるものと思ひなさい」

首に添えられる冷たい感触と、それより冷たい小竜姫の言葉。本気である。マジである。首は落とさなくとも手足の一本くらいは持つていぐ。そんな氣迫の籠つた視線だった。

「「「あ、ひ！」」

こりやもうダメだ、と両手を高々と上げながら、死出の旅を覚悟した彼らを責められる者などいはしない。

身体全体に感じる冷や汗に塗れた服の感触とは別に、二人とも股間のあたりにちょっと冷たい感じがしたのは、触れないでそつとし

ておいてほしい事であった。

「つまり、その『怪しいフードを被つた竜族のお偉いさんらしき人物』に騙された、とこう訳ですね?」

「「…はい」」

「馬鹿ですか貴方達は!」

「「ひいにっ…!」」

怒声とともに苛立ちを堪えながらもなんとか抑えていた竜気が再び爆発する小竜姫の目の前で、土下座しながら、ひたすら萎縮するイームとヤーム。

「…ふう。それで、何で今更こんな所に?」

ここで怒りを爆発させてもしようがない、となんとか己の心を宥める事に成功した小竜姫が、その竜気を収めたのを感じ、恐る恐る顔を上げる二人組。

小竜姫の質問に対し、顔を見合せた一人だったが、彼女の神剣が地面上に勢いよく突き刺さる音に飛びあがり、慌てたように話し出した。

「そつ、それは」

フードを被つた怪しい影が窓から飛び出した直後。すぐさま意識を取り戻した二人組は脱出を考えたが、窓の下には人間が一杯。

ビルの内部に逃げ出そうにも、そちらは既に何に引火したのやら火の海であり、どこかに良い出口は無いか、と探してみれば、衝撃で崩れたらしい本棚の裏に緊急脱出用らしきモノ。慌てて飛び込むビルの一つロアを吹き飛ばす衝撃は伊達ではなく、既に途中で崩れ落ち頭は通る位の隙間はあるものの行き止まり。下手に崩せば二度と立ち直れない。次災害があるために手も出せず。

ショウがないのでほとぼりが冷めるまで隠れていた、というわけである。

そして一人は吐かされる。

なぜ、こんな事をしたのかを。

下つ端とは言え、竜族のはしくれであり、それなりに力を持つた彼らが、どうしてわざわざリスクの高い、竜神王の娘の誘拐などと言つ、成功してもその後の人生に展望の描けない、しかも失敗すれば即処刑間違いなしの犯罪を犯したのかを。

まあ、それ自体は仕事をさぼってたら上司に首にされたので逆恨みしてました、というなんとも情けない通り越してどうしようもない理由であつたが。

そして、その話を持ってきたのが誰なのかを。

「…やはり黒幕が居ましたか」

「へ、へい、その靈格といい、まんざら嘘ではない、と思つたもので、すつかり…」

「…よいでしょう。貴方達、理由はともかくとして、まだ更生の余地はあります。こちらに協力しなさい」

「許して頂けるんで？！」

「あつ、ありがとうなんだなつ！…！」

「これから働き次第では、といつゝことです…『鬼門！聞こえますか！』」

性根が甘いのか、二人組に利用価値を見出したのか。それともこの際使える者は何でも使おうと言つ美神的なものに染まりでもしたか。

司法取引を持ち掛け、その一人を手駒にくわえる小竜姫。そのまま鬼門達に念話で話し掛ける。

『鬼門？どうしたのです？』

が、返事が無い。

「ど、どうかしたのかな？」

「いえ、おかしいですね…鬼門たちと連絡が「あいつらなら外でおねんねしてるよ」つ…」

小首をかしげながら、外の様子を見ようとした小竜姫。だが、その言葉の半ばで彼女の姿は瓦礫を巻きこみ吹き飛ばされ、イームとヤームの視界から一瞬で外されていった。

そして、小竜姫の立っていた場所の背後に、先程までの話に出ていたロープ姿の妖しい人物がたつている。

おそらく小竜姫を襲つたであろう武器、刺又を振りぬいた格好の人物は、瓦礫の向こうに姿を消した、しばらくは動けないであろう彼女を鼻で笑つてその武器を何処かにかへと収める。

「 あ」

「…ふん。音に聞こえた武神も、不意を衝かれればこんなもんさね」「貴様はッ！」

「・・・」こんな所に隠し通路かい。さて、鼠を炙り出すとしようかねえ」

ヤームの声を、いや二人の存在自体を歯牙にもかけぬまま、先ほどまで彼らが隠れていた通路に向かつて片手を上げた。

その服の袖から滑り出るようにして、大口を持ったヘビにも似た化物たちが何匹も飛び込んでいく。

「さ、さつきは、よ、よくもやつてくれたんだな！」

今気付いた、と言つよつに、ロープの人物はそこで漸く一人に目を向けて。

視線に温かみなど欠片も無い、まるで蛇のようだ、と一人は思う。

が、しかし、その視線がすうと細められ、蛇のよつだ、と言つの
は間違いだつたと二人は悟る。

眼前にいるのは、紛れも無く化け物だ。

「・・・雑魚どもが意外にしづとい。いや、利用価値はあるか
？」

何かを思いついたようにそう呟くと、そのフードを体から落とす。
中から現れたのは、予想もしなかつた姿で。

「　　」

そして彼らを驚愕させた。

それより数分後

地下下水道をエンジン音をけたましく響かせながら、滑るよう
に進む一隻のボート。船上にあるのは美神たちの姿。そしてそのボ
ートを追いかける先ほどフードの人物が放った大口の化物たち。

「ビッグイーター？！ それにしてもあの数つて反則じゃない？！」

ビッグイーターと呼ばれた化物たちの、その数、およそ50匹。周囲の状況と足手纏いと保護対象のことを考えればとりあえず。

「三十六計逃げるにしかず！スーパー＝トロター＝ボブーストチャージャー、オンシ！」

怪しそうだと云つたが、安全性に全く気を使つてないのではないかと思わせるような装置のレバーを引っ張ると、案の定爆音とともに吹っ飛びのような加速で下水道を駆け抜けるボート。

「うひやあああああ……！」

「……あやつまつ」

「よじつ！追いついてこれないみたいね……」そのまま一気に東京湾まで抜けるわよつ……！」

「 美神さん！前つ！」

しかし下水道の出口には鋼鉄製の柵がある。

いくら多少の改造をほどこされたボートとは言へ、流石に鋼鉄で出来た柵に真正面からぶつかっても平氣、と言ひ訳ではない。

むしろひから側があつたり碎け散つて、そのまま魚のえさになるのが関の山だらけ。

しかし、美神は余裕の表情で、ボートに備え付けてあつた小さな引き出しを引っ張り、中から小ぶりなりモコンを取り出した。

そしてそれを見せつけるように心配げな声を上げたおキヌに見えるように、目の前を塞ぐ柵に向けて操作して見せる。

「大丈夫よ、ちゃんとスイッチ一発で開くよ！」してあるわよ」

が、開かない。

何度押しても開かない。

美神がリモコンを操作した後も、柵は依然としてその存在を示していた。

「あれ？ …おキヌちゃん、乾電池とか持っていないわよね？」

「美神さーーーん！…！」

東京湾

静かな夜であった。辺りには船の姿も無く、近くには観光スポットも無く倉庫が広がるばかり、だつた。突如爆音と閃光がその静寂を切り裂くまでは。

「備えあれば憂いなしつ……」

「どにからそんなもの手に入れたんですか?—」

「お金があれば大抵のものは手に入るのよ、おキヌちゃん」

「へー、『からしにこふ』とか『くれいもあ』っていうんでござる
かー」

「……うん、そう」

バズーカを肩に担いで未だ異常な速度ですっとばす船上にて勝ち
誇る美神と、その姿に思わず突っ込むおキヌ。その後ろでは、簡易
な武器庫と言うか兵器庫となつてている船の倉庫を覗いたお子様二人
がなにやら忙しそうやつている。

教育に悪いとか言う前に、誰も何故か手慣れた様子で武器を扱い
ながら、何処となく得意そうに横島に説明する天竜には突っ込まな
かった。

突つ込めなかつたとも言つが。

星もあまり見えない夜空の下、東京湾に飛び出したボート。そし
て

『キシャアツ!—』

空から降り注ぐ閃光と、それに吹つ飛ばされるビッグイーター。

「美神おねーさんーあそこー！」

忠夫が指差す方を見てみれば、そこにあるのは左手で閃光を放つた後的小竜姫と。

そして、先ほど事務所に襲撃をかけた竜族たちの姿。

だが、それは

「2対1とは卑怯なーー！」

どう見ても小竜姫と彼らが激しく空中戦を繰り広げている姿だった。

だが、地力の差か。見ている内にあっさりと小竜姫が2体をその手に持った神剣で撃墜する。海に落ちた竜族たちを眺めた後、そのまま手招きし、岸を指し示す小竜姫。

「さつすが武神ねー。なかなかやるじゃない

美神たちは、こちらの最強戦力と無事に合流できた事で安堵しながら、その誘導に従つて近くの倉庫街の桟橋へと船を着けるのだった。

「無事でしたか、天竜姫様」

特に2対1であつても怪我をした様子も無く、安堵した様子で天竜に声を賭ける小竜姫。

「どうやらそつちも無事だつたようね、小竜姫。いきなり居なくなつちやうから、どうしたのかと思つたわよ」

「（心配をかけたよう）で…」

舞い降りてきた小竜姫を正面に、美神、おキヌが並び、更にその後ろに天竜と横島のお子様コンビ。

「さ、天竜姫様こちらへ。早く妙神山へ戻りましょ（）」

美神とおキヌの間をすり抜け、駆け出した小竜姫は、勢いそのままで天竜の前に立ち、手を伸ばす。言われるままにその手に向かって歩きだす天竜。何処となくほつとした様子であり、やはり小さいその身にはこれまで逃避行は負担となつていたようである。

しかし、その歩みを止める者が、進み出よつとした天竜の手を握つて放さない者がいた。

「…どうかされましたか？」

「犬飼君？」

小竜姫と美神の問い合わせに答えず、ただ鼻を鳴らして辺りの匂いを嗅ぐ忠夫。

「美神おねーさん」

「なに？」

「小竜姫様とやらば、なんでいざるか？」

「わつきも重つたでしょ？ 武神よ、竜神族の、ね」

「…天竜からは、良い香りがするでござる。お口様の様な、暖かな匂いでござる」

「……」

不思議そうに横島を見る小竜姫。

だが、その表情の裏には、微かにではあるが苛立ちが見え隠れしている。

そんな小竜姫の変化と横島の言葉に、美神は僅かに腰を落として神通棍に手を伸ばす。

「ですから、私が迎えにつ」

「だが！ め主には…全く、何も匂いが『無い』のでござるのよつー」

叫び、木刀でなくその中の仕込み刀を抜き放ち、小竜姫に向かって構える忠夫。

そしてその言葉を聞くと同時に懐から神通棍を取り出し輝かせる美神。

「…何者よ、あんた」

「み、美神さんまで、一体何を仰るのですか？！」

「その子は人狼よ。その直感と超感覚、知らない訳が無いわよね？」

「りゅ、竜神族の言葉が信じられないと?...」

「あんたが 本物ならね!」

そう言い放ち小竜姫に向かつて神通棍を振り下ろす。

「チイツ!」

が、小竜姫は舌打ちすると、腰から剣を抜き放ち、美神によつて振り下ろされた神通棍と頭の間に際どい所でその刃を差し込む事に成功した。

「正体を現すで!」
「...」

が、流石にその体勢で背後から追撃に放たれた横島の一撃を防ぐ手段は無く、その身に刃を受けながらも、強引に身を捻つて跳躍して避けた小竜姫は いや、その姿は既に小竜姫ではなくなっている。

「小僧がつ! 一度ならず一度までもつ!」

偽装をといた、紫色の長髪を棚引かせた蛇の印象を受ける女へと変化していた。

數十日前、元美神除靈事務所

「　　つ……」

彼らを驚愕させたのは、フードの中から現れたその姿。

「ふふふ…どうだい、そっくりだらう~」

その姿は、確かに先ほど倒し、未だ瓦礫の中に姿を消したままの小竜姫そのもの。

「な、なんのつもりだっ！」

「さあて、ね。あんた達を惑わせる為かもよ~」

「ふ、ふざけるんじゃないんだなっ！」

「さあ、眷屬達も目標を見つけたみたいだし、せこせこ踊つてちょうだい」

そう言い残し、飛び立つ小竜姫の姿をした何か。

「追うぞ、イーム！」

「わ、分かったんだな！」

そして、それを追いかけて飛び立つ竜族達。

彼らはそのまま東京湾上空まで飛び続け、突然聞こえた爆音に海上を見下ろせば煙を突き破りかゝ飛んでくる一台のボート。

『キシャアツ！…』

そしてその後ろから這い出てきたビッグイーターたちを振り向きてまの掌からの閃光で吹き飛ばす小竜姫の姿をした何者か。

「つ！ なんのつもりだ！」

「これであいつらにとつて、『味方に見える』のはどうだらうねえ？」

「しまった！」

黒幕の手のひらで踊らされたことに気付いた彼らは、懸命にその事を伝えようとするも、それを見逃す相手ではない。伝えに行こうとしてもまず妨害が入る。しかももし足止めに成功し、美神達に真実を伝えようとも、果して彼女達が信じてくれるだろうか？

つい先ほどまで、天竜を追いかけまわしていた彼らを、まさか本人もいないのに小竜姫には許しをもらつたから、と言えばホイホイ信じてくれるような相手もあるまい。

小竜姫の顔をした誰かが、美神達に騙されるな、と言つてしまえばそれまで。後は敵を倒すのと同じ手順で、口を塞がれて終わりだ。八方塞がりでしかない。

「ち、畜生があああああつ！…」

数が多くうると所詮は下つ端竜族。相手が悪すぎたせいもあって、奮戦空しく退場させられた。

これで準備は整つた。あとは何食わぬ顔をして天竜姫を攫つてしまえば、向こうが気付いた時には既に遅い。

後に残るのは顔も、正体も分からぬ何者かが天竜姫を殺害したと言ふ事実だけ。地上の竜族たちと竜神族たちとの関係悪化は間違いない筈だった。

半人狼の少年がイレギュラーと成りさえしなければ。

「力づくってのは性に合わないんだがねえ…此処まできたらそんなことも言つてられないか」

「で、黒幕さん？　いい加減諦めて、名前ぐらい名乗つたらどうかしら？」

「ふふふ…諦めて？　いい冗談だ。その気概と、小僧の意外さに免じて名乗つてあげようじゃないか」

その言葉とともに放たれたのは、圧倒的なまでの、小竜姫に匹敵さえする巨大な魔力。

「…やば」

「私の名前は」

眩きとともに一瞬で、神通棍を油断せずに構えていた筈の美神の懷に飛び込み、言葉の続きを耳元に囁く。

「メドーサつてのや。冥土の土産に、持つて行きな

いつそ優しささえ籠つたようなその眩きとともに放たれた、先端が2つに分かれた槍は、明確な殺意とともに美神を一撃で吹き飛ばした。

「あ、がはっ！」

「ほう？今のを喰らつてたかが人間が生き延びるとは、ねえ」

吹き飛ばされた美神は、そのまま倉庫の壁に叩きつけられ、沈黙する。息はあるようだが、もはや動ける状態にない。そして残ったのは、戦闘能力の無い幽霊少女と竜神の姫。そして。

「グルアツー！」

狼の「」とく、その刃を携え、こちらを見てさえいなメドーサに向かつて飛び掛る半人狼の少年。

「ふん。思い切りはいい。その意氣も悪くない。だが 弱い

視線も向けぬままの横薙ぎの一閃。一振りで美神と同様に吹き飛ばされ、彼女より軽い身体は容赦なく地面と触れ合いながら、壁の様な止める物も無かつた事もあってか夜の暗闇の向こうへと消えていく。

地面に叩きつけられ、只の一撃で体のあちこちからは出血し、お

そらく骨も何本か持つて行かれている。

「…ふん」

暗闇の向こうで、完全に動く気配が無いのを感じ取つて、鼻で笑つたメドーサは、その歩みを残つた2人へと向ける。

「や、やらせません…！」

「……」

その前には、怯える竜神の少女と、それを庇うように手を広げて立つおキヌ。その数メートル前で立ち止まつたメドーサは、誰にも聞こえない声でそつと呟いた。

「…あんた、幸せ者だねえ」

痛い。

体中の骨が軋んでいるし、切り傷、擦り傷なんて数える事さえしつかない。

痛い。

胸の辺りが熱い。多分2、3本は折れてる。

イタイ。

一撃。只の一撃でもうボロボロだ。速い、重い、鋭い。そして容赦の無い、だが殺す気は無い一撃。

怖い！

視界は歪んでいる。頭がふらふらする。もうこのまま田を瞑つてしまいたい。

死にたくない

勝てる気がしない。
あんなのに勝てる訳が無いじゃないか。

「……いいさ。纏めて死にな。これだけたくさんお仲間が居れば、出の旅路も怖くなんて無いだろう?」

相手が悪かつたんだ。いいじゃないか、一矢は報いた、良くやつたよ。

「美神さん！横島さん！」
だれかっ！」

死にたく無い。

死にたく無いんだ。

痛いのも、怖いのも本当に嫌だ。

助けて、犬飼君！」

それがどうしたあつ！！

「…存外にしぶとい。いいぞ、纏めて死になつ！」

地を這いながら、土を噛み、爪を立て、もがく様にして立ちあがる。

傍らに落ちていた刀を力の入らない手で握りしめ、駆け出す。

身体が痛い。足がふらつく。痛みで視界が歪む。違う、痛みではなく、何時の間にか零れていた涙で視界がけぶる。

怖いから、痛いから、死にたくないから、涙が溢れる。

だが、もう涙は続かない。続かせない。

繰り出される槍が見えた。死、その物の様な鈍い輝きが顔に向かつて飛んでくる。

この距離、この速度、そしてこの身体。

避けられるか、と問われれば、無理だ、不可能だと答えただひつ。

無理は通らない。道理は引っ込まない。

戦いとは常にパワーゲーム。強い者が勝ち、弱い者が負ける。当然で、当たり前で、自然な事だ。

天秤を傾けるなら見合った錘が必要であるし、未だこの身はその錘には足り得ない。

だが、だからこそ吼える。

「死んでたまるかっ！！！ 拙者が死んだら！ 誰が護る…………」

そして、パワーゲームだからこそ、死に物狂いでもがく者だからこそ、チャンスの女神はその前髪を掴む機会をくれるのだ。

『良く吼えた』『良く言った』

『ならば』

『見せよ、未熟者』『証明せよ、小僧』

いつか聞いた、銃声が後から来る超長距離からの射撃音。

その一撃は忠夫に向かつて繰り出された槍を粉碎し、まるでメド一サを避けるように、だがその足元に確実に着弾し、そこから粘度の高い煙を吐き出す。

そして、魔弾の音はもう一つ。

「がはつ！」

その一発が、忠夫の胸に直撃する。

しかしその体を貫く衝撃とは裏腹に、弾頭は忠夫の体中に、金色の光を放ちながら拡散する。

「…間接部・ロック・解除。火器管制・停止。望遠モード・停止。
改良型・ロングレンジライフル・『テュポーン』・異常・なし。通
常モード・復帰」

「ふむ、聞くまでも無いが、着弾はどうじや、マリア?」

「サーチ 敵性存在・武器・破壊成功。撹乱・成功。特殊弾頭・
着弾・確認。指示遂行率・100%と・判断します」

「よしよし。満月の光のみでできた月光石と、我が鍊金術の粹を集
めた解呪薬。うまいこと効いてくれるじゃん」

「ドクター・カオス。引き続き・ダイレクト・サポート・可能です
が?」

「こりんよ

「しかし

「大丈夫じゃよ。そんなに必死にならんでもいいわい」

「ノー。ドクター・カオス。これは今後の・状況を鑑みて「いつに
なく饒舌じやのう、マリア?」 ソーリー・ドクター・カオス」

「まあ見ておれ。あの程度で死にやせんだらうが、今回のはちとハ
ンデがきついからのう。只のご褒美じやよ、この前の件の、な」

「理解・できません」

「冷たいのう

「くわおつーー。」

流石『三一ロッパの魔王』謹製。その煙幕がメドーサを数十秒も惑わせたのは驚くべき、といつてもいいだろ？。そして、「彼」にはそれだけあれば十分であつた。

メドーサがなんとか煙を吹き飛ばし、辺りを確認してみれば既に誰の姿も無い。美神も。おキヌも。天竜姫も。横島も。

「つづあ～！ 痛え！ あの爺、ぜつてーわざとこんな使い方しゃがつたな！」

「……誰？」

「おひ、気付いたか天竜」

「……犬飼君？」

「おひ、良く分つたな。ぴんぽ～ん！ 大当たり～～」

「……でも」

「まあまあ、俺にも実際よくわからんし。とりあえず、賞品はあのおねーさんに帰つてもらひつてので、どうかな？」

「なぜだつ！ たかが小僧一人で全員を逃がせる筈がないつ！」

狂乱したように辺りの建物に魔力砲を打ちながら、ひたすら飛び回り捜索するメドーサ。

「どいだー！ どいにい があつーー」

その横手から、突然飛んで来た鉄骨は、狙いバツチリメドーサに直撃する。そしてその衝撃に動きを止めたメドーサに向かつて次々と飛来するコンクリートの塊や、マンホールの蓋、ベンチや工具のたっぷり詰まつた工具箱。

「があああああつーー」

とつさに手に持つ折れた槍でいくらかは打ち落とすも、全方位から機関銃のごとくぶつ飛んでくる巨大な質量。支えきれる訳も無く、なすすべもなく、只、打ち据えられる。

「ふざ…けるなあああああつーー」

魔力を吐き出し、周囲に落ちた破片と、未だに飛んでくる壁や鉄の塊を跳ね返す。

が、何時までも出来るわけがない。辺りごぼりまく様に魔力砲を打ち込み、元を断たんと移動しながら連射する。

が、止まらない。

避ける先に飛んでくる。それを避けねば今度はさらにその先を読むように飛んでくる。何とか打ち払つて反撃の魔力砲を飛んできた方向へ打ち込めば、しかし全く見当違ひの方向から散弾銃のよつてに碎けたコンクリートの群れが高速で飛んでくる。

徐々に足場は失われ、だが空中へ逃げよつとすればその飛び立つ為の一瞬の硬直で狙い澄ましたように痛撃を加えられ、体勢を崩して追い込まれ、再び魔力の放射で無理やり時間を稼がざるを得ない。

まるで、獲物が突然獵師に変わつたような、無茶苦茶ながらもじりじりと体力と魔力を奪われる展開になりつつある。

しかも、確かに、非常識だが、誰かが投げている。しかも縦横無尽に倉庫街を駆け回りながら。だが、なぜ足音がしない?いや
気配が無い?

「さて、問題です」

「どう　いや、誰だ貴様あつ!—!—!」

「人狼にとって、狩りは日常。しかし、相手は凶暴で凶悪な野生の獸。仕留めるのに有効な手段の一つとは?」

「出て来い！ 姿をあらわせえつ……。」

何処からとも無く、いや、周り全てから聞こえてくるよいつな、そんな声。その戯言が喋る間も、ひっきりなしに飛んでくる「コンクリートの群。よく見れば、周辺の頑丈なはずの倉庫の壁や、地面が凄まじい勢いでがれていっているのが分かつたろう。もはや打ち返す余裕も無く、ひたすら避けつづけるメドーサ。気付けば辺りにはそこらじゅうに障害物ができている。

そして、そのおかげた弾幕が唐突に途切れる。

「答えは、相手を興奮させて、じけな氣配を完全に消して」

「つ……！」

「急所を一突きで仕留める、つてな感じで」

その言葉は、背後から、耳元に囁くよいにして語られた。

『狼の牙。 それは何の為に？』

『獲物を狩る為、じゃないので』「やるか？」

『では、獲物は何の為に？』

『えーと？』

『なぜ我らにはこれほどまでに強力な牙がある？』

『護るため、かな？』

『それでは足らぬ。そもそも一つの答えであるが、まだ足らぬ』

『じゃあ、何が足らないんだ？』

『護る為の牙をお前は知った。ならば、それを持つて、次の牙を見

つけてみせる』

「牙?」

『人狼としての、身体強化。月の力を受けた靈力の増幅は、お前の力を、人狼の力をさらに高めるだろ?』

「…殴り合えってか?」

『さあな?』

それはまるで夢の中で。バイバーの呪いが月の力となんだか怪しい力で無理やり解けていく中で。いつか見た影法師との会合であった。

横島本人は気付かぬうちに、その身体は子どもから少年へと、元の姿へと成長していく。

彼の夢の記憶は、其処まで途切れている。

「…何者だ?」

メドーサの声には、既に先程までの激昂も、戸惑いも無い。

完全に冷静さを取り戻しつつも、後ろにいる誰かを振り向く事無く、その気配に向かつて声を賭ける。

「さあね?」

「人狼だと言つたな? サツキのガキの仲間か?」

「どうだろ?」

だが、対する背後の声にも起伏は無い。だが平坦なままに、どこかふざけた調子があるが、同時に『こいつは何かをやる』と感じさせるような決意があった。

「答える気は無し、か」

「とりあえず、今日はこれでお開きにしません?」

「……殺さないのか?」

「まだまだ切り札持ってるでしょ? 互いに痛い目見る前に、こいらが引き時だと思いませんか?」

「…ふん、狸が」

「人狼だつての」

その会話を最後に、あつさりとその姿を消すメドーサ。

「さつすがプロ。引き退きも鮮やか。あああああ、えー乳や。嫁に誘つたら来てくれんかな!?」

そう呴いたのは、青年へと姿を変えた犬飼忠夫だった。

「横島さん・いえ・犬飼忠夫・及び・人狼のデータライブラリの・修正を・求めます」

「いらんよ。あれほどの膂力と速度、並みの人狼では不可能じや」

「彼は・半人狼では？」

「そうじよ？ ただ、『今まで靈力も使わずに普通の人狼並みの力を出しておつた異常な個体』、じゃがな」

「画像データ・保存・プロテクト…完了」

「いやいや、えーもんみせてもうつたわこ。それで、歸るやマリア」

—イエス・ドクター・カオス

ヨーロッパの魔王と、
鋼鉄の少女を見送るのは、只、半分に分か
れた月のみ。

ふと美神が眼を覚ますと、そこは彼女がGS見習い時代にお世話を
になつた部屋のベッドの上だつた。

はつきりとしない頭を押さえようと手を上げると、引き繻られる
ようにして脇腹のあたりから激痛が全身に走つていぐ。

「いたたたた！」

「美神さん！ 気付いたんですね！ 動かないでください…今、手
当てしている所ですから」

「おキヌちゃん？ ええと…つー…あのクソおばはんッ…！ いだ
だだだつ…！」

「あああ！だから動かないでくださいってばー！」

「「小竜姫様あああつー！」

「…なんですかもつ、つるむせいですよ、鬼門。あ、あれ？ ここは
…つ！ 天竜姫様は？！ いだだだだだつ…！」

「あああ！小竜姫様も大人しくしてくださいってばー！」

「…・・・ひつひつ。体中が痛いつす〜〜」

「横島さん！ 起きたんですか！」

一夜明けて唐巣神父の教会にて、あの後事務所を失つた美神たち
を運んだ忠夫はひとまず見知った彼を頼り、事情を話した後彼女達

を預けて小竜姫達の搜索を開始。

ボロボロになつた服の着替えやら手当やらをおキヌにお願いし、ついでに天竜にもおキヌを手伝つように頼んだ横島は、説明を求める事も無く救急箱やベッドの準備に教会へ駆け戻つていく唐巣神父とピートに頭を下げたい気持ちになりつつも、姿の見えないままの者達を放つておくわけにも行かないと急いで走りだした。

それこそ神速といった速度で、彼女達を背負るやら首にしがみ付かせるやら肩を掴ませるやらとした非常に奇妙な塊が、深夜とはいえて内を駆け巡つたのだから怪談の一つ二つ発生していそうである。

そして程なく事務所跡地で回収、そのまま駆け戻つた所で、今度はガス欠に陥つた忠夫がダウン。元が彼の力とはいえ、いきなりのその身体能力に体の方が慣れていなかつた為か全身に激痛が走り、氣絶。

全員目が覚めた時に最初に放つた言葉が冒頭のもの、となる。

程なくして、朝の礼拝を済ませた唐巣神父がまるで病院の一室と化したようなその部屋に入つてくる。

「おや、階起きたようだね」

「あら、先生。すいません、いきなりこんなみつともない格好で」

「いやいや、かまわんよ。それよりも、一体何があつたんだい？
美神君どころか、小竜姫様まで居られるじゃないか」

「それが、私にも何がなんだか…小竜姫様が此処まで運んでくれた

のかしりつ。

「いいや、横島君だよ。昨夜遅く、いきなり飛び込んできてね」

体のあちこちに包帯を巻いた美神に対し、手に持っている朝食代わりの果物 近くの住民のおすそ分けである を駆け寄つてきた天竜姫に渡しながらそつ答える唐巣神父。

「へ？ 横島君、ですか？」

「そうだが？」

「おつきの方の？」

「そもそも小さい横島君を私は見ていないのだがね？パイパーにのろわれたという話は君からも聞いていたが、以前見た横島君だったよ。ほら、あそこ」

「へ？」

そう言わされて見てみれば、そこには確かに元に戻った横島。

「……ん」

「いや、天竜。自分で食べられるから…」

「……ん…」

「…あーん」

「 」

なんだかほのぼのとした空間を作り上げていた。

体がまともに動かないので、ベッドと意外に元気そうだつた鬼門たちに運んでもらい、ソファーに座りなおした忠夫を正面に美神と小竜姫。

忠夫の座っているソファーの前にあつた机を挟んで置いてあつた1人掛けのソファーを動かして、右に唐巣神父、左にピートが腰掛ける。ちょうど机を囲んだ形になる。鬼門達はベッドに体を起こした小竜姫の横に控えているし、おキヌはこちらも同様に体を起こした美神の隣に浮かんでいる。天竜はといえば、何故か忠夫の膝の上。

懺悔を求める神父の視線が痛かつた。

「… 横島君、犯罪だよ？」

「横島さん… そんな、子供に手を出すなんて。自首してください」

そう苦しげな声で忠夫に語りかける唐巣神父とその弟子ピート。

「て、天竜姫様？！ あああ、また不祥事が……！」

「「お、御氣を確かに！」」

頭を抱えて取り乱す小竜姫と、その横で慌てる鬼門達。

「おキヌちゃん。すぐに警察に通報…は、色々面倒くさいわね。神通棍と玉葱を」

「はいっー。」

そして冷静に見える美神がおキヌに指示を出す。迷わずそれに従つおキヌ。

「つてちょっと待てーーー！ 僕が一体何したッちゅーんやーーー！
…お、ありがと天竜」

「「「「自分の姿をよく見てみなさい」「」「」「」

「あつあつあつ」

「……」

慌てて突っ込むも、膝の上に天竜を乗せ、彼女手すから剥いたでこぼこの林檎を「食べて」とばかりに突き出されていく格好である。しかも天竜姫の表情が満足げであるといふこれらの素因は、忠夫の発言権そのものを著しく磨り減らしていった。

しかし忠夫もこのままでは犯罪者の烙印を押される所が、正面の上司と膝の上の少女の護衛によつてこの世から消されてしまう。

「ち、違いますよー！ 天竜は友達であつて、天竜姫に対しても無礼なつ！」
「わわわー！」

そう否定の言葉を発するも、小竜姫が何処からか取り出した神剣を一拳動で確實にこぢらの頭部に向かつて投げつけてくる。

「あつぶなーー！」

「か、片手で止めますか今のを…」

「……お～
ぱぱぱぱち

正に目にも止まらぬ速さで投げつけられた其れを、完璧に見切つて柄の部分を握りとめる忠夫。畠然とするのはむしろ其れを見ていた周りの者達であった。

無理に動いたせいで体中に走った激痛に必死に痛みと涙を堪える小竜姫と、横島の膝の上で拍手する天竜姫は除く。

「いや、実は」

とりあえず場の空気が変わった事を利用して、よつやく昨夜の説明に入る忠夫であった。

「あの後、そんな事になつてたのね…」

「ぐつー… 武神ともあうつものが…」

メドーサに言い様にしてやられた美神と小竜姫たちは悔しげに咳きながら布団を握り締める。

「え…じゃあこままで靈力無しでアレだけの事やつてたんですか
？？」

「君はつづく非常識だね…」

「うわあ、ついで頭痛を堪える仕草をする唐巣達。

「あ、あの、ありがとう」「やれこました」

「……ありがと」

「いやいや、俺もおキヌちゃんと天竜の声が聞こえなかつたら頑張れなかつたわけだし」

「それは私達のために頑張つてくれたつことですかね?だったら、やつぱりお礼を言わないと……」

「……その通り」

「そしてなんかフラグでも立つたか?」とこつもつな反応をするおキヌと天竜姫にひたすら困惑の忠夫。

「「わしら、結局何もしてないの?」」

「でも、よかつたよ」

そして部屋の隅っこでその巨体を縮めて黄畳れる鬼門達。

「ええ、監無事に帰れた訳ですし、横島さんのおかげですよ」

「ん? ああ、それもあるけど」

もう齒こて、監を見回す忠夫。

「…あんな馬鹿みたいに強い奴から、護れたんだなあって思つて、
わ」

その視線には、確かに誇りと、そして大きな喜び、それよりも大きな安堵がある。

「……あ」

最も近くでその表情を見た天竜姫は、心の底から湧き出てくる感情に戸惑いを感じていた。

「へえ…いい顔をするよ！」なつたじやないか、横島君」

「へ？」

「どうやら、君にひとつでも得る物の多かつた一夜となつたようだね」

そう言い残し、唐巣神父は立ち上がる。

「さて、これから依頼が入つてるのでね。夜まで出かけさせてもらつよ。行こうかピート君」

「はい、先生」

そして彼らはそのまま出て行つた。

「さすがつすね～」

「え？ なにがですか？」

「夜まで帰つてこないことは、それまでに唐巣神父に聞かれちやまざいことがあるんなら相談しておいて、それから協力できることがあるならそれを話してくれれば協力するって事だよ、おキヌちやん」

「へへ、そりなんですか横島さん」

「…あんた、ちょっと変わった?」

「へ?」

神父の心遣いを弟子である美神と同じ程度に正確に受け止めた、ところに少々納得はいかないもの、それでもやはり子供になる前とはちょっと違う。そう考えると、やつぱり変わったよつとも思ひし、前からやつだつたようにも思えてくる。

成長した、ところのだらうか。

「それで、どうやってあのメドーサつて名乗つた奴を追い払つた訳?あんたがなんかやつたんでしょ?」

「メドーサつ?! 竜族ブラックリストの中でもトップクラスの奴じゃないですか!」

「あー、やっぱりそんな奴でしたか。ええ乳しどつたのに残念やなー」

「で、死にたいのか喋るのかどつちかにしたじりひへ」

「……むー」

「横島さん？」

正面と真下から突き刺さるよつた視線を受け、おキヌの輝く黒い笑顔を直視した忠夫は慌てて意識を過去の映像から引き戻す。

「ええっと、どうやってといわれましても… ただのハッタリなんすけど」

「「「はあ?..」」」

実際の所、忠夫が背後に回つたとして一撃で、しかも反撃の暇さえ与えずに仕留めることができるか、と言われば答えははつきりと「ノー」である。靈力に目覚めたとはい、その力はあくまでも身体強化。内向きの力なのであるから、靈的な存在である魔族に対して効果的な攻撃を繰り出せたか、といつと無理だ。

身体強化で可能なのは拳や足を使つた物理的な攻撃のみ。相手が靈的な存在である以上はこちらも靈的な攻撃を行なわない限り致命傷とはなりえない。つまり、あの時点で忠夫は手詰まりになつていたのである。

「ですから、こっちにもまだまだ切り札はあるぞー、って思わせることで、なんとか痛み分けつていう形で引いてもらつたようなもんですよ。逆に相手が損得勘定のできない馬鹿だつたら死んでましたねー」

「…なんと言ひ無茶を」

「…馬鹿はあんたよ」

そう呟き再び頭を抱える美神と小竜姫。

「なんせ初めて使ったわけですからねー。おかげでもう体中ボロボロ」

忠夫の体、本当の所は結構ヤバイ状態である。今も人狼としての超回復が働いているとはいえ、昨日酷使した足は動かすことさえ辛い状態。いくら軽いとはいえ天竜姫も結構な負担になつていいはずであるが、そこを顔に出さない辺りが意地という奴である。

「……ごめんなさい」

「天竜？別に気にするこたあないぞ」

「……でも」

「え、え、え？」

その言葉を聞いていたたまれなくなつたのか、瞳から涙を零す天竜姫。それを見て慌てて周囲に助けを求める視線を飛ばすが、誰も彼も見てみぬ振りをするばかり。諦めたように「ふう」と溜息をついた忠夫は天竜姫を抱えなおし、自分の目線と合わせて優しく語りかけた。

「女の子が泣いちゃだめだろ？俺は天竜が笑つて居られるようにがんばったんだから、さ」

「……でも」

「天竜はまだまだ子供だろ？……それなら、大人になつてから恩返しでもしてくれればいいさ」

言葉とともに涙を拭き取る忠夫。その表情に嘘偽りの色は一欠けらもなく、ただ、照れくさそうに笑っているだけ。

「……あ」

彼の手から伝わる暖かさ。言葉に籠った気恥ずかしさ。表情に表れる優しさ。そんなものを受けた天竜姫の心から溢れきった感情は頭の角の部分から零れ出し、彼女の頭に新たな角を生み出していた。

ぽとん、と落ちた天竜の角と、目の前で一瞬で生え換わった新たな角。

状況を理解できない横島達の眼に、言葉も出ないほどに驚いて口を開け閉めしている小竜姫達が見えた。

「へつ？」

「……これで大人」

「へつ？」

「りゅ、竜神族の角の生え変わりは大人になつた証とされます。生え変わりとともに神通力などが使えるようになるのですが、こんなに突然…」

「……だから、皆に恩返し」

そう言葉を残し、忠夫の膝から降りていった天竜姫は、そのまま小竜姫のいるベッドの傍らまで歩いていく。

「……小竜姫、心配かけて御免なさい」

「いつ！ いいえ、そんなもつたいたいないつ！」

「……私は誓い告げるもの。武を司る龍の癒しをもって、天なる龍の謝意とする」

頭を下げた天竜が、体を起こし告げた祝詞に導かれるように、その体から舞い上がった光の粒が小竜姫に降り注ぐ。

「！」、これは……」

全ての光の粒子が小竜姫に降り注ぐと共に、小竜姫の体からは全ての傷が跡形もなく消えていた。そのことに驚く小竜姫を余所に、今度は美神の所に歩み寄る。

「……ボート、楽しかった。ありがとう」

「……いいけどね」

そんな理由なのか、となんとなく納得のいかない表情であるものの、美神もその言葉を受け止める。

「……私は誓い告げるもの。強き乙女の癒しをもって、天なる龍の感謝とする」

再び天竜の体から舞い上がった光の粒子が、小竜姫と同様に美神

の傷を癒しきる。そして最後に忠夫の所に駆け寄つた天竜姫はソファーに座る忠夫の横に飛び乗る。

「お、俺にもやつてくれんの？」

「……護つてくれて、ありがとう。遊んでくれて、嬉しかった。だ
から」

にこりと笑つてそう告げると、再び天竜姫は祝詞を唱える。

「……私は誓い求めるもの。人と狼の狭間の者への誓いを持つて、天なる竜の想いとなれ」

「へこ？」

祝詞が終わると同時に、忠夫の頭を引き寄せて、その唇を奪つた少女は、につこりと微笑むと再び忠夫の膝の上に陣取つた。

後に残されたのは何が起きたのかわからないと言うか、わかりたくないと言つた様子の忠夫と、その様子を見て「不祥事です不祥事です不祥事です・・・」と頭を抱えて咳きつづける小竜姫。

相変わらず部屋の隅で膝を抱えている鬼門達。「あらあら」と果てしなく恥ろしい笑顔を浮かべながら横島達を眺めるおキヌ。それを見て怯えてベッドの上で体を縮めながら「あっちゃん」という感じで顔に手を当てる美神。そしてにこにこと笑う天竜姫だった。

「……また」

「お、おひ」

「全く、えらい散財だわ」

「……竜神王陛下になんと」「報告すればよいのやら」

「あらあら」

「……俗界の女性も変わったの」「」

何があつたかは定かではないが、真つ青な顔をした忠夫を前に天竜達は別れの挨拶をしていた。

「ええと、それでは、今回の『』協力に感謝します」

「感謝はいいから報酬の方お願ひね」

「はあ……」

「……落ち着いたら迎えに来る」

「いや、あの、犯罪者になつちゃうんですけど」

「へへ、まだ犯罪者ではないとおひしゃる?」

「お、おキヌちやん?」

最後の最後まで嵐を巻き起しおながら、彼女達は空へと消えていったのであった。

「さて、事務所は無くなっちゃったし、次の事務所を探さないとね
ー

「どうするんですか？」

「ま、とつあえず適当に不動産屋でも当たるわ。あなたも今日は帰
んなさい」

「うーーっす」

答えると忠夫は家路に着く。その後姿を見送っていた美神に、背
後からかけられる声。

「G.Sの 美神 さんで すね？」

「そうだけど?」

「事務所は お入用では ないです か?」

ロングコートと顔を隠すつばの広い帽子。

片言と重づか、途切れ途切れに聞こえる言葉。

どうしてこうも厄介そで、でも靈感的にも断るに断れないよう
な依頼ばかり続くのか、と美神は一人ごめかみに指を当てるのだ
つた。

「兄上、遅いぞ」やるなあ

「おなか減つた」

「おなか減つた」

おおいつと、クリーンヒッター。ボールは転々と転がつて
ぱたぱた。 × 3

ショート素早く送球つー・アウトツー・判定はアウトですっ！

ぱたぱた・・・ぱた。 × 3

「む、やはつやわつは楽しこぞ」やるなあ夫は里では見せてくれんからな

「やひやつて尻尾を振るから怒るんだらーが」

「しかし、『ればかりはビリショウも

カキーーン！

おおきいつーこれーは、おおきいつー

ぱたぱたぱたぱた。×3

「しかし、もう肉は無いのビリヤケルか」

「お前が食べ過ぎだつて犬飼」

「いや、お前の方が食べておる」

「そんなのビリヤケルもいじでしょ……」

「いや、これは……」

突然、人狼の親父達の額に閃光が光る（イメージ映像）。

「な、なんでビリヤケルかこの悪寒はつー父上つー」

「…久しぶりに感じたな、犬飼」

「ああ。これは間違いなく」

「な、なによ？」

「「チヨウロウガ現れた」」

「長老でビリヤケルか？」

「逃げるぞ！犬飼つーシロもそ「の娘も遅れるな！」

「「」の気配…あちらから来るぞ。拙者が殿をつとめる

「ちょっと、説明しなさいよ…」

「心配するな！見れば分かる…」

「きたぞつー」

遠吠えと共に現れたのは、半獣化した、人狼の里において、長老と呼ばれる老いた人狼であつた。

「き～さ～ま～らああああああつ…」

「「ひいつ…」

「「後ろに向かつて全速前進…」

「「な、なんド」「やるか（なのよ）あれはつ…」

「…長老が本氣で怒ると結構危険なのだ」

「「の前は、里が半壊したからな」

「あ、あれは天災つて言つたではござりんかああああつ…」

「ああ。そりや嘘だ」

「ちがつええええええええええええ…」

「ま～て～ええええええええええ…」

窓を蹴り破つて逃げ出していく4人組を追いかけて、なまはげもかくやと言つた様子の長老が追いかけていく。その暴虐の嵐の後、程なくしてコンビニで買い物を済ませた家主が帰ってきたが。

「な、なんじや」「いや…」

後に残されていたのは、扉のぶつ壊れた玄関と、溜め込んでおいたはずの燻製肉が一欠けらも残さず消滅している開け放たれた押入れ。所々に巨大な爪跡の残つた畳や壁と、部屋の中心に残された、黒いオーラを放つ風呂敷包み。

「「「シド。俺なんか悪い」としましたか?」

彼は呆然と立ちすくむしかなかつた訳で。

「やあ」再び此處を訪れてくれたようだね？そんな君に、今回はこんなお話だ。

平行世界は知っているね？

そう、今自分が存在している時間軸を一本のレールとするならば、その隣に無限に並ぶレールたち、といつのが近い表現かな。

レールはその先々で分岐していく、その世界はどんどんと分かたれていく訳だ。

このレールの分岐点、もちろんそれこそ無限に近くある訳だが、時に大きな分岐にぶつかることがある。そのとき、そのレールの上には必ず、世界に選ばれた存在つて言つのが、いるんだよ。

世界が滅びるかどうか、というまさしく己の死活問題に対しても世界が干渉する唯一の方法。それが「選ぶ」ということなんだよ。彼らは世界の鬼札。時に救い、時に滅びの要因とさえなる。

それでも世界は選びづける。彼ら、といつ表現はちょっと違つが、世界と言うのも中々難儀しているのかもしれないよ？

だから、やう。

そんなに憎むものじゃないのかもしれない、とだけ覚えておいてくれたまえ。

ふふふ、それでは

よこ野人。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3056y/>

月に吼える

2011年11月23日14時52分発行